

第4章 コザ暴動プロジェクトin大阪「都市と暴動」

1. 「コザ暴動プロジェクト in 大阪」の開催

沖縄班を中心とする2016年度事業として「コザ暴動プロジェクト in 大阪」と題したイベントを2016年12月16日から18日まで、大阪市立大学都市研究プラザの船場・西成プラザで開催した。主催組織として、研究代表者の山崎を中心とする「都市と暴動」実行委員会」を形式的に立ち上げ、共催組織として2015年に「コザ暴動プロジェクト」を沖縄市で始められた写真家國吉和夫氏を代表とする「コザ暴動」プロジェクト実行委員会」と大阪での学会組織側の受け皿となった人文地理学会政治地理研究部会(代表:北川眞也三重大学准教授)を置いた。資金面では本科学研究費補助金に加え、同じく山崎が代表となっていた科研費基盤研究B「グローバル化の新局面における政治空間の変容と新しいガバナンスへの展望」(課題番号15H03277)を用いた。



このイベントは単に学術的な観点から「コザ暴動」の意味を考えるというものではなく、写真展、街歩き、講演会、トークイベントといった多様な取り組みを通して、本研究のテーマである「軍事的圧力に抗う文化的実践」として事業自体を位置づけるものである。このイベントの開催経緯と内容については既に「大阪にやってきた「コザ暴動」」と題して、雑誌『時の眼—沖縄』批評誌N27』第8号(88-94頁、2017年)に掲載されている。ここではその原稿を一部修正して転載しておきたい。

2. 大阪にやってきた「コザ暴動」

1) そのもののきっかけ

私(山崎)が本誌編集者の比嘉豊光氏と初めて会ったのは、2015年12月20日(コザ暴動45年目)の夜であった。この日は國吉和夫氏(元琉球新報報道カメラマン)や比嘉氏らが沖縄市(旧コザ市)で企画した「コザ暴動プロジェクト」のギャラリートークが「一番街」と呼ばれるアーケード通りで開催された。

トークの後、近くの焼鳥屋で比嘉氏、トークに登壇されていた比屋根照夫氏(元琉球大学教授)、そして翌年4月に「コザ暴動プロジェクト in 東京」を開催されることになる明治大学教授の山内健治氏らが飲んでおられた。私は自己紹介して、名刺を渡したところ、その時皆さんはかなり酔っておられ、比屋根氏からは「お前は本土の人間か」などと、比嘉氏からは「学者は嫌いだ」などと言われた。

私は酒の席でそういう風に言われても全く気にならないタイプで、適当に聞き流していたのだが、比嘉氏からはさらに「大阪でもこういうイベントをやる気があるのか」と詰め寄られた。それに「はい」と返事したのが、今考えればこの企画に関わるきっかけだった。もっとも当の比嘉氏はそのことは全く覚えておられないのであるが。

2) 「コザ暴動」との関わり

私は1995年ごろから沖縄に関心を持ち始め、特に米軍統治期のコザの研究を始めたのは2004年ごろだった。その直接の理由は復帰前に琉球を統治していた琉球列島米国民政府(ユースカー、USCAR)の文書が1997年に機密解除になり、沖縄県公文書館が米国で撮影・収集した文書群について、2001年からオンライン検索できるようになったからである。

私はAサイン制度による対米売春・性病管理の文書を探していたが、当時はまだUSCAR公安局の文書などは国内では未公開だったので、私は直接米国メリーランド州にある国立公文書館別館でこれら未公開文書の収集を始めていた。その中にコザに関連する文書が多数存在し、既に『米軍が見たコザ暴動』(沖縄市平和文化振興課、1999年)で翻訳されていたコザ暴動関連の文書も含まれていた。私は2007年ごろから沖縄市での現地調査にも着手し、戦後の沖縄市(コザ市)の資料収集に取り組む沖縄市総務部総務課市史編集担当にも調査でお世話になるようになった。

米軍統治期のコザを考える上で、コザ暴動についても私は当然関心を持っていた。今回も登壇いただいた古堅宗光氏(元NPOコザまち社中幹事)が2010年に主宰し、市史編集担当も協力していた「コザ暴動を記録する会」による暴動参加・目撃者の聞き取り内容については、拙稿「軍民境界都市としてのコザ」(『持続と変容の沖縄社会』所収、ミネルヴァ書房、2014年)で分析していた。また、それを踏まえて2014年12月20日に市史編集担当が運営する戦後文化資料展示室「ヒストリートII」で「二つの「コザ騒動」」と題して講演も行っていたのである。

したがって、比嘉氏に「大阪でやる気があるのか」と聞かれた時には、「はい」と答えることに躊躇はなかった。そのあと、2016年4月に「コザ暴動プロジェクトin 東京」が開催される前に、最初のプロジェクトのコーディネーターをされた今郁義氏から「大阪でもやってほしい」という正式のご依頼をいただいた。それで東京での集会にもお邪魔し、その日のうちに「コザ暴動プロジェクト」実行委員会の皆さんにも、大阪開催の大まかなプランをお示した。

この時は東京での開催構成を踏襲することを考えていたのだが、東京での懇親会の席上、登壇者のお一人(本土出身者)から「コザ暴動のような暴動は本土ではありませんよね」と聞かれ、私は「おやっ」と思った。というのは巷間「暴動」と呼ばれるような出来事は国内を見ても、過去多々発生しており、私の勤務先に近い大阪市西成区の寄せ場「釜ヶ崎」では戦後24回もの「暴動」が起こっているし、歴史的には20世紀の初めに東京の日比谷公園周辺では何度も「暴動」が発生している。もちろん、「暴動」をどう定義するかによって、比較の対象は変わるのではあるが、コザ暴動が沖縄を含む国内で例外的な暴動のように認識されるのはどうしてかと、私は考え始めた。

もう一つ私が気になったのは、コザ暴動を現在まで続く沖縄での反基地闘争の「原点」のように解釈・評価しようとする傾向である。沖縄市での集会も明治大学での集会も最後はそうした括り方になった。つまり、現在の辺野古や高江をめぐる状況は、沖縄に再びコザ暴動のような事態を生起させる可能性があるという認識である。

現在の日本と沖縄との関係を考えれば、この種の解釈に向かうことはある意味理解できる。現在の状況こそがコザ暴動をここまで社会的に想起・注目させているとさえ言えるだろう。しかし、それはコザ暴動自体の理解として適切なのか、私は少し疑問に感じた。

何らかの構造的抑圧に対する民衆の集合的抵抗であれば、無秩序な暴力の発現であって

も世界に類例は多い。コザ暴動はどこまでそれらと違うのだろうか。そもそも「暴動」とはどのように定義できるのか。そうした行為の間の類似性や差異をどう理解するのか。暴動一般の中にコザ暴動はどのように位置づけられるのか。これら暴動の共時性(並存すること)に関する問いはまだ十分に答えられていないのではないかな。

このこととも関わって、コザ暴動を現在の沖縄島北部での米軍基地建設反対闘争に直接重ねあわせてどこまで理解することができるだろうか。「コザ暴動の当時と何も変わっていない」のは事実であろうか。確かに沖縄をめぐる「構造的差別」は復帰後も残り続けている。米軍による事故・事件も後を絶たない。しかし、本当に何も変わっていないのだろうか。こうした沖縄の暴動や抵抗の通時性(継続すること)に関する問いについても十分な答えが出されてはいまい。

むしろ、2010 年ごろからコザ暴動を想起するイベントが継続される背景には、「抵抗する沖縄」の思想と行動が、それを直接経験した世代の人々には、以前ほどのレベルにないという苛立ちや焦りのようなものがないだろうか。今回の企画の背景には、私のそうした疑問が反映されていたことは正直に記しておきたい。

3) 大阪での企画概要

上に述べたような問題意識から、昨年 12 月に始まったプロジェクトの形式を踏襲しながらも、大阪でのプロジェクトにおいてコザ暴動をより普遍的な枠組みの中で再評価できないかと考えたのである。

とりわけ、今回のプロジェクトが大阪市内で開かれることから、西成(釜ヶ崎)暴動についての講演に、現場で歩きながら考えるフィールドワークを組み合わせたセッションを加えることにした。コザ暴動については写真展と写真家の語りで現場の状況はある程度理解できることから、基本的に釜ヶ崎とコザを対比する構成とした。さらに、暴動をより普遍的に考えるために、20 世紀初頭の日比谷公園周辺で発生した日比谷焼打ち事件をはじめとする複数の暴動の性格を考える講演を加えることにした。

その結果、大阪のプロジェクトは過去 2 回の企画と同様に、コザ暴動写真展と写真家によるトークに、釜ヶ崎のフィールドワークと大阪・東京・コザという三つの都市暴動を考えるシンポジウムを組み合わせる構成にした。結果、開催日を 12 月 20 日にできるだけ近づけ、プログラム構成を以下のようにした。

◆「コザ暴動」写真展

期日:2016 年 12 月 16 日(金)~18 日(日)

時間:午前 10:00~午後 6:00(入場無料、16 日は午後 7 時まで開場延長)

場所:大阪市立大学都市研究プラザ 船場アートカフェ(辰野ひらのまちギャラリー)

出典写真点数:約 100 点

出展写真家:大城弘明、國吉和夫、平良孝七、比嘉豊光、比嘉康雄、松村久美、山城博明、吉岡攻



関連展示品(沖縄市提供): 黄ナンバープレート、「騒乱罪粉碎市民集会」のチラシ、沖縄タイムス「コザ暴動」号外、「12・20 反米騒動で弁務官に抗議」コザ市職労速報、琉球新報「コザ反米騒動 政治問題に発展」紙面、「被害を受けた車両・建物」の図

◆フィールドワーク「西成(釜ヶ崎)暴動を歩く」

期日:2016 年 12 月 17 日(土)

時間:午後 2:00~4:00

集合場所:大阪市立大学都市研究プラザ
西成プラザ

内容:戦後 24 回発生した西成(釜ヶ崎)暴動に関する現場レクチャーと釜ヶ崎フィールドワーク

案内者:山田實(NPO 釜ヶ崎支援機構理事長)、水野阿修羅(釜ヶ崎地域史研究家)
参加者:事前申込者 47 名、当日参加者 45 名(抽選は実施せず)



◆シンポジウム(人文地理学会政治地理研究部会第 20 回研究会)

期日:2016 年 12 月 18 日(日)

時間:午後 1:30~6:00

場所:大阪市立大学都市研究プラザ 船場アートカフェ(辰野ひらのまちギャラリー)

第 1 部 シンポジウム「都市と暴動—都市はいかに暴動を生み出したか」

パネラー:

山田實(NPO 釜ヶ崎支援機構理事長)「転換点としての 90 年西成(釜ヶ崎)暴動」

藤野裕子(東京女子大学准教授)「戦前東京の暴動と労働者文化」

山崎孝史(大阪市立大学教授、進行役)「基地の街コザと暴動を語る論理」

第 2 部 「コザ暴動」ギャラリートーク

パネラー

國吉和夫(写真家、元琉球新報記者、当日欠席)

小橋川共男(写真家)

比嘉豊光(写真家、雑誌編集者)

松村久美(写真家)

古堅宗光(元 NPO コザまち社中幹事)

恩河 尚(沖縄国際大学非常勤、コメンテーター)

今 郁義(コザ暴動プロジェクト実行委員会、進行役)

18 日に登壇予定であった國吉氏が病気で欠席された以外は、全てのイベントが当初プログラム通りに実施された。大阪のプロジェクトについては、國吉氏が代表する「コザ暴動プロジェクト実行委員会」と筆者が世話人を務める「人文地理学会政治地理研究部会」(北川眞也三重大学准教授代表)を共催組織とする「「都市と暴動」シンポジウム実行委員会」を仮の

組織として立ち上げ、私が形式的に委員長となった。施設（船場アートカフェと西成プラザ）の利用許可をいただいた大阪市立大学都市研究プラザと、会場スタッフとして協力してくれた学生たちと私が所属する大阪市立大学地理学教室が協力機関となった。また展示品を借用した沖縄市役所から後援をいただいた。

メディア関係では、琉球新報社、沖縄タイムス社、朝日新聞社から後援を、NHK 大阪から事前電話取材、朝日新聞社から事前訪問・当日取材、琉球新報社から当日取材を受けた。このうち琉球新報社が事前（12 月 17 日）、事後（12 月 21 日、23 日）に関連記事を掲載していただいた。特に 23 日の記事は紙面の半分を占める大きなもので、3 日間のイベントについて記者大城周子氏が詳細に伝えた。

イベント開催期間中の入場者は、船場アートカフェでの記名者数が 16 日 16 名、17 日 27 名、18 日 75 名であり、3 日間で延べ 118 名以上に上った。そのうちの 33%が大阪市内からで、大阪府外からの参加者が最も多く 36%であった（残りは府内他市町村）。17 日の釜ヶ崎フィールドワークに参加した 45 名を加えると、総参加者が 160 名を上回る盛況であった。

なお 17 日の夜には関西沖縄文庫の金城馨氏と比嘉氏の取り計らいで在阪の沖縄関係者との懇談会も設けられた。

4) シンポジウムの講演から

第 1 部に登壇した講演者の内容を簡単に紹介しておこう。山田實氏は、寄せ場釜ヶ崎の形成過程を明治期から説き起こし、戦後の高度経済成長期に安価な使い捨ての日雇い労働力のプールとして釜ヶ崎が国策的に整備され、行政・警察・暴力団による労働者への不当な人権侵害が過去 24 回発生した暴動の背景にあったとした。特に 1990 年の暴動が、些細な出来事から西成警察署の収賄事件への抗議行動へと展開し、5 日間にわたる機動隊との衝突に至る過程が詳述された。また、こうした暴動の中でも、山田氏をはじめとする地域労働組合のメンバーが混乱する事態に冷静に対処していたことが指摘された。



藤野裕子氏は、20 世紀初頭における東京の日比谷公園周辺で発生した暴動を対象に、発生から終息に至る過程を、社会構造論的ではなく、下層労働者文化の共有という観点から解説した。日比谷焼打ち事件の場合、日露戦争後の講和条約に反対する政治集会が暴動に展開するが、それは政治集会の目的にそったものではなく、日常的に社会上層から蔑視されながら、独自の男性労働者文化を共有した若者が、集会を契機に群集化し、うつ積した感情を暴発させ、暴力を引き継いでいったと氏は解釈した。また、1920 年代以降の労働者の組合・組織化を経て、20 世紀初頭のような都市大に拡張する暴動がなくなると指摘した。

私は、復帰前のコザの都市構造と社会経済的特徴に触れた後、米軍資料をもとに、時間的・空間的にどのようにコザ暴動が展開したかを詳述した。釜ヶ崎暴動同様にこの暴動も些細な交通事故が多数の民衆を巻き込む暴動に拡大し、多数の米軍車両の放火・破壊と負傷者

が確認されている。さらに、第 2 部に登壇した古堅氏が主宰した「コザ暴動を記録する会」の録音データを用いて、40 年後にコザ暴動が回顧される語りのパターンを分析した結果を説明した。その特徴としてコザ暴動は「秩序ある暴動」として肯定的に評価される傾向があり、その評価は対人暴行の少なさ、延焼を防ぐ理性的行動といった事実から補強されていることを指摘した。また、当日破壊行動のなかったゲート通りの住民が 8 ヶ月後に黒人集団と対峙する「第二コザ事件」について、その性質をコザ暴動と人種的に分離されたコザの都市構造と結びつけ解説した。

このように第 1 部では、三つの都市暴動の構造と特徴が詳述された。特に、相違点と共に共通点があぶり出され、暴動には偶発性や群集の理性的行動といった普遍的側面があることが確認された。また質疑応答では、1920 年代以降の暴動減少期でも依然として疎外される労働者とそのうっ積の行方、「第二コザ事件」の現在での受け取られ方、三つの都市暴動のその後の政治社会的過程への影響について議論がなされた。

第 2 部のギャラリートークでは、今郁義氏の司会のもと、一巡目に、まず当時の現場を知る登壇者が 12 月 20 日にどのように行動したかを述懐した。古堅宗光氏は当日現場を見た衝撃とそこでの群集の行動を描写し、比嘉豊光氏は圧政に抵抗する現場の写真を伝える意味を語り、松村久美氏は現場の光景に魅了されつつどう写真家として行動したかを述べた。当時東京在住の小橋川共男氏は、沖縄人 2 世として復帰後に沖縄の写真を撮るにいたった経緯を説明し、沖縄市史編集に携わる恩河尚氏は米国で発見したコザ暴動関係資料から明らかになったいくつかの事実を紹介した。



二巡目は、古堅氏が、「記録する会」の証言から見えるコザ暴動の特徴をコザという多民族都市の「精神」に結びつけ、比嘉氏はコザ暴動がその後の沖縄闘争を勇気づけた事実、そして現場写真と闘争との往還の関係の重要性を訴えた。松村氏はかつての黒人街照屋の変容の中に、旧特飲街再生の過程が見出されるとした。小橋川氏も事態が緊迫する高江で抵抗する人々の写真を示し、沖縄の現状を写真で発信することの緊要性を強調した。最後に恩河氏は、歴史家としての観点からコザ暴動の背景と意義を説明しつつも、いまだ解明されざる課題が山積していると括った。

最後に出席者から寄せられた質問やコメントをまとめておきたい。最初の発言者は、展示された写真が自律的にとられていることがわかり生き生きとしていると感じると同時に、語りで思いが先に走ると事実が上塗りされてしまわないかとの懸念を示した。二番目の発言者は、フリーカメラマンとして現場で活動に圧力がかからないのかと質問した。三番目の発言者は原爆や空襲の被災地を訪れる人々の反応として「今はいい時代になった」という感想が若い人に多いことを残念に思い、この沖縄の写真展と暴動は今に続いている話だと再認識したと述べた。最後の発言者は、暴動は権力側から見れば非合法かもしれないが、民衆にとっては非合法でないかもしれない、本当の民主主義は法律では決められないので、そういうものを発掘し、意義を見出していく必要があると指摘した。

5) 参加者のコメントから

船場アートカフェへの入場者に対してはアンケート用紙の記入を要請し、39名の参加者から回答を得た。以下ではイベントの内容別に、特徴的なコメントを紹介しておく。

写真展については、「事件の全容が良く分かる」、「暴動の光景それ自体と一緒に当時コザの街並みと写りこむ人々のことを凝視した」、「あまりのはげしさに驚いた」、「詳しい事は知らず今後学びたいと思った」、「実際に写真家がいたところで写真を見るという貴重な経験ができた」、「キャプションのない写真が語りかけるものに圧倒された」、「写真(映像)を交えたことで深く理解できる」、「写真は大変な臨場感だった」という評価を得たが、写真展だけの参加者からは「事件の経緯を説明する資料などがあればよかった」、「写真の解説や地図をつけると分かりやすかった」といった感想があった。このように写真を写真そのものではなく、一種の現場資料として見る人もいることがわかった。写真展初日にコザ暴動の概要を説明するキャプションを掲示し、参照地図のコピーなども配布しておいたが、写真一枚一枚とその場所の特徴や背景と対比することはやや困難だったと思われる。



シンポジウムについては、私の発表内容が「一般の人にはわかりにくかろう」というコメントもあったが、講演・ギャラリートーク共に都市暴動の共通点と相違点、コザ暴動の経緯・内容を詳しく伝えていてわかりやすかったという肯定的な評価であった。

そのほかには、「フィールドワークに配布資料が欲しい」、「写真展の期間がもうすこし長かったらよかった」、「研究者や活動家だけでなく、一般の無関心層への働きかけも必要ではないか」という建設的意見と共に、「沖縄の平和学習の観光化を懸念する」、「コザ暴動が正しく社会に伝わって欲しい。ネトウヨに都合よく切り取られて、沖縄の偏見に利用されないか」といった、昨今の沖縄への本土のまなざしを危惧する意見もあった。

これらいただいた意見は、今後の「コザ暴動プロジェクト」の形態と内容について十分参考になると考えられる。

6) おわりに

このように「コザ暴動プロジェクト in 大阪」は、これまでの沖縄と米国・日本という縦の関係から、複数の「都市と暴動」という横の関係を組み込む試みであった。準備段階、展示会期間、シンポジウムの時間配分など反省すべき部分も多々あったが、これまでのプロジェクトになかった、コザ暴動を多面的に照らし直す試みは、概ね好意的な反響をいただいたと思う。ご来場、ご登壇いただいた方にはもちろん感謝したいが、それ以外の協力者にもお礼を述べておきたい。

私自身写真展の企画は初めての経験であったが、沖縄市にあるギャラリーラファイエットを中心に、沖縄関連の展示会を多々企画してこられた秋友一司氏のご協力なしにこのような規模の写真展は不可能であった。沖縄市役所市史編集担当の伊敷勝美氏には、写真を肉付

けでる各種展示資料の借用と搬送の便宜を図っていただいた。山田實氏は講演のみならず水野阿修羅氏と共に企画に沿ったフィールドワークのご案内を下された。大阪市立大学側では、都市文化研究センター研究員の今野泰三氏が企画から招聘に至る煩瑣な作業の大部分を補佐いただいた。文学部地理学コース三年生の青陰麻那、大谷真樹、鈴木まゆ、千原佐和、中西広大の各氏には写真展・シンポジウム会場のスタッフとしてお世話になった。特に大谷氏からは会場で撮影された写真の提供を受けた。ここに深甚の感謝の意を記しておきたい。

おそらくコザ暴動は今後も様々な形で語り継がれていくに違いない。私自身はこの暴動は多角的な検証を経てもなおその意義を失うものではないと固く信じている。しかし、沖縄の状況が厳しい今こそ、この暴動が本当になぜどのように起こったのかを、単に教訓として「活用する」ことを超えて、理解する必要があると考える。さて、このプロジェクト、次はどこに行くのだろうか。

3. 「コザ暴動プロジェクト in 大阪」講演記録

1) 第1部 シンポジウム「都市と暴動—都市はいかに暴動を生み出したか」

○山崎孝史

今回のこのイベントは「コザ暴動プロジェクト in 大阪」ということで、特に第1部のシンポジウムですが、「都市と暴動」というテーマで、まず私も含めて3名の発表をさせていただいて、その後にギャラリートークという形で、実際に今日、このアートカフェで展示させていただいている写真をお撮りになった写真家さんたちを中心とするトークイベントを続けて行います。



全体の構成はだいたいそういう形で、それぞれが2時間あまりという形で進めまして、間に10分程度、休憩を挟みます。休憩を挟んでいるときに沖縄市役所からご提供いただいているコザ暴動に関連する資料の展示内容について簡単な説明を行っていただきます。

お手元の資料を簡単に説明させていただきます。もらってない方がおられるようで、ちょっと前の学生さんのスタッフ、ちょっと持っていらっしやらない方に配ってあげてください。本日の資料の内容を簡単に説明させていただきます。皆さん、お手元にございますでしょうか。中を出していただきましたら、今日、お帰りになるときにでもご記入いただきたいアンケートの用紙とか、それから今日のプログラムが入っておりますので、写真家の皆さん、あるいは展示している写真の写真家さんのプロフィール等が書かれておりますので、ご参照ください。

それから、それ以外にいくつか入ってまして、2部のほうと関わりますが、実はこの暴動プロジェクトを始められた代表である國吉和夫さん、実はどうやらインフルエンザにおかかりになったということで急遽、ご本人は元気なんですけど、出てこられなくなったので、ちょっと國吉さんのメッセージといえますか、それも入っておりますので。これは2部のほうでまたお話しいただけるとと思います。

それから、リバティおおさか、大阪の方はご存じだと思うんですが、今回の私どものシンポ

ジウムもリバティおおさかさんのほうでも告知をいただいています。それで、私どものほうでも、そこは沖縄の展示がございますので、リバティおおさか自身が大阪市政の方針から自主運営を迫られていると、自主運営になっていく形になっていますので、毎日開館できる状態では現在ございません。もちろん沖縄に関わる人類館事件とか、そういう類の展示もされていますので、告知とか広報をしていただいて、私どもは逆にリバティおおさかさんのサポーターの協力をお願いを私どもからさせていただくという形で1枚出ております。

今日、最初にお話しいただくのは山田實さんです。プロフィールはもちろんこの中に書かれておりますが、山田さんの評伝が岩波書店で、私の同僚である水内俊雄先生、大阪市立大学の先生が書かれた山田さんの評伝¹がございますので、山田さんの経歴に関してはここに非常に詳しく書かれていますので、また後ほどご覧ください。それから、あと残っておりますのは、ここにいらっしゃる藤野先生と私の発表スライドの資料が載っております。以上です。もし何か欠けているものがありましたら、適当に言っていただければ、それぞれお渡しできるかと思います。

それでは第1部を始めさせていただきます。第1部のほうは、まず3名のスピーカーということで、最初にご登壇いただきますのは、今、紹介させていただきました山田實さんです。山田實さんの経歴はお手元のプログラムのところに載せています。1951年に愛媛県でお生まれになって、そのうちに釜ヶ崎の日雇労働者の労働運動に組合の役員として、あるいは組合の委員長として加わられて、後で、今ちょっとビデオを止めておりますが、90年の釜ヶ崎暴動の際にちょうど、これはNHKのドキュメントなので、本当はこんなふうにして公開したらいいんですけど、貴重な資料ですので、後で山田さんが映っているシーンを見ていただいて、90年暴動にどういう形で関わられたか。90年暴動というのが、西成の場合は釜ヶ崎ですけど、戦後24回、暴動が行っております。それで、そのうちの22回目ですかね。22回目ぐらいですか。

○山田 實

22・23。

○山崎孝史

22・23ぐらい。

○山田 實

はい。

○山崎孝史

90年代の暴動の背景と、それからその後の釜ヶ崎における労働行政の変化という、そういうふうな流れの中でお話しいただくことにします。後でまたご紹介をあらためて。

藤野先生は東京女子大学で教鞭を執られていまして、そこにも並べておりますが、『都市と暴動の民衆史』ということで藤田賞という賞を最近お取りになりました。これは20世紀初めの日比谷公園を中心とする東京における暴動の研究を民衆という観点から、政治過程がどうだったかという話ではなくて、参加した人たちのそれぞれの生活の様式であるとか、それから共有している価値観であるとか、そうした民衆の視点から分析される研究をされております。

¹ 水内俊雄(2016)「山田實―運動の聖地／寄せ場釜ヶ崎から」、荻谷剛彦編『岩波講座 ひとびとの精神史第8巻 バブル崩壊―1990年代』岩波書店、343-370頁。

これが学位論文になったということです。

それで、東京の話をしていただいて、1 部の最後に私が、その話を受けてコザの話につながりという形で、後半のギャラリートークの前座といいますか、それをうまく文脈化するような形でお話をさせていただいて。なぜそうするかという、長々とそんな説明をする気はないんですが、後で申しますが、コザ暴動というのはかなり今まで私ども、今回は私がこれを担当させていただいたんですが、コザ暴動プロジェクト自身は昨年12月20日、これはコザ暴動が70年に起こった日ですが、そこから写真展とトークという形の組み合わせのコザ暴動を想起する集会が開かれるようになりました。今回が4月の明治大学のものを挟んで3回目になります。そういう形で今まではコザ暴動だけを語っていたんですけど、今回は大阪でもありますし、西成暴動という、そういうこともありましたので、暴動そのものをもう少し、そこに比較しながら都市との関係で考えていこうというのが趣旨でございます。すみません、前置きが長くなりました。山田さんのお話に入る前に山田さんが映っている、そこら辺をビデオで見させていただきます。

○山田 實

恥ずかしい。

○山崎孝史

若かりし頃の。

○山田 實

嫌だな。

(ビデオ上映)

○山崎孝史

今のが90年の西成釜ヶ崎暴動の最終日ですよ、5日目なので。一番最後の日。5日間続いたんですね。その中で山田さんが逮捕されたシーンをNHKが取材していましたので、お見せしたということでございます。それでは山田さんのほうからお話を伺います。

○山田 實

はい。恥ずかしい限りです。要するに幕引きみたいな形でね。当日は朝日の生テレビで西成署の裏で10時から生中継をやる予定だったんですが、前日の組合会議で、明日は西成署前に打って出るということになりまして。「打って出たら俺は後ろを向いて回れ右前進はできないよ」ということを言っていたんですが、結果的に幕引き要員としてパクられたというふうに思っています。

ちょうどその前日まではそれなりに、まっとうな形での抗議行動が展開されていたのですが、徐々にマスコミなんかでも大きく報道しはじめた経緯もあったんでしょうね。名古屋から暴走族が応援という名目で駆けつけてくるようなこともありまして。ところが彼らは西成署には向かわないんですね。外部から若者がたくさん来たんですが、火事場泥棒みたいに自販機を荒らすとか、そんなことばかりやっていたので労働者は怒っていました。

労働者のほうは逆にまっとうに、こういう行動をして展開するんだというのがありまして、そう



いう悪さはしないという方向でいったんですけど、一部やっぱりそういったことは、どうしても付き物ですよ。この行動に出た前日は花園北の交差点の南側のデイリーヤマザキの看板を出していたコンビニが、全然関係ない場所なんですけれども、襲撃された事件があって、これはあかんなと思ひましてね。後から聞いた話ですけど、それまでは西成署は自分たちの不始末だから、石を投げられようが何をされようが警備のランクは防衛 1 本で、C 段階でずっと耐えるという形を取ってっていたみたいです。

○山崎孝史

山田さん、すみません、まず何で起こったかからいきましょうか。

○山田 實

そうですね。何で起こったか、すみません。ちょっとそこだけ言ったので言っておきます。それで、そういう変な形の焼き打ちとか、いろんなものが起こって、それで警察もやむなしと、警杖使用に踏み切るという形になったと言っていました。私たちも、西成署にちゃんとした謝罪と警察の民主化を求めて、それでずっと展開しておったんですが、焼き打ちが起きて、これは限界だなというのもありましたので、それで翌日打って出ていったわけなんです。西成署の玄関前にて謝罪を求めていたら排除命令が出され、署長が出てきましたので、「おい、署長」と声を掛け近寄っていったら、「逮捕」と言われ、ぼこぼこにされて連れていかれたわけなんです。

いずれにしろ背景が一番大事だと思います。NHK なんかもいろいろと取材して、それなりにいろんなことで、いろんな方角から分析されておるんですけども、やっぱり長年にわたる西成署に対する不審・怒りがずっとあったわけなんです。さっきのビデオでもヤクザの組長がどうこう言っていましたけれども、警察署長が来たら、まずご祝儀をどーん出す。宴会を設けて接待するとか、退職をするときも必ず「ご苦労さまでした」という宴会を設けて送り出したりするのが、彼らにあったという話を聞いております。私なんか来たるころは、博打場がいっぱいあったんですよ。そこに丸暴の刑事が行って、カルティエのライターがあったら、すぐパクってポケットに入れていきます。金目のもの、腕時計とかですね。それをわざわざ取らすために置いているらしいです。それで、「明日は雨が降るからな」と言って帰るらしいです。「ご苦労さんです」。要するに手入れが明日あるよということなんですよ。そういう形で伝えて、あと主要な人は上手に逃しておくとか、そういう馴れ合いでやっていたという話を聞いています。

博打だけじゃないんですよ。全体的には釜ヶ崎の存在そのものが、どういう社会的な役割かというのを押さえないと分からないと思っております。明治の終わりぐらいまで江戸時代から日本橋の電気屋街ぐらいにあった、いわば木賃宿街が明治の終わりぐらいに、大阪市と堺市での営業を禁止するというお触れがออกมาして、新たな候補地が今の釜ヶ崎のエリア、太子 1 丁目から南側一帯ですよ。結局は 1 キロ南先の環状線の外側、旧鳶田墓地、江戸時代に公設のお墓があった場所なんです、そのエリアに新しい木賃宿街が建設されるということになったわけです。

そういった経緯で釜ヶ崎という形が出来上がるんですけども、何でずっと木賃宿が続いたかといいますと、やっぱり社会の姥捨て山とでもいいますか、産業社会が発展する中で社会にとって不都合なもの、社会にとって不都合な人たちも含めて、溜め置く場が必要であったんだろうと思います。これは支配の論理を前提として考えんとあかんわけですけども、江戸時代もそうなんですよ。日本橋の木賃宿街が形成される背景としたら、元禄バブルが弾

けちゃって、今みたいな大失業時代に入っていく、経済がぐちゃぐちゃになる過程で農村も崩壊して逃げていく人が増えていく、武士も浪人化していくという中で、大阪市内はいわゆる浮浪人ばかり増えてくる。これは治安上困るということで当時の町奉行が、今の日本橋の電気屋街あたりに木賃宿をつくりまして、不安定な人々はここで生活をしろと、他では許さんという形で統治したのが、そもそもの始まりなんです。ただ、そういう場所をつくって泊まらせるだけではだめですから、当然、日雇い仕事とか都市雑業ですよ。米つきとか、掘割の改修工事とかに就かせて。何とか泥棒にならないようにしようという施策がずっとつづいてきたわけですけれども、そういう場を新たに環状線の外側に政策的につくっていったのが、そもそもの始まりなんです。

そういう形で出来上がった釜ヶ崎も空襲で焼け野原になったんですが、戦後は、バラック街として復興していきます。そうした過程で、61年に暴動が起こっちゃうんです。61年の暴動。戦前も含めてですけれども、大阪の小説家、武田麟太郎さんが書いている小説『釜ヶ崎』、ルポルタージュ方式で、釜ヶ崎を描写している内容が、紀州街道、これは車が通る唯一の道だったらしいんですけれども、その横の路地から人の腐臭が漂うような、おどろおどろした臭いが漂ってきて、そこの中に入ると二度と出てこれないと聞くというくだりから始まります。確かそういう描写だったと思うんですがね。

釜ヶ崎というのは、そういうおどろおどろした、とんでもないところだという形で、戦前もそういうイメージで描かれているわけですから、そういったイメージが強烈に市民社会にあった。逆に言ったら怖いところ、そこにおる人はわれらとは違う部類の人間やという扱いなんですよ。でも、そこでは不安定な人たちが行商の拠点にしたり、芸人さんの、いわばドサ回りといわれていましたけれども、九州とか西日本あたりを回って、一服してからまた出掛けていくような場所であったり、あるいは日雇いを余儀なくされた人たちの居住地でもあったり寄留地であったりとか、そういう形でずっと、底辺の、貧乏だけど人としての生活は、それなりに雑多な形で行われておったという背景があるわけなんです。

これが戦後の復興過程の中で特に50年を前後して、復員兵とか、いわば浮浪者、浮浪児問題をどうするかということで、行政が大阪の駅の東側に梅田厚生館というのをくりまして、生活相談・就労相談をして。そして北海道炭鉱とかです、南の難波あたりから南あたりのエリアは筑豊に全部送り込むとか、言い方はちょっと失礼ですけどね、そういうやり方で当時の戦後の失業浮浪者対策を処理していった歴史があります。

それが今度は60年、炭鉱閉鎖、三池争議とか、「総資本」対「総労働」といわれる時代ですけれども、また帰ってきちゃうわけですよ。その人たちだけでなく、いろんなところから都市へと仕事を求めて、炭鉱労働者を軸に帰ってきます。こういった人たちは権利意識が高いです。やっぱり死と背中合わせで暗いトンネルの中で一生懸命やってきたわけですから、非常にシビアです。私なんかもよく怒られました。だらだらと一服せずに仕事をしていたら、「休まんかい」と言ってね。「なにだらだら働いてんねん。一服するときはせんかい」と言われて、「これが労働者や」という、こういった人が帰ってきますと、今までは人間扱いされてもされなくてもわれらは仕方がないねんという形で泣き寝入り、ずっと頭を垂れての生活を余儀なくされていたのが、だんだん違ってくるようになったのではないかなと思っています。

しかも、仕事がどんどん増えていく過程ですから、その中で第1暴動も交通事故のはねられた人の後処理問題をめぐって、「こら、われらは犬や猫じゃないぞ」というので抗議行動

が始まって、それから一大暴動に発展していったわけであります。延べ 10 万人近い警察が大阪府警では間に合わないから近畿管区が動員されて鎮圧して。「自衛隊を呼べ」というところまでいったらしいんです。西成署が落城寸前になって、「もうあきまへん」と言って道場の豊で一生懸命に防いでいたみたいですが、警察のメンツにかけて自衛隊を呼ぶわけにはいかないということで、必死で踏んばったというふうに聞いております。

そのときは地域住民ぐるみという話も聞いております。西成署の反対側に大きな空き地がありまして、その裏側にチンチン電車の線路がありまして、お母さんと子供がエプロンとか着物で線路の栗石を運んで来て、私の同級生なんかも地元でおったんですけれども、聞きますと、「ほら、父ちゃん、投げろ」と言って、エプロンに栗石をいっぱい拾って、ばらっと道路にバラまいてね。そうしたら、みんなそれを拾って投げたという話を聞きました。最終的にはヤクザなんかも動員されて、白色テロで蹴散らされてということも最後にはあって、かなり多くの犠牲者が出たという話です。私が入っていた日雇の組合なんかに 1 人おりまして、頭をモルタルと警杖で叩かれて指がつけ根からぼーんと飛んだらしく、4 本指になった人もおりましたけれどもね。よく西成署にパくられたんですけれども、「おまえらがさわぐのは暴動とちゃう。鼻くそや」と言われ、「正味 60 年代の方が怖かった」と、よくそうやって言われました。警官にね。それぐらい警官は怖かったんやなということを、しみじみと知らされた思い出があります。

ただ、私は 61 年はもちろん、70 年ごろの暴動も、関与しておりません。70 年の頃いろいろと暴動がおきたとき、「石投げに行かへんか」という誘いがあったんですけれども、「俺はそんな失礼なことにはできない」ということで行かなかったんです。逆にいろんな弾圧が始まった後、「ちょっと助っ人で来てよ」ということで、73 年の夏から入ったわけであります。その中で釜ヶ崎の仕組み、61 年以降暴動が起きつづけてきた背景を言うとかんとあかんかなと思うんですけれども、とにかく戦後の復興・高度成長期、バラック街がつぶされていきます。その過程で 61 年の暴動が起きて、初めて行政も何とかせんと責任が問われるというので、国・府・市がみんな入り乱れて調査に入ってきます。どういう町にしようか、どう片付けようかという矢先に、65 年に閣議決定で東京オリンピックの後ですよね。関西経済の底上げをねらって 70 年大阪万博というのが計画されるわけです。

そうしますと大阪府の商工労働委員会でもどれだけ労働力がいるかというのを試算していたらしく、大阪府の労働部の職員に当時のことを聞いたら当時は 2 万 3,000～4,000 人、日雇労働力がいると。つまり、インフラ整備は一過性の問題ですから、使い捨て労働力、日雇労働者を使ってやるという方針が取られたみたいなんです。ですから、普通の町にしようという意見もあったかもしれないんですが、2 万 3,000～4,000 人の労働者をどこに溜めようかという問題と相まって、釜ヶ崎の整備が本格的に始まったわけであります。バラック街の中で西成署の前の道路以外は迷路だったので、そこに逃げ込んだら警察も怖くて入れなかったんですよ。暴動のたびに逃げ込まれて弾圧ができないということがあったみたいでね。結局はバラック街を全部ぶち壊しまして、8 メーター道路、碁盤の目に区画整理しました。そして、木賃宿のおやじにいろんな優遇措置・助成措置を取って、今のコンクリートのドヤが建設されました。当時は畳一畳型が主力でした。おまえらは牛や馬と一緒にやから横になるだけでいいだろうと、こういう発想です。建築基準法がどこまで当時機能していたかは知らないんですが、80 年以降は三畳一間以下はだめだということになっています。しかし当時は、1 階を 2 層に区切っ

てはしごで潜り込むような、カプセルホテルの原型ですけれども、蚕棚方式のドヤがいっぱいありました。

いずれにせよ、それで簡宿 200 軒、2 万人収容型の釜ヶ崎が出来上がっていくわけです。それと従来の木造のドヤとかアパートを入れて 2 万 4,000～5,000 人を収容できる町として整備したわけです。62 年ぐらいまでの人口統計の資料を見ますと、それまでは男女の比率がフifty・フifty。女性が多い年もありました。戦前から含めてですね。ところが、それ以後、どんどん女性が減って行って、70 年の頭ぐらいに 6～7 割は男で占められるような形になっていきました。

そこら辺の過程を行政に聞きますと、大阪市も住宅政策をやっていくんですが、平野とか南港あたりに住宅を建てて、貧困の家庭とか、あるいは女性だったら、基本的に外におっぱり出していく。そういう施策をどうも取ったみたいです。そして、さっき言った建て替えたところに、大阪府の労働部に「どうやって集めたんねん」と聞いたら、「北海道から沖縄まで」と私は聞いた記憶があるんですが、当時は沖縄返還がまだですから、どうしたのかなと思ったんですけれども、全国の職安を行脚して、大阪に来たらと刈り込みをしたというんですよね。特に山陰とか九州には労働出張所を設けまして刈り込みましたと。漁村なんかは希望を聞いて大阪港の港湾荷役のところに放り込んで。港湾の港の労働環境も整備するということで、港寮とかいろんなのが残っていますけれども、そういう方向で刈り込んでいきました。どうしても海は怖いという人は釜ヶ崎へという形で引っ張り込んだというのが、だいたいの当時の状況ではなかったかなと思っております。

そして、釜ヶ崎は、いわば男ばかりが国策事業のために動員型で寄せ集められたものとして出来上がっていくわけですよね。巨大な日雇労働力のプール基地。言い換えれば、江戸時代の懲罰を課すような人足寄場ではない、現代版の国策事業動員型の人足寄場として出来上がっていったわけです。これがつくられる過程も含めてですけれども、基本的には日雇いとか、そういう労働者というのは下等な部類という扱いをされたわけなんです。戦前・戦後を通じてですけれども、戦後の国の施策ははっきりしています。日雇労働というのは、本来あってはならない仕組みなんだと、悪だという位置付けです。いまだにそうです。常用以外は悪だという位置付けなんですよね。労働運動の世界だって本工組合主義が当時は真っ盛りのときですから、日雇いなんていうのは労働者とみなさない。浮浪者・乞食と同じだと。あるいは労働界に弓を引く反革命分子だと。ルンペンプロレタリアートですよね、いわば当時の運動にとっては。私はそういう扱いでいつも白い目で当時は見られました。

ですから、日雇いをやるやつは悪、犯罪人と同視する。72 年ごろの新聞の報道でも西成署の副署長が何らかのインタビューをうけ、「この労働者の 8 割は前科者や」と「犯罪者や」というふうなことを、のたもうてる記事があるんですよね。そういうイメージも相まって、ここに集まる連中は刑務所を行き来するような犯罪人、とんでもない輩やと社会的に見なされるようになって、一般市民は近寄らないでくださいという構造までもが出来上がるんです。だから、そういうふうに一般市民社会から孤立しているわけですから、この地域で人権問題を訴えても全部つぶされちゃうわけです。だから私なんかは当時、あいりん職安に行って、「何で手配師を取り締まらないんだ」と言うわけですよね。

実際、ちょっと話は飛びますが、そういう過程で 70 年に巨大な労働センターというのが出来上がっていきます。万博工事が終わった後も、それまで「立ちん坊、立ちん坊」といわれて

いた路上手配が続くんです。闇手配、闇求人です。これは職安法で禁止されているのですけれども、これがまかり通っておった。これを近代化しないとあかんということと、効率良く労働者を大量に動員しようということで大きな労働センターを国が建てます。そして、それを管理するのが大阪府の労働行政と、こういう形になります。そこにやっぱりけがをした人とかは面倒を見んとあかんというので、大阪市が病院をつくっちゃう。あるいは市営住宅をちょっと付けちゃうという形で、70年以降の統治形態が整っていきます。さらに、文句を言うやつは警察を動員してしばき上げるという形で、西成署が飛躍的に強化されていきます。

私が来た70年代ごろは、「西成警察署の規模は滋賀県警とか奈良県警規模ぐらいあるんや」とよく聞かされました。だから、ひょっとしたら今でも鳥取県警ぐらいはあるのかなと思ったりしますけど。今は500人体制ぐらいという話をちらっと聞いていますので、そこまではないのかなと思っています、今は。でも、それぐらい人権を無視して、とにかく労働者を虫けら扱いにして現場へと動員する、そういったものとしてあったんです。だから不平不満が募ってきます。しかも、労働現場へ動員する仕方が、職安法44条の違反手配師・人夫出しという暴力団がらみの仕組みを通じてされるわけですから。国がですよ。これは堪ったものではありません。職安に抗議すれば、「山田、おまえ、文句を言うんやったら出ていけ」とよく言われました。「よそで働けば、そんな目に遭わんやないか」という発想なんです。手配師を取り締まるということじゃないんですよ。ここにおるから、そういう賃金を払ってくれない、どつかれたり、えらい目に遭うんやと。それが嫌だったら出ていけということなんです。

でも、誰かが雇用調整の安全弁として日雇労働を強いられるわけですから、私が出ていつて解決するものじゃないんですよ。だから、そういう中で労働界からも一般市民からも、もちろん行政サイドからも無視されて、ただ絞り取れるものは絞り取るわけですよ。安手の使い捨ての日雇労働者として、一過性のものとして現場に送り出される。文句を言ったら、ヤクザに穴を掘って埋められちゃうとか、極端な話は。そういう構造の中にいるわけですから、怒りの持っていく場がない。職安に行ったらさっきの対応ですし。もう1つは、「戦後、職安法44条で取り締まったためしはないんや」と開き直っていたんですよ。そして労基署に行きますと、「50メーター先の暴力団の業者を取り締まってください」と言ったら、「あんな恐ろしいところに私は行けません」と返されて、電話をかけるだけです。電話をかけたヤクザ業者は「誰がぬかした、こら。誰や。電話口出てこい」と、脅し上げたら誰も怖くて話をしません。労基署もそういうレベルですね。警察は民事不介入だから、「どつかれて、けがをしてからおいで」と言うんです。ケガしたくないから相談に行っても、そういう対応ですよ。

法が法として釜ヶ崎には適用されない。そういう中で私たちはどうやってそこで生きていくか、身を守っていくかということと相まって、最終的な発露としての暴動という形になっていくわけなんです。だから、ぎりぎりまでいって、何回も色々なことを契機に暴動が起こっています。パチンコ屋で玉が出ないからって、台をぶち壊して、ばしゃーんとやって暴動になった話も聞きますし、今日はくそ暑いし、頭にきたから、新世界走ろうかというので、わーっと走って暴動になったというのもし聞きました。そういうのもありますし、今回のこれは西成署の賄賂事件ですよ、例の。これが発覚して起こっちゃったわけです。その2年後の92年、これは私なんかも関与しているんですけど、これは失業という問題、飯が食えない、路上で野垂れ死が強いられる問題が根底にあって、市更相(大阪市立更生相談所:編者注)に対する暴動として起こっているわけですけども、根底にはやっぱり人権無視で路上に捨て置かれる、

そういうところから、やっぱりいつ起こってもおかしくないということなんです。

例えば 90 年の時の暴動だって、最初から西成署に「けしからん」と言って私たちは抗議行動をやったわけじゃないんです、実は。ここにも出ていた、あまり言うたらあかんのかもしれんけど、I さんに対する抗議を、西成市民館の前で、これも名前を言ったらあかん、とある沖縄の人がやっていた、犬を連れていたおっさんですが。「こら、誰々、おまえは」ってやっているたが、I さんはそのおっさんを見殺しして市民館に入ってしまったらしい。虫の居所が治まらない犬を連れのおっさんは、今度は I さんの事務所の前に移動して再度、抗議活動をはじめました。私が入っている組合事務所の下だったんです。あまりにもうるさいので、うちの連中が下に降りていき、「ちょっと静かにしてくれ」と言ったら、連れてくる犬のシェパードがけつを咬んだらしくて。うちの組合員が咬まれたように私は記憶しているんですけども、そうした騒ぎを警察が聞きつけてきておっさんと犬を連れていってしまった。

それで、噛まれた本人はじめ、居合わせた自分達がとにかく西成署までぞろぞろ行って、犬がどうのこうのとやっているときに、みんな仕事から帰ってきますよね、ぞろぞろと。そうしたら、ニッカズボンのけつのポケットには朝の新聞があるわけですよ。山口組誰々どうのこうのというので、賄賂どうのこうのと出ていますから、周りの人は「こら、西成署、これは何や」と新聞を突き付けて抗議行動になっちゃったんですよ。犬がけつを咬んだとかいのはどこかにいっちゃって、「けしからん、賄賂。やっぱりそうか、おまえら」という話になっちゃって、そのうち誰かがアセチレン(ボンベ: 編者注)を扱える労働者でしょうね、その栓を開けて、火をつけました。火を見たらもう収まらない。それででかくなっていったんです。

私は当日、どこかの現場の鉄筋屋で仕事に行っていたんですけども、「ちょっと揉め事になりそうやから帰ってきてくれるか」と。「俺、まだあとやり仕舞いして帰らんとあかんねん」というので、通常通り帰ってきたときには、かなり騒然とした状態でした。その後ですけども、基本的には成り行き任せにするわけにいかないんで、私のところの組合員がいろいろとかかわった経緯もあったので、ちゃんと責任を持ってやらんと。いつの暴動もやりっ放しで、基本的に活動家は要領がいいとか見えますから、やばいというときには逃げちゃうんですけどもね。労働者だけが犠牲を強いられるということをよく聞かされていたので、そういうことにならないように。抗議行動はまっとうな形でまずやろうと。変なことはしないという形で、そこら辺だけはきちんとした上で、労働者側が発散できるような形で、いろいろと後ろで支えていく。けが人が出たら全部、うちで救護班をつくって面倒を見るとか、そういう意識を共有しながらやっておりました。

あと、西成署にみんな逮捕されるわけですけども、西成署から私に電話がかかってきて、「誰も身柄引受人がないから引受人になってくれ」と言われ、「はいはい」「分かった」と言っただけで、私は一生懸命、ガラ受け書を前日まで書いていたんです。せやけど、最初に言いましたように、翌日とにかく打って出るということになりまして、仕方ないねというので行って逮捕されたということになっています。経緯としたりいろいろありますけど、そこら辺ですね。ですから、非常にまともな抗議行動として展開されていました。

92 年のときも基本的には大阪市の手打ちからみんな怒っちゃって、それで発生しているわけです。やっぱり元々が人権無視で人間扱いしないところが根底にあるわけですから、何らかのきっかけで「いつ起こってもしゃあないやろ」というのが状況としてあったわけです。今はどうかといいますと、今もひょっとしたら何かの理不尽なことがあったら、起こる可能性は秘

めております。取りあえずそこら辺でいったん切っておきましょう。

○山崎孝史

ありがとうございます。これが 90 年暴動を中心とする西成の暴動の発生過程を事実関係と、つまり日雇労働者に関する労働環境に対する政策・行政の問題点、人権無視という状況の中から、ある種の本当に日常的な些細なことから暴動に展開するというプロセスがあると。これは後で僕もコザのところで説明しますが、似たようなところがあります。

○山田 實

すみません。もう 1 点だけちょっと入れて。

○山崎孝史

どうぞ。

○山田 實

漠然と言い過ぎちゃったんですけれども、本質的には 60 年代、70 年代、80 年代、今もそうですけれども、暴力支配をどう一掃していくか。これがずっと私たちの第一級の課題だったんです。国が関与しない、法律が法として機能しない。それで誰が牛耳るかという、強いやつが牛耳りますよね。当たり前です。だから、ここはヤクザが支配している町だった。商売人もみんな全部それになびいていきます。みかじめ料を納めて。西成署はその上に君臨して賄賂だけ取るわけです。昔の時代劇の悪代官とヤクザが十手をちらつかせて町人をいじめて「娘を出さんかい」とやっているやつがあるでしょう。全くあの状況がずっと続いてきたんですから。働く過程、生活過程もそうですけれども、全部、暴力団が後ろで支配する、手配師・人夫出しという業者も全部彼らが握っているわけですね。

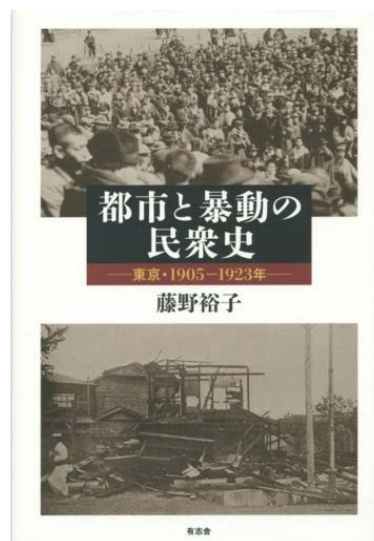
その上にゼネコンが都合良く乗っかり安手の労働力として使い捨てしているわけです。手配師・人夫出しなしには実体経済が動かないからというので、国もそれを見て見ぬ振りをする。そんなことを市民社会は知らない。だから、そういうことが覆い隠された中で、みんな閑散として生きろ、不平を言うな、文句を言うなという形で、西成署がチラシを配って抑えつけているわけです。ですから堪ったものではないですよ。警察とヤクザによる暴力支配をどう覆していくかということで私たちは運動をずっと展開してきた経緯があります。

○山崎孝史

どうもありがとうございました。最後、お 3 人の発表が終わってから質問の時間を設けますので。続いて今度は、ちょっと時代は古くなるんですけれども、東京のケースを藤野先生のほうからお願いいたします。

○藤野裕子

画像を映していただいている間に始めたいと思います。東京女子大学の藤野と申します。今日はコザ暴動プロジェクトということで呼びいただきました。戦前の東京の暴動がどうだったかという点と、その基盤となった労働者文化がいかなるものだったかという点についてお話をしたいと思います。今、映していただいている画像(図①)は単なる宣伝ですが、『都市と暴動の民衆史』という本を昨年出版しまして、今日お話する内容をそこ



図①

に書いたわけですね。ここでお目にかかったのも何かのご縁だと思いますので、1人1冊とは言いません。2冊3冊、お買い上げいただけると大変ありがたく、そこで売っていますので、よろしくお願いいたします。

拙著の副題には「1905－1923 年」と書いてありますけれども、その時期に東京で起きた暴動について研究してきました。1923 年というのは関東大震災時の朝鮮人虐殺のことです。厳密に言えば暴動ではないのですが、それも含めて考えてみようということですね。基本的にはレジュメの通りに進んでいきますので、そちらをご参照ください。「何で若い姉ちゃんが暴動の研究なんかやっているんだ」とよく聞かれます。「若い姉ちゃんだとやっちゃいけないのか」と言い返したくなるんですが、ちゃんとお答えすると、先ほど山田さんのお話になった一般市民社会と寄せ場との完全な乖離というのが現在では進んでいます。いま私が生きている一般市民社会とはどういうものなのかということを考える上でも、やはりかつての暴動がいかなるもので、どうしてそのような暴動が起こらなくなってきたんだろうかという点がすごく重要となる。そこに日本社会の大きな転換点があるのだと考えてみたい、というのが私の問題関心でした。そう思って探っていくと、一口に暴動といっても、やらなきゃいけないことがたくさんあって大変だったんですけど、最終的に、今山田さんがお話しくださったことと密接にリンクする事柄にたどり着いたというのが、今日のお話になります。



ここで対象とする暴動は、1905 年から 1918 年に、具体的にいうと日比谷焼打事件という暴動から米騒動までということになりますが、この期間に東京で起きた暴動を表にあげておきました。大小集めると、9 回起きたと研究上されています。これ以外にも横浜・名古屋・大阪・神戸でも、要は大都市ということですが、この時期同じように暴動が起きていまして、「都市民衆騒擾期」といわれたりもします。つまり、1905 年から 18 年という時期は、近代日本のなかで都市暴動の時代であったわけですね。その後、こうした類の暴動が起こりにくくなる状況になっていく。

もちろんこれで暴動が完全に終わったわけではありません。だって、先ほどお話にあったように、1990 年代に釜ヶ崎で起こっているわけですから。だけれども、そこでの暴動と、ここで私がお話しする 20 世紀初頭の暴動は、おそらくは性質が違うだろうということなんです。その性質の違いにどういう意味があったのかということを考えたい。なので、今日お話しすることが、地域や時期が異なる他の暴動を理解するための比較の手掛かりとなればとも思っています。

それでレジュメの 1 にいきます。まずは、これまで研究者が暴動というものをどのように考えてきたのかという軌跡を少しお話をしておきたいと思います。それは私自身の暴動に対する見方をお話することにもなります。

「暴動」という言葉を、私は本のタイトルに堂々と使ったわけですけど、これまで研究上、あまり使われてはきませんでした。むしろ「騒擾」という言い方が多かったと思います。「騒擾罪」に典型的に表れているように、「騒擾」というのは権力側の視点からみた言葉です。でもそう

であるということを意識しながら、歴史用語として使っていくというのが従来のやり方だったんですね。ただ、「騒擾」といってしまうと、何か遠い昔に起こったもので、今とは全然関係ない現象ではないかという気がしてしまう。それは嫌だなと思って、現代用語により近い「暴動」という言葉を使いました。

このほか、「蜂起」という言い方もあります。でもこの言葉は、何か 1 つの目的を持って、みんなが立ち上がっているみたいな感じがしてしまう。だけど、実際の現象はもっと多様だと思うんです。いろんな人がさまざまに、自ら予期もせず動いている側面がある。ですから、どこか人びとが一定方向に意識的に向かっている感じがする「蜂起」という言葉は避けたい。「反乱」もそうですね。何に背いているのか。そんなに自覚的な行動だったんだろうか。「革命」もそうです。革命を起こそうと思って暴力行使に加わった人が、どれだけいたろうという話ですね。どれがもっとも当事者に即した言葉なんだろう。でも、結局のところ研究者が名付けるわけですから、どんな言葉を用いても、当事者の行動や意識からは意味がずれ続けてしまう。だったら、現代の使用法ではマイナスな意味がもちろんあるけれども、そういう風に世間的にはマイナスに見られる、刑事罰と密接につながった暴力を人びとがふるったということ、社会規範・法規範を乗り越えたということを明示するために、「暴動」という言葉を使おうと思いました。暴力行為を見下すためではもちろんなくて、当事者の視点、行為者の視点に立って暴力の意味は何だったのだろうと考えていき、「暴動」の意味を読み替えていくためです。そういう作業が必要なんじゃないかと思って、『都市と暴動の民衆史』というタイトルを付けました。

その次にいきます。『都市と暴動の民衆史』の「民衆史」で私は何を意図したかということですが、一般的にはこの時期の暴動というのは、「大正デモクラシー」の一つの表現だといわれてきました。民衆が政治的に覚醒したからこそ、異議申し立てのために人びとは暴力をふるったんだ、というストーリーです。ですが、「大正デモクラシー」と言ってしまうと本当にいいんだろうかというのが疑問でした。吉野作造の民本主義みたいな確たる思想、と、人びとの暴動、暴れるという行動を一緒にしてしまうのって、人びとの行動に歴史的な価値を与えているともいえるんですけど、でも当事者は本当にそういう意識で動いていたんだろうかという疑問です。当事者の意識や行動の意味からずれたところで、歴史研究者が勝手に評価を与えているということになってしまいそうで、それは避けたかったのです。

もう 1 つは社会構造論として、この時期の経済的なあり方や、社会的な構造がどうだったかということを緻密に明らかにした研究もあります。日露戦争ですごいお金を使ってしまって、外国からもお金を入れて、日本国内ではインフレが起きて、一方で増税があったり不況でもあるという状態のなかで、都市の人びとは生活に非常に苦しむわけですね。貧困状態にある。その貧困状態であるだろうという構造を明らかにして、人びとの不満が爆発して暴動になったんだろうと説明するわけです。

それはその通りだと思うんです。帝国主義の展開にともなって人びとには重圧がのしかかっていたのは間違いない。でもその客観的な経済状況だけで暴動を説明していったらば、その時代を生きた人びとが何を考えて、どうしてこの行動を起こしたのかという、人びとを主体にした歴史研究ができなくなっちゃうんじゃないか。構造的に苦しんで暴発した人たちというふうに、どこか人びとを客体として位置付けることになってしまわないか。それは避けたいとも思うわけです。

いずれの研究も、暴動の先に何を想定しているかという、さきほど本工組合という話があ

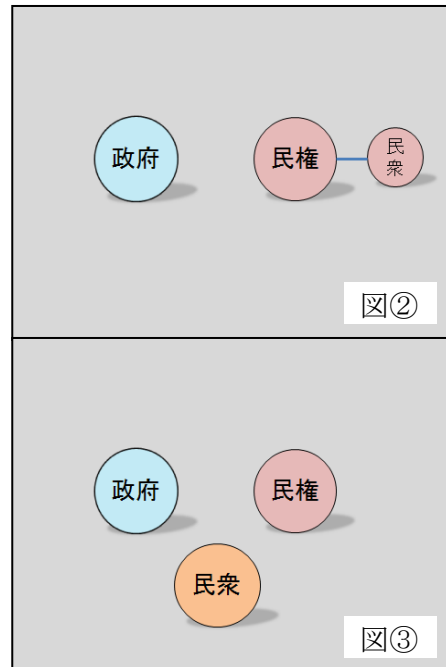
りましたけど、未熟な暴動は、そうした工場労働者の組織的な労働運動に発展していったというストーリーだったんですね。それもやめたい。労働運動に発展するからすばらしいのではなくて、彼らが暴れた意味が何だったのかということに即して、暴動の歴史的な意味を考えるべきじゃないかというのが私の考え方です。

このように考えてみたときに、民衆運動史の研究には、次のような考え方があって、それがすごく参考になる。暴動の時代よりも前の時期、明治前期の自由民権運動に関する研究で提唱された考え方です。例えば、政府・国家権力と、自由民権運動、組織運動があって、それに付随して暴動が起きるとする(図②)。そうしたときに、従来の研究では、組織運動と民衆の暴動とを一体化させて捉えてきたんですね。権力に対して組織運動の思想でもって、人びとの暴動も解釈してきた。でも、そうじゃないんじゃないか。いかに組織運動がすばらしくても、そこから起きた人びとの振る舞い・行動というのは独自のものがあるんじゃないかと考えてみるのが、最近の民衆運動史の研究のあり方です。

つまり、極端に言えば、こういう図式にするわけです(図③)。組織運動に暴動が付随すると考えるのではなくて、暴れる人びとを独自の論理を持つ主体だと考えてみよう。こういうふうな、国家権力 VS 組織運動・民衆という二項対立ではなく、国家権力—組織運動—民衆の三極構造で考えてみるというのが、私が研究を始めた時期に出てきた考え方です。ですので、私も都市暴動を考える際に、指導者の思想と暴力をふるう民衆の論理というのを分けて考えてみて、暴力をふるう人びとの論理なるものを浮かび上がらせてみようと考えて、やってみました。

ただし、この構図は、19世紀の民衆運動を理解する上ではいいのですが、20世紀の都市暴動にそのまま適用するのは少し困難ではあります。例えば、新政反対一揆という、明治の初年に明治政府の政策に反対した一揆があります。近代的な税金の取り方や徴兵制度が嫌だということで民衆が立ち上がった一揆です。これが新政反対一揆について描いた絵ですが(図④)、これを見ると、やる気満々じゃないですか。みんな同じように竹槍を持っているし、みんな同じようにたすきをしているし、暴力をふるう気満々で集合している。だから、この論理は何だろうと考えて、人びとはまだ江戸時代以来の伝統的な民衆世界にいるのだと説明することは、ある種容易い。

けれど、20世紀の暴動って、もっといいかげんなんです。ちょっと散歩をしていたら目の前で暴動が起きていて、みんなが交番を焼いている。じゃあ俺もやっちゃおう、という感じなんです。家を出てきたときには暴力をふるう気なんか無いのに、いつの間にか暴力の主体とな



図④

動が継続・激化する要因は、必ずしも政治的な問題とは関係ないものも含まれて、ばーっと広がっていくわけです。

そうすると、人びとは全く無目的に暴れているだけなんじゃないかという気にもなるんですけど、それも違う。一定の論理はある。なぜならば民家への襲撃が少ないんですね。例えばこれ、日比谷焼打事件のときの絵です(図⑥)。暴動の真っ最中の写真って、コザ暴動のように残っていないんですね。けど、絵は描かれています。これは、



図⑥

ここに大通りがあるんです。路面電車の線路ですね。路面電車の線路の真ん中に、交番を破壊した木材とか器材、つまり交番の中身ですね、それらを持ち出して焼いているんです。石油をかけて燃やす。何で交番をそのまま焼かないのかというと、類焼を避けるためです。民家が密集しているところにある交番だと、ここでは焼くとな隣住民が止める場合もあります。ある程度、近隣との同意が形成される形で焼いていく。といってもそんなに綿密な交渉とかはしてないですよ。でも、その場の空気ではできないとなったら、こういう形で破壊したものを持ち出して石油をかけて焼くという、そういう配慮がされています。ただし、米騒動のときは銀座の大通りとか浅草の歓楽街とか、手当たり次第、商店や歓楽施設のガラスをがらがら割っていくというようなこともあります。

こういうふうになると、ああやっぱり民衆なりの論理がちゃんとあって、人びとは理性的な行動をとっているんだ、と言いたくもなるんですが、それも確かに 1 つの評価の仕方かもしれません。ただ、その評価も怪しいのです。そこには、理性的な行動は評価するけれども、全く理性的でない行為は価値を持たないのだという研究者の価値観、物差しがあって、その物差しで評価してしまっている。だから、こういう類焼への配慮などの理性的に見える行為を過度に評価してしまっている。そうすると、研究者の物差しで計っているだけに、当事者の目線とはやっぱりずれると思います。むしろ、本当に人びとが理性的だったら法を乗り越えようとしないうわけです。暴動がすごいのは、そうした理性とは違うところで、期せずして体が動いて、普段とは違うことができてしまうことであって、そのことのほうがすごく大事なんじゃないかと私は思うわけです。

というのは、集団構成を見ると、一つの集団は数十人から1000人くらいといわれますけど、日比谷公園から最後のほうまでずっと参加する人ってあまりいないんです。体力的なものもあるでしょうし、自宅から遠くなっちゃうでしょうし、みんな途中でやめていくんです。そうすると、先に行けば行くほど人数が少なくなるんじゃないかと思うかもしれませんが、そういうわけでもない。というのは、判決文を見るとわかるんですけど、途中から参加している人が多いんです。つまり、日比谷公園から暴動が始まって、それが広がっていくと、近隣の住民が、何で警察・

交番が焼かれているかよくわからないけど、焼き打ちに加わっていくわけです。で、また次々に交番を焼いていく。で、その人たちもやめていって、新たな人が入ってというふうに、集団内の人員を変えながら暴力がリレーされて、東京市全体に広がっていく。そういうすごく即時的な結集だというのが大きな特徴です。

なので、暴動が数週間にもわたってずっと行われるということはありません。1日2日で終わっちゃうケースが多いのです。雨が降ったらやめちゃうとか。そうしたら再び結集する契機というのは、次の政治集会が開かれるまで来ない。そういう即時的な結集なんです。本当に民衆が自律的な論理のもとに動いていたならば、何か目的が達成されるまで暴力をふるい続けるでしょう。けど、そういうものじゃないんです。もっと瞬間的なその場での体の動きなのだと思います。

ここがすごく大事なところなんですけど、少なくとも私はいま一般市民社会なるもののなかで生活をしていて、例えば仕事の帰りに目の前で交番を焼いている人たちがたくさんいたら、自分もそこに加わっていくだろうかと考えると、加わっていかないと思います。それどころか、研究者モードだったら暴動の様子をくまなく観察すると思うけれど、そうではない生活者モードだったら、怖くてその場を離れるかもしれません。でも、このときの人たちは、そこで逃げなかったし、自分も焼き打ちをやっていた。何でみんなが交番を焼いているのかわからなくてもそこに加わっていった。それって何でなんだろう。おそらくは、暴動を見て、即座に自分も加わるような共通の土壌というか文化というのが、その人たちにはあったからだろうと考えてみる。だからこそ暴力はリレーされて東京中に広がったんだろうと思ってみると、いったいどういう人たちの、どういう文化がそこにあったのだろうか、というところが大事になるわけです。

レジュメの2の④にいきます。暴動主体の相貌、暴動に参加していた人がどういう人たちだったかということなんですけど、捕まった人を分析すると、一定の傾向があります。一口で言っちゃうと若年層の男性です。15歳から25歳が65%ぐらい。30歳まで含めると8割です。これは面白いっちゃ面白いんですけど、1905年のときも15歳から25歳が65%なんです。13年後の1918年も、15歳から25歳が65%なんです。もし同じ世代がずっと暴動をやり続けていたならば、13年経っているんですから、平均年齢が13歳上がるはずなんです。でも、そうじゃない。13年間ずっと変わらないんです。ということは、特定の世代の問題ではなくて、特定の年齢層の問題だろうとなるわけです。この年齢層というのは、東京でみると単身者が多くて、まだ家族形成をしてない人たちといえます。職業をみると、労働者層と一口でいえますが、職人層・職工・日雇いなどが約6割を占めています。ただし、商店の雇い人や学生も一定数いるということも補足しておきます。

この年齢の労働者層の人たちが顕著に共有しているであろう日常的な感情や振る舞いがあって、だからこそ暴力がリレーのように受け継がれて、こういうふうに広まるような暴動になったんじゃないかと考えてみる。職人・職工・日雇い。技術を中心に親方・子方関係になるか、あるいはもっと人格的な紐帯で親分・子分関係になるかという違いはあるんですけど、いずれも労資関係が、研究上は擬制的家族関係というんですけど、親分・子分、親方・子方関係の紐帯で成り立っている。ただし、日雇い層はその外にあるというのも1つ補足しておきます。若い層ですから子分・子方の人たち、あるいはその外にある日雇い層の人たちに共有されている何かがあるということを想定して、その生活がどういうものだったんだろうかと考えていきたいと思っています。

それが 3 です。男性労働者たちの生活文化ということで、特にここでは、その特徴が顕著に現われる日雇い層を中心にお話しますが、戦前のある時期までは職工層は日雇い層と生活水準や経済状態が一緒だったといわれていますし、職人層も、職人風情がというように、社会的にはどこか蔑視されていたということもあって、職人・職工・日雇い層にはある種の共通性があり、同一の文化圏にあったと考えられます。

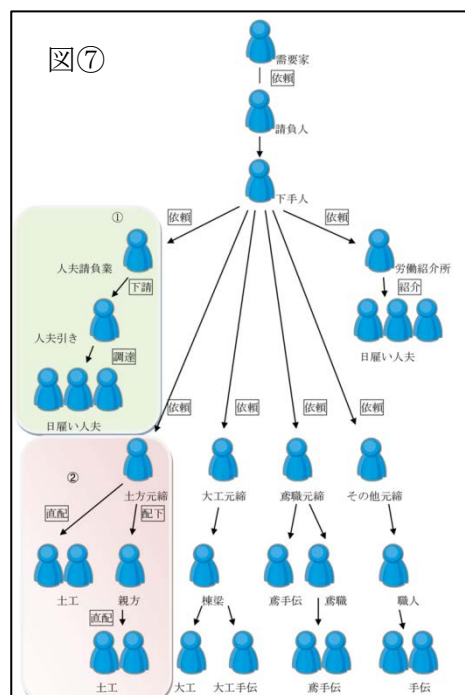
まずは日雇い層を多く抱えていた土木建築業についてお話しします。先ほど山田さんがお話くださったことでもありますが、土木の世界にはこういうネットワークがありました(図⑦)。土木工事の受注者、いまでいうゼネコンとかですが、人手が足りなかったら人夫請負のところまで日雇い人夫を調達するということになります。

「土方」の場合、土方元締めが自分の人夫部屋を持っていてもいいですが、配下の子分が持っている部屋もあって、土木工事の受給規模に応じて、どこまで声を掛けるかが変わってくるわけです。なので、全てが常雇いではなく人夫たちを日雇いにするので、必要に応じて労働力を即座に調達し、かつ最低限の人件費ですませることができる形式になっています。こうした形式というのは、もちろん近世にも由来がありますが、今回は近世から近代へのつながりについてはちょっと

置いておきまして、近代の中で顕著に整っていった制度・仕組みである点を強調しておきたいと思います。特に明治期の鉄道敷設工事ですね。近代化政策の中で明治政府が鉄道を敷きますけれども、その鉄道工事にあたってこうした形式が顕著に整っていったともいわれます。土木工事の多くは公共事業ですから、そういう意味では下層労働のネットワークのあり方、動員のあり方というのは、国策と絡まり合いながら近代の中で発達していったといえるでしょう。逆にいうと、こうした労働力の使い方によって急速な近代化が成り立っていったということでもあります。土木に限らず荷役とかもそうですね。

もうちょっと日雇いの人たちの目線でお話すると、2通りの形態があります。一つは人夫部屋ですね。人夫部屋に人夫が集められていて、部屋頭・小頭がそれを管理して、日々の仕事が人夫に割り当てられて、部屋から労働現場に行く。この場合は飯場制という形をとりますので、宿代・食事代は給料からピンハネされます。雨などで仕事のない日は宿代・食事代は次に働くときの給料から前借りになるので、その借金を返すために働くことになり、部屋から出るに出られなくなっていくます。

もう一つが寄せ場です。ここでの日雇いのあり方というのは、先ほど木賃宿の話がありましたけれども、木賃宿に住んでいる人夫が、そのそばにある労働市場というか寄せ場に行って、人夫引きから仕事をもらうという形ですね。木賃宿には人夫がだいたい 6 畳で 9 人ほど雑魚寝していたという史料もあります。そういうふうに自発的に泊まっているので、その分では人夫部屋のようなピンハネは少なくても自由度は高いんですけど、その代わり、仕事にあぶれてしま

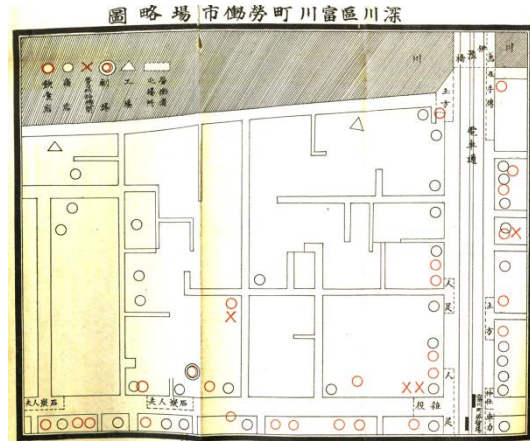


うと日々の住居や食事が危うくなります。東京だと深川区の富川町というところが戦前の最も大きな寄せ場だったのですが、この図(図⑧)にあるように、土方だったらこの辺とか、石炭人夫はここで仕事をもらおうというのがだいたい決まっていて、日々ここに朝行って仕事をもらうことになるわけです。もう少しカメラを引いて東京全体で見ると(図⑨)、この緑色のところが労働者の集住地域ですね。ただし、昔の地図って皇居を中心にするんですね。かつ1枚に収めようとするから、西が上になるんです。北はこっちです。

次に、こうした条件のなかで、人びとがどういうふうに生活をしていたかということを、今度はルポルタージュ、先ほど山田さんからもルポルタージュの話がありましたけど、それを手がかりにみていきたいと思います。男性労働者がどういう生活を送っていたかです。そこに暴力を引き継ぐ、リレーする要素が何かあるのではないかということですね。第一にいえませんが、この状態の中で社会上昇をすることがすごく難しいというのはよくわかると思います。日々の生活がままならないので貯金をする 것도できないし、例えば学費を貯めて教育を受けてよりよい職に就くとか、自分自身を上昇させる現実的な方法を見いだすことがすごく難しい。そうしたなかで、一般社会とは異なる価値観をつくりながら生きていたんだろうと思います。

そうした価値観・文化がわかる史料がいくつかあります。1つの価値観は、腕っ節の強さです。つまり、学がなくとも、経済力がなくとも、腕っ節が強い、あるいは身体的に強い。それは労働者たちのコミュニティでは「男らしい」と見なされ、価値あるものだと考えられていた、とルポルタージュには書かれています。「浮浪労働者の仕事と云ふものは、常に体力を使用するだけに、彼らの仲間の話しというものは、寄ると触ると力自慢の話になる〔中略〕彼等の間には力自慢が盛んであると同時に、力のある者が勢力を得る」²云々。刺青もそうですね。刺青を入れることは身体的な強靱さ、我慢ができる体であることの証と見なされていました。「刺の辛棒が出来るか出来ぬかの意志をためす為めであるらしい。〔中略〕或は之を「意気だ」と云ひ「男前が上つた」と云ふて、喧嘩すればすぐ、刺青を見せる」³というふうに観察されています。

そればかりでなくて飲む・打つ・買う、金がなくても飲む・打つ・買う、あればあるだけその日



図⑧



図⑨

² 小川二郎 (1919)『どん底社会』啓正社。

³ 賀川豊彦 (1915)『貧民心理之研究』警醒社書店。

に使うという生活スタイルもまた、1つの豪放さ、あるいは度胸の証であって、それもまた価値あるものと見られていたようです。時間の関係でちょっと飛ばします。3 ページの前です。「失業又失業」と不安定になるからこそ、彼らは金が入れば使ってしまう、とあります⁴。少しでも貯金をしていける条件があるならば、そうはしなかったかもしれません。でも、どうせ次に雨が降ったら仕事がなく収入がなくなる。あるいは借金ができる。であるならば、今ここにあるお金をその日に使って、少しでも享楽を味わおうという感覚になっていくわけですね。「そこで金が手に入れば飲む、食ふ、うつ、買ふ、酒、煙草、賭博に使つてしまふ」⁵云々。そうした振る舞いができることが、1つの「男らしい」価値だと認められていることも、他の資料では記されていたりします。あとは義侠心ですね。みんな金がないわけです。そのなかで人に金を貸せる人間というのは、やっぱり「男伊達」というふうにいわれる。

ということで、みんながみんなこれをやっていたというわけではないけれども、こういう振る舞いがどこか格好いい、「男らしい」と感じるような価値観が、労働者層のなかに共有されていたんだろうと思うわけです。それは資本主義社会において社会的な地位を成していくとか、学歴社会が進展しているなかで学があるといった、立身出世のルールには上がれない人びとにとって、それとは異なるオルタナティブな価値を提示する文化であったんだろうとも思います。金がなくとも学がなくとも社会的地位がなくとも、労働者のコミュニティにおいて何らかの矜持が保てるという、そういう価値観のなかで男性労働者は生活していたというのが、ルポルタージュから垣間見えるところです。

ただし、それで人びとは自己完結して、矜持を保って生きていけたのかというと、それだけでもないだろうと思うのです。刺青の例を見るとすごくよくわかるんですけど、刺青は1つの男らしさの証でもあるのですが、一方で刺青を入れれば入れるほど一般社会からは蔑視されてしまう。その視線、一般社会からの視線を労働者自身が敏感に感じながら、でも刺青を入れていたんだろうと思われます。それが次です。「刺青のある人間は別に一階級下の人間の様に彼等自身考へて居ることはほんとである」。刺青は男伊達なんですけど。「それで、彼等は並の社会に交際したい時は、シャツで之を包んで、人目にかゝらぬ様に注意する。そしてもしそれでもまだ人目にかゝる様な処にあるものなれば、大きな灸をすえて之を消すことに尽力して居る」⁶というふうに観察されています。

都市のなかで上層階級と接して、日々蔑視の視線を感じながら、でも自分たちの価値観で生きている感じ。だからこそ逆にいうと、疎外感は消えることはないのです。むしろ溜まりながら生きていたのではないかと思います。そのどうしても消すに消せない疎外感は、いったいどこに向かうんだろうかということなんですね。その行方としてわかるのは、彼らは決して鬱々と生きていただけではなくて、小頭や人夫引きにばかにすんじゃねえぞと吐き捨てながら生きていたことです。例えばそんな安い金で行くやつは、「此処等の仲間には無えや」とか、「馬鹿にするない。一両位で」、一両は日給1円のことです。「一両位で行く奴は今時無えよ。おつけでも顔でも洗直して来い」といつてみたり⁷、小頭との関係において従順ではない一面もありました。

⁴ 吉田英雄(1930)『日稼哀話』平凡社。

⁵ 同前。

⁶ 賀川前掲書。

⁷ 小川前掲書。

あるいは、そうした鬱々とした感情は、酒を飲んだときに表に吐き出されてもいました。夜中、「木賃宿の室の中にも酒に酔って管を捲く連中が多くなる。天下は俺の天下だと云ふやうに、社会に罵声を発って呵々大笑し、「誰でも俺にかなふ奴があつたらかゝつてこい。巡査位何んでもねえぞ」と言い放つ⁸。「大臣だろうが人間に違えねえ」と言ってみたり、この一触即発の情念や暴れる身体、そういうものが日頃から彼らのなかにずっとあって、それが酒を飲んだときに、ぱっと吐き出されてくるわけですね。

時間がないので、4 ページにいきます、すみません。そういった一触即発のマグマのような下層の噴火熱。彼ら独自の文化はあるんだけど、それだけでは解決し得ないような残り滓みたいなものが日々溜まっていて、ばかにすんじゃねえぞと思いながら生きている。意識とも思想ともいえないような、もっと無自覚であいまいな、振る舞いとか感情のレベル、情念のレベルがずっと溜まっていて、政治集会が開かれて群衆状態になったときに、ぱっと飛び出す。1 回暴力が起こったら、日ごろからの感情がぱっと出てくる。そしてばばば一っと東京中に広がっていくわけです。若年の男性労働者の共有していた生活環境と文化、感情と振る舞い、これらが暴動の根源であったんだろうと思います。

ルポルタージュのなかでは、男性労働者は個々にエネルギーはあるのだけれども、結集する核がないともいわれています。つまり、彼らが自発的に集まって、集団で鬱積した感情を吐き出すのではなくて、やはり政治集会みたいな形で群衆状態ができたときに初めて、暴力をふるいはじめる。彼ら自身が自ら結集しないというのも 1 つの特徴だと思うし、もう 1 つは、これも時間がないので駆け足でいきますが、それらが国家権力に対して反抗的・対抗的な形をとるかという、必ずしもそうではないケースがある。むしろ、権力と率先して結びついたり、国家に忠義や義侠心を尽くしていくという側面もあったりする。あるいは民族差別を行っていたりという側面もあるわけですね。だから、先ほど述べた情念やマグマは、反権力に向かうか権力の側にいくか、実はとても危ういものであったんだろうと思います。ちょっとこの辺の話は時間がないのでカットします。

そういうふうに考えると、そういうマグマのようなものが下層社会の人びとのなかに培われていて、日々溜まっている状態でした。だからこそ先ほどお見せしたような、1 度始まった暴力がばばばと広がっていく。そうした感情やふるまいは、特定の寄せ場だけに限定されたものではなくて、職人・職工・日雇労働者、かなり広範な人たちに共有されていたものであった。その社会のあり方が変わったからこそ、暴動のあり方も変わったんだろうというのが私の考え方です。

1920 年代以降、工場労働者の待遇は改善されていきます。ストライキなどをあまり起こしてほしくないの、大経営の工場を中心に勤続手当などの福利厚生を設けるようになり、企業を通して社会の安定化を図っていくような「企業社会」の方向に日本社会は向かっていくのだといわれています。先ほど本工組合の話がありましたけど、正規雇いの工場労働者の待遇は上がっていくわけですね。だから、これまでのような刹那的な生活を送るんじゃなくて、生活を改善していこうという方向性も工場労働者のなかにでてくる。このことは言い換えれば、正規雇用と非正規雇用の分断が 1920 年代以降、激しくなっていくということでもあります。もっと時代が進んで戦後の高度成長期になると、ホワイトカラーが急増しますし、機械化の要素

⁸ 吉田前掲書。

もだいぶ増えてくる。そうしたことが重なりあって、職人・職工・日雇いの人たちで共有されていた広大な労働者文化・生活文化が分断されていって、断片化していく。今回みたような価値観や振る舞いが残っていくのは、寄せ場のような環境においてなんだろうと思うんです。

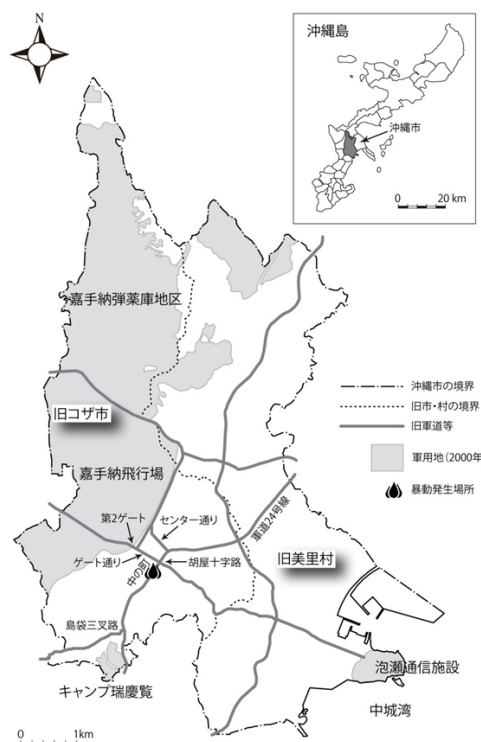
文化が共有されていないということは、寄せ場で暴力が起こっても、それを引き継ぐ人がいなくなるということでもあります。情念やふるまいが変わってくる。それがゆえに、日比谷焼打事件のような広汎に広がる暴動から、釜ヶ崎のような寄せ場に限定された暴動へというふうに、暴動の形態が変わっていくんだろうなというのが、いま私が考えているところです。以上です。すみません、ちょっと時間をオーバーしたと思いますが、そんなところで終わりにしたいと思います。

○山崎孝史

どうもありがとうございました。ちょっと時間は押していますが、さっさと沖縄の話に移ります。大阪市立大学の山崎です。私は沖縄の政治運動・社会運動、そういうのを主として戦後の変化の過程をずっと追い掛けている研究をやっています、その流れの中で沖縄市に市史編集担当という市史を編集する部門があるんですが、そこは戦後のいろんな歴史を、文化に関わる活動も含めて、たくさん収集されていて、それをヒストリートという、ストリートミュージアムといいますか、まちかどの歴史資料展示館でずっと展示されている。米軍関係の資料も見たりしますので、どうしても米軍の資料の中にもコザというのはたくさん出てきますので、そういう関係で私もコザの、沖縄市の市史のお仕事をいろんな角度からお手伝いさせていただくということをしております。

山田さんと藤野さんのお話は、実は本も読ませていただいて、山田さんも何度もお話を聞かせていただいて、コザを研究している者からすると非常に参考になる。沖縄のほうで仕事をしていると、どうしても、先ほどもちょっと言ったんですが、コザ暴動をコザ暴動として語るということは盛んに行われていくんですけども、それをどう、特に特殊な都市ではあるんですが、嘉手納基地の門前ということで。それで、その都市というものの構造と、暴動という、そういう身体的行動の関係性を、単にコザという地域だけで語ってしまうと、自己完結してしまいかねないので、できればそれ以外の都市の暴動と対比する形で、どうコザの暴動を、70年の暴動を理解していったらいいのかということをやりたいと。

これは、こんなのを言ったら失礼になるんですけど、沖縄の研究者の方はあまりされないですね。やっぱり沖縄のことをどう語るかということを中心にされていくので、私が本土の人間として貢献できることは、それをさらに、もう少し広い視野の中で文脈化してみるということをする必要があるかなと思って、今回、そういう話をさ



せていただいて、あとは本当に現場を知っている皆さんの語りの中から補強していただければなというふうに思っています。

まず簡単にコザ市の、そこにも私、説明文を入れておきました。1970 年のコザ市がどんな感じだったかということを簡単に説明いたします。これは地図です。これは今の沖縄市で、コザというのは美里村と合併するんですね、74 年に。これでいうと、このラインが合併する前の、これですね、このライン、これがコザ市の境界線なんです。つまり、ほとんど灰色の嘉手納基地と弾薬庫で占拠されていると。わずかなほうにだけ市街地があるという、ほとんど基地に占拠されている都市だったという、そういうことです。

前身は農村ですが、44 年に陸軍の中飛行場が完成して、基地ができるんですが、沖縄戦で米軍が接收して、嘉手納空軍基地として拡張されていくと、ご存じの方が多いと思います。56 年にコザ市に昇格するんですが、これはなぜかという基地の町として人口が増えていくということがあったからです。70 年に人口が 6 万 7,000 で、女性が 54%、男性が 46%ということです。10%近く女性の人口が多い。これはなぜかという女性就労者、若い女の人たちが基地の関係の職業で働くために、たくさん集まってきたということがあるからです。だから、女性優位の都市だったということですね。基地占有率は、さっき言いました、ほとんど、3 分の 2 ぐらい基地に占拠されているという状況だということです。74 年に美里と合併して今の沖縄市になっております。

これが今の空中写真に、40 年代、終戦後、沖縄戦が終わってからどういう形で都市計画されていったかというのを簡単に説明します。こちらが嘉手納空軍基地です。見ていただいたら分かりますように、都市の住居密度は全く違います。基地の中は非常に広々としていて、それからそこにたくさんの終戦後、収容所から帰ってきた人たちも含めて、あるいは市街のほうから移住してくる人も含めて市街地が形成されていったという、全く違う住居密度がそこで見られるわけです。そこに軍が軍道を敷設します。これからお話しするコザ暴動が起こるのは軍道 24 号、今の国道の 330 号線沿いを中心に起こります。



この軍道はなぜ敷設されるかというと、これは島内の基地間の輸送を円滑にするためです。ですから、幅員が非常に広い特徴があります。こういう形にまず軍道を敷設します。旧道の上に軍道を敷設するんですが、それで十字路ができて、あまり日本にないですね、何とか十字路という言い方はないですけど、沖縄の場合は何々十字路ってすごく多いです。それは軍道の敷設と関係して、そこに十字路ができるので、米軍もそういうふうに呼ぶんですけど、そういう形で十字路ができる。十字路ができると、そこに人が集まりますよね。道が交差していますので。

従って最初は照屋というところに米軍用の飲食店が集まる、後に特飲街になるんですが、商店街が形成されていって、ここからコザの特飲街と呼ばれる街を、基地に関したサービス

業の経営が集積される場所が展開していくと。これがどんどんゲートの前、後でまた説明しますが、嘉手納空軍基地に引っ付いているところが第 2 ゲート通りです。あの周りにまたたくさんのお店が集積するという、そういうプロセスになります。これは本当に終戦直後の状態です。こんな感じですね。こうやって米軍向けの店が、もちろん米軍向けの店だけではないです。地元の店もちろんあるわけですが、やはり米軍の消費ということが大きくありますので、基地の外にこういう店舗が並ぶということになります。

本当に端折って言っちゃいますが、特飲街がだんだんどの人種の米兵が使うかということで、人種的に使うエリアが分かれています。これは重要なことになりますので、後でまた戻りますが。照屋という結局、黒人街になります。Bush と呼ばれるように白人が入り込むと出られないというような、藪のようなところとしてスラングで呼ばれるんですが、黒人街になっていきます。周辺のところもだいたい黒人を中心とする特飲街になって。吉原というところは沖縄の人向けに営業していくようになっていくわけです。これは東京の吉原から、それをならった名前として、売春街ですが、これは米兵向けではなくなりました。性病の関係でオブリミツツというのが掛かって営業できなくなっています。こういう形。

コザ十字路側は黒人街になるんですが、嘉手納空軍基地に近いところに白人向けの特飲街がいくつかできるようになって、新しい通り、センター通りという通りができて、ここが白人中心の特飲街になります。それから、ゲート通りは諸見里というところ。この中に沖縄の人向けの社交街ができてきます、区画整理されて。ここの中の町というところ。この中の町の前から暴動がスタートします。だから、沖縄の人たちが飲んでるところなんです。そこで 12 月 20 日の夜に暴動がスタートすると。でも、米兵向けの飲食店街というのは人種的に分離されていたというところで、白人街中心に暴動がまず起こる。

これは照屋のほうの人に聞いたんです。「コザ暴動のとき、照屋はどうだった？」と。「静かなものだった」と。黒人街のところでは何も起こってない。白人のほうで起こっていると、そういうことです。コザ暴動はどんなものだったかというと、12 月 20 日です。なぜ今、私、この企画をしたかというと、12 月 20 日に近いからです。ちょうど 1 年前の 12 月 20 日にコザで始まって、沖縄市で始まって、4 月に明治大学でやって、大阪に行って沖縄に帰るということで、ちょうど 1 周年、3 回されたということね。

午前 1 時ごろです。これは 20 日の、19 日の深夜から、夜から飲み始めていて、20 日に日付が変わって、その 1 時ぐらいから始まって、忘年会のシーズンで、土曜日の深夜から日曜日の朝にかけてということです。さっき言いました胡屋十字路というところですね。ゲート通りに近いほうです。コザ十字路と違うところ。胡屋十字路の近くで米人車両が沖縄人軍雇用員に衝突する。これが「第 1 の事故」と呼ばれるものです。そこに地図がありまして、お手元にも取れる地図を置いておき



ましたが、3 回ぐらい事故が起こるんですが、これはちなみに両方とも酒気帯びというか酔っ払っているの。土曜日の夜ですから、どっちも飲んでいるわけですね。それで、ぼーんとぶつかっちゃったということで。

いろいろ聞いていますと、ぶつけられた軍雇用員の人も大したことなくて帰っちゃったと。大したことない事故。こんなことはたぶん日常的に土曜日の夜とか飲んでいたら、米兵と沖縄の人の間ではおそらくよく起こっていたことだと思うんです。このときだけは違っていたということです。これは先ほど藤野先生の話のように、あるいは山田さんの話のように、シェパードが咬み付いたのが何で暴動になるんだというのと同じで、ぼーんとぶつかって倒れて、その人は帰っちゃったけど、それが暴動につながっていくという、そういう発生の不思議なところがあります。

ここから野次馬が集まり始めるんです。さっき言いましたように中の町の前のところ。みんな飲んでいるので、「何か事故があったの」と、ぼーっと見にくるということですね。野次馬が集まり始めて、午前 2 時 10 分に今度は向かい側で自動車同士が、米人車両と沖縄人車両が衝突。ここが暴動を無秩序にしていく、2 つの事件から大きくなっていった。これは米軍の側の資料で分かります。ちなみに今、お話ししている話は、先ほど言いました、後でお話の今さんとか恩河さんとか、だいたい米軍の資料で補足しているんです。詳しいことはこれで分かる。

これは対訳されていて、元の資料は英語です、全部。陸軍の統治機関であった USCAR というところが資料を作ったやつが、普通は 30 年の機密期間、秘匿期間を置いて、30 年後、公開されるんです。70 年までは、もちろんこれは軍の秘密事項ですので、読めないけれども、72 年から 30 年後ですから 2002 年、2002 年には公開予定だったんですが、クリントン大統領が行政命令で 5 年短縮したんです。だから、1997 年から USCAR 文書は読めるようになった。僕もそれからです、USCAR 文書を読むようになった。だから、それまでは知らなかったんです。機密資料だと分からなかったんです。それを早速、実はそのときも公安局の文書ですけど、公開されてなかったんです。市役所の方が行かれて、情報公開請求して、それで公開されたやつです。

これはメリーランドの公文書館に行っても実際には全く違うフォルダーに入っていて、しかもそれはコピーが、原文というか、普通は原文が入っているんですけど、原文が入ってなくてコピーの文書が入っています。黒塗りがかなりまだされているやつで、それを本当に早い段階で情報公開請求されて、今さんとか恩河さんたちが、これを 1 冊の本にされた。それも 1 つの、これは九十何年かな、90 年の終わりぐらいにこの本が出るんですが、そのあたりからなんです。コザ暴動、今まではいろんな語り方をされていたり、いろいろ抽象的に語られたりしていたんですけども、真実に基づいてどう評価できるのかということが始まるのが、だいたい 2000 年に入ったぐらいからですね。それで僕もやり始めたという、そういうことです。

それはさておき、2 番目の事故が起こって、それで群集が無秩序になっていくと。住民による米軍の車両・施設への放火・投石がここから約 4 時間以上にわたって始まるというのが経緯です。午前 3 時 30 分ごろ、その地図にもありますが、これはこの資料から、さっきの資料から出てこないです。2 番目までは書かれているんですが、出てこない。これはなぜ出てこない事故が分かったかという、これは聞き取りから分かってきたということです。それも盛んに聞き取りのこともされているので、それは後でまた言いますが、最近、コザ暴動を知っている方

の聞き取りをかなり盛んにされていて、それで分かってきたことです。

園田というところがあるんですが、その付近で米軍車両を止めようとした沖縄人がはねられる第 3 の事故が起こっていたと。3 回事故が起こっている。この事故のときにも周りに群集が取り囲んで、黒人の運転手を降ろして暴行したというようなことが、あったらしいというようなことが、記録上は、聞き取りの記録としては残ったりします。被害です。

これは主に米軍資料から分かったんですが。米軍資料というのは琉球警察がまず検証して、それで米軍に報告するんです。米軍が自分たちの被害をまたそこで合わせるという形をやりまして。車両破壊は 82 台。そのほとんどが米軍関係車両だということです。これはなぜ米軍関係車両がターゲットにされるかは後でまた言います。もちろん支配層だからターゲットにされたということなんですが、どうやって車を弁別したのかというのは後でお話をします。

負傷者は 88 名。そのうちのほとんど、大半が米軍人・軍属であったと。これは投石とか、そういうことによるわけですが、中には実際に暴行を受けているシーンも、後でまた映像も流されるかと思うんですが、ぼこぼこに蹴られている米兵。それをまた沖縄の人が止めに入るといようなシーンも実際にあったりしますし、血を流している私服の米兵らしき人の写真が残っていたりするんで、暴行がなかったわけではない。あっても不思議じゃないですね、それぐらいのことは。だから、なかったように語るというのは、おかしいということなんです。

それで、建造物損壊が米人の学校。これは第 2 ゲート内に入ったところで壊されています。米軍雇用員の事務所とか。それから、基地の外では交番の派出所、中の町と諸見里の派出所が、ガラスが割れて。写真がたぶんあると思うんです。これはどうも米兵をかくまったので、「出せ」というので石を投げたと、昨日飲みながら聞いたらそういうことらしくて。だいたい私の研究は飲みながら聞いている、「どうですか」というので。

写真がありますので、その部分がよく見えてくるかなと思います。深夜に始まっているので、後でまた見ていただいたら結構です。向こう側は夜で、ずっと回ってこっち側、朝になっていくんですけど。朝になってくると、状況がだんだん見えてくると。地図(前掲:編者注)もありますので、地図と照らし合わせると、だいたいどんな形で広がったかということが、ある程度トレースできるという、そういう状況です。これがそうですね。これも沖縄市のほうで調べられて、こういう形で車両の分布と、それがだいたい何時ごろに破壊されたり放火されたりしているかは、向こうの奥の地図で時間帯に分けて表現されています。

端的に言うと、最初はここで発生するんです。第 1 の事件が発生して、1 時間後に車同士の間で衝突がここで起こって、ここからが一つと広がっていくということです。広がり方が、この地図でいうと右側、島袋という右側の方向と、330 号線の。それから、胡屋十字路で左に曲がってゲートの中に突入していくと。この 2 つに分かれていくんです。そういう形で広がっていくんです。次々と米軍車両中心に焼いていって、ひっくり返して焼いて投石していって、そういう形で展開すると、そういうプロセスになります。

第 3 の事件がここですね。園田近くってここです。だいたい 3 時ぐらいに中の町の派出所が破壊されますので、だいたい 3 時ちょっと後ぐらいと想定されます。あとはば一つと広がって、朝の 6 時・7 時ぐらい前まで、自然収束するまで暴動は続くと。一応暴動と言っておきます。破壊行動が続くと、そういうことです。この背景は、よくいわれていますように構造的要因としての米軍の圧政があって、復帰の不透明性の中から住民がそういう形で暴力的行動に出たと。

近因はさっき言ったように、ちょっとした事故なんです、遠因は糸満で女性の轢殺事件が起きます、数カ月前に。12月に入って、それが無罪判決が出る。こういうことが何度もあったわけです。そういうことに対する不満というのが、暴動の最中にも言及されている。これは記録上、はっきり残っています。「糸満の事件を忘れるな」と、「同じようなことをするのか」ということで、暴動の現場で再三これは言及されているので、参加した人たちに共有されている、ある種の怒りというのは、轢殺事件の無罪判決だということも、これも米軍の資料の中でもそれは書かれています。

この1970年にどんな事件が起こっていたか。これは12月ですから一番最後の月ですね。5月に女子高生刺傷事件が具志川市で起こっています。6月に当て逃げした米兵を群集が囲むという、那覇市でそういう事件が起こっています。米兵のほう囲まれていくんです。だんだん民衆の側にというか、沖縄の人たち側に我慢ならんという状況はあったということです。9月に轢殺の事件があつて12月に無罪判決。ということが本当に頻繁に続きますので、12月19日に毒ガスを、米軍が化学兵器を持っていたので、毒ガスを島外に移設すると。それをめぐってかなりの反対運動があつて、毒ガスを撤去する要求集会が美里村で開かれていて。これは19日の土曜日です。土曜日にそこに参加していた組織労働者とか活動家とかを含めて、中の町でその後、忘年会をやっていたというので、おそらくそういう形の活動歴のある人たちが、暴動の中でも一定の役割を果たしただろうということは論文のほうに書いています。

これも藤野先生よりちょっと高いんですけど、4,000円です。置いていますので、もし良かったら手に取って見ていただけたら。そこら辺のことをいろいろ書き込んでおります。それで、そこで書いているのはどういうことかという、コザという都市をどう理解するか、軍隊と市民が接触している都市であると。それは武装化している、しかも異民族の武装集団と、それから武装解除されている、しかも被支配層のウチナーンチュというか沖縄の人たち、別のグループと。そういう非常に非対称な関係の中に置かれている。それが基地のフェンスとかゲートを通して、2つの社会集団が接触しているということです。その間を交錯する。軍雇用であつたり、ちょっとした物資を入れたりとか。サービスを提供するということで、日常生活の中でこの2つの社会集団というのは複雑に交錯するんです。そういう形で境界都市的な性質を持っているというので、そういう話をあそこで書いています。

別の言葉でいうと「コンタクトゾーン」というんですね、境界都市というのは。植民地都市もそうです。社会的、空間的に異質なものが、分断されたり接触する場所であると。そういう性格をコザは持っている。民族、人種、職務、階級、ジェンダー、出自をめぐって非対称な力関係を持つ社会集団間に日常的に緊張関係があるということです。これは何も米兵と沖縄の人だけじゃないです。本島の沖縄の人と奄美から入ってきた人とか、他の離島から入ってきた人とか。さっきも言いましたように、女性就業率がすごく高いというのは、これはいわゆる性産業に従事している女性が多い。その人たちが一般女性からどういうふうに見られるか、一般の人からどういうふうに見られるか、簡単に想像できることですので、そういう形で非常に複雑な社会階層を含んでいたと。極めて複雑。その間に緊張関係があつた。差別の関係。さっきちょっと人種的に分かれていたと言いました。米軍の中での黒人と白人による差別というが歴然と都市景観の中に存在するという、非常に特異な性格を持った都市だったということです。そういうところで起こっている暴動だということですね。

ですから、激しい感情や暴力が発現しやすい。女性に対する暴力。つまり、これは殺人も

含めて、強姦も含めて、多々あるわけです。これはまた別の研究で僕もやっています。タクシー運転手に対する暴行が多い。乗り逃げするんですよ。金なんか持っていないのにタクシーに乗って、あとは殴って逃げていくという。先ほど那覇で囲まれた、群集に囲まれるって、だいたいタクシーの運転手を中心に囲んで、逆に米兵をぼこぼこにしたりするんですけど。そういう形でタクシーの運転手と女性の被害の多さは、すごく際立っているんです。それから、もちろん対米軍という、いろんな抵抗運動はありますので、それと黒人対白人という対立がコザの場合は非常に先鋭化して出てきます。

コザ暴動を私はどう分析しようとしたかという、学問のレベルではなくて、コザ暴動を書かれたものは多いんですね。だいたい沖縄人の抵抗を賛美する記事が多い。これは分かります。なぜ賛美するかということは分かるので。ただ学術的研究は非常に少ないです、この暴動に関して。事実関係資料としては先ほど言いましたように、米軍の公文書が使えるようになってきましたので、そこから何を読み取るかということが、かなり重要になってくる。それと、それだけでは不十分です。不十分ですので、当時のことを知っている方に、たくさん聞き取っていくという。そこは後のお話ししてくださる方なんかの助けを借りて僕はやっているわけです。

先ほど情報公開請求された資料としてはこれがあります。公文書館の、あるいは沖縄県の公文書館にも所蔵されています。USCAR という琉球列島米国民政府の公安局文書の1つのフォルダーです。“Koza Disturbance”と呼ばれているフォルダーがあるので、ここに情報公開請求された元の原文のコピーがあります。先ほど言いました、これもそうですね。97年時点で公開されたんですが、早くも沖縄市のほうは99年で対訳刊行をしていると。これは非常に早く対応されたんですね。これで一般に扱いやすくなったということです。

それから、聞き取りのほうは後ろに今、立っておられますけれど、古堅宗光さんが2010年、これはコザ暴動40年目に当たります。それで、「コザ暴動を記録する会」ということで約1年をかけて非常に多くの方に当時の暴動についての聞き取りをされています。これは残念ながら私、ちょっと忙しくて全然、他のは関わったんですけど、ここは関わってなくて、ただ資料を提供していただいたので、私はその分析をさせていただきました。これは暴動の参加者および目撃者の語りから構成されています。市史編集担当中心にされて、まだ非公開です。内容はいろいろな問題があるかもしれないけど、できるだけ早く公開してねという、市の方も来られていますので、後でまた言おうと。これは公開したほうがいいんじゃないかと思います。

何が分かるかという、どうなったかということも重要なんですが、これはそれぞれの人の語りですので、客観的にどうかという評価は難しいんですね、こういう資料というのはね。米軍のほうはだいたい被害状況を琉球警察の資料から押さえていますので、ある程度、客観性はあると思う。しかも、それは機密資料ですので、だいたい事実を、機密だけど事実を記載している部分もあるだろうな。どこまで本当かは分かりません。ただ、語りというのはものすごく難しい。これを客観的なものとして見るのは難しいんですが、どう記憶されようとしているのかと。

つまり、コザという基地の町と、そこをめぐるコザの人たちの集合的記憶というものが、どんなふうに再構築されていくのかというのを分析することは可能かなというふうに思います。このプロジェクトそのものも今度は写真という、もちろん聞き語りと直接つながっているわけではないんですけど、写真という画像資料を通して、その記憶をどう語り継いでいくかという方向性では、ナラティブというか語りから再構成しようとされた記録する会の事業と、今度は写真を通

して何を受け取っていくかということをする「コザ暴動プロジェクト」というのは、ある意味、連続している。中のメンバーさんも共通しているところがありますので、そういう活動になるとみなしていただいているのかなと私は勝手に思っています。それで、協力するという形なんです。

それで、12月20日、逮捕者の資料が米軍の資料の中に出てきます。日本というか沖縄市のほうで公開されたのは、これは個人名とかは全部伏されているんですけど、アメリカに行けば分かりますので、私はそれをコピーしたやつを分析すると、こういう形になっています。21人、即日の逮捕です。この後、また追加でいろいろ逮捕されたり釈放されたりということで、これは変転していくんですが、まず一番最初の資料で逮捕者として属性が出ているのは21人。名前から判断していくと全員男性ですね。女性は関与してない。

年齢が分かるんですが、平均年齢26歳。20代が一番多いです。前線で頑張っていたのは若い人たち。ほとんどコザとその周辺の人たち。コザって中部の中心ですので、当然その夜はコザ市の周りの人たちも来ていたというので、中部のコザ、中部中心と。職種ですけど、一応推定も含んでいますが、極めて多様です。だから、労働者の運動ということではもちろんなくて、非常に大衆が蜂起したというか、こういう形で暴動に参加したということが分かります。職種は極めて多様です。た

だし、軍雇用員のように基地の経済に依存している人、あるいはバーテンダーのように米軍の消費に依存している人も加わっているということです。だから、利害関係があるので暴動に参加しないと、そういう冷静なものでもなかった。むしろ、そういう関係の中で生活をしているからこそ不満を持つというケースも、おそらく多々あったんだろうというのは聞き取りからも感じることができます。

それを40年後に記録する会の証言者を集められて、これだけたくさん証言を取られたんですけど、当時住所はほとんどコザです。当時年齢もだいたい今言いました逮捕者の属性とか若い20代の人。証言者はほとんどが男性です。1人だけ女性の方がいます。当時職業も極めて多様で、あえて警察官とか検察とか、そういう形で、暴動を制圧する側に、あるいはそれを裁く側に回った方の聞き取りもされて、非常に多面的な聞き取りをされています。参加している人だけではなくて目撃者も含んでいてということで、そういう聞き取りの内容だったということです。

詳細はさっきのやつを見ていただいたら結構なんですけど、各会で複数のゲストにだいたい2時間ぐらいのインタビュー。これは読むのが大変なんですけど。合計約18時間分の書き起こしのデータがあるということです。22名で女性が1人だけ入っていて、当時コザで居住もしくは就労していた。年齢・職種はさまざまと言っていますが、年齢に関しては当然、今、語れる人ですので若いんですけど、若い人がかなり目撃していた、参加していたと、そういうことです。

語りは非常に多様に、いろんな内容を含んでいます。情念とか誇りとか主体性とか他者へ

12月20日逮捕者の属性

性別(推定)	年齢	住所	職業(推定含む)	
男性	21	10代	4	コザ市
女性	0	20代	11	具志川市
		30代	5	北谷村
		40代	0	浦添市
		50代	1	宜野湾市
		平均	26	那覇市
			11	会社員
			3	軍雇用員
			2	学生
			2	港長
			1	市職員
			2	電器店経営者
			1	ホテル従業員?
			1	バーテンダー
			1	タクシー運転手
			1	修理工
			1	室内装飾業
			1	建設労務者
			2	無職

USCAR公安局文書、沖縄市企画部平和文化振興課(1999)

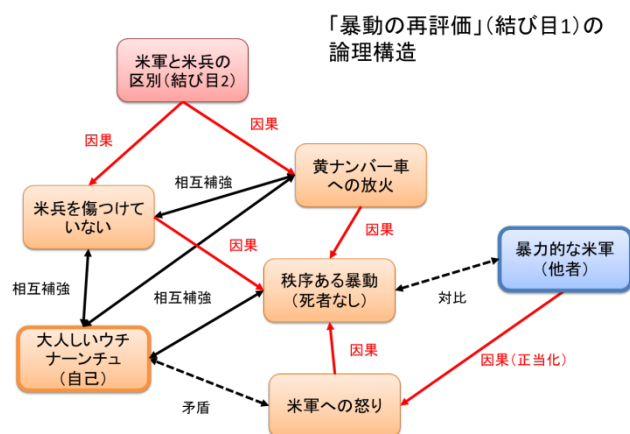
の態度とか境界性とか場所の記憶とか、それをずっとコードを付けていって、だいたいこういう語りが大事なんじゃないかというのを私の主観でというか解釈で収集していくことをやって、コード化、ここは専門的な話なのでやめておきますけど。要するに何に怒ったんだと、何に頭にきたんだというようなことを、ちょっと見てみよう。そこから集合的に共有される、語られた記憶の構造があるのかないのかというのを分析してみようという、学者ですので、こういうことをやってみようと思いました。

例えば、こういう語りがあります。ある人はこういうふうに。「ただあの…よく暴動って言う、今タイで、凄い暴動起きてて、治安悪いような状況。ああいうイメージじゃないんですよ。っていうのはですね、当時はですね、他に外人車両なんか結構走ってるのが居て、みんな止められたんです」。これは「他に」というのは、その日ということです。当時、その日に外人車両を止めたんですね。「みんな止めていって、止められて、これなんかもうひっくり返したんだけど」って、写真もありますね。ひっくり返された車両がいっぱいあるんですね。「決してこの人達に危害を加えるとか、そういうことは絶対にしなかったですよ」という語りが出たということです。これはたぶんその人の記憶として、そうだったということですね。もう丁寧に「どうぞ降りて下さい」。降りてもらってから火をつけて燃やすと、ひっくり返すという。だから、「運転している人には何も危害を加えないで降ろしましたよ」と、こういう語りが非常に多いんです。

こういう語りは結局、暴動ではあるけれども、人身を傷つけないという理性的行動が存在したんだという言い方をされる方が非常に多い。いいか悪いか言っているんじゃないですよ。語りの1つのパターンとして特徴的にコザ暴動を語るときには出てくると。これは事実に基づいている部分でもあります。

ところが、こういうことを言う人もおられると。「沖縄を『癒しの島』とか何とか言ってるけれども、ね。だから癒しの島だから、暴力沙汰…『アメリカは怪我人がいなかった』とかさ、何がどうだったとかさ。これ美化じゃない？そういう意味で。で、『やっぱり沖縄の人っていうのも怒る時は怒るんですよー』みたいなさ、本土サイドからの目っていうか、その…そういうものがあまりにも書かれすぎて」ということがある。だから、本当に何が起こったのかというのが分かりもしないで、けが人を出さなくて、秩序ある暴動だというのも、あんまり良く思わない人たちもいる、そういうことですね。

こういうのをどういうふうに解釈するかというので、ちょっと図式的に書いてみたんですが、一番中心的というか非常に本当に僕が読んでいて思うのは、こういう言葉が出てくるんです。「秩序ある暴力」。こんなのは矛盾しているんですね。暴動が秩序あるなんて言ってますね。暴動が秩序あるなんて言って、秩序があるんだったら暴動じゃねえよということなんですけど、「秩序ある暴動」という、そういうある種の矛盾した言い方をされる。死者はない。人に危害を加えてない。いろんな言い方で補強されるんですが、これは大きく2つあるんです。



1 つは「ウチナーンチュはおとなしい」という言い方があるんです。おとなしいウチナーンチュが怒ったんだという言い方をされる。ウチナーンチュはおとなしい自己像はわりと共有されている。それはおそらく、あまり言及はされてないですけど、「暴力的な米軍」というのは、そういう暴力が日常的にあるわけですので、他者としては米軍をイメージしてウチナーンチュはおとなしいというような、そういう自己と他者の関係で、みずからを位置付けるという言い方の中に、「秩序ある暴動」という言われ方がされると考えられるところがあります。

そこはいろんな実際は言葉の要素と関わっていて、どうして「おとなしいウチナーンチュ」が怒るんだと。米軍がひどいことをやっていたというので、暴力的な米軍がいて、米軍の暴力が日常茶飯事で人権が侵害されて、従って怒りがあるので暴動を起こしたんだという言い方ですね。ところが米軍の怒りで暴動を起こすウチナーンチュというのは矛盾するんですよね。自分たちがおとなしいというのは矛盾する。しかし、それは「秩序ある暴動」ということで、「おとなしいウチナーンチュ」と矛盾しないで相互補強できるというのが、言葉の 1 つの、論理の構成としてはあります。何とか自分たちはおとなしい、でも怒らざるを得なかったということを、この矛盾した要素を何とかつないで、説得的に言わないといけないというところが出てくるので、どうしても「秩序ある暴動」という言い方がされるような感じがしています。

じゃあ、なぜ秩序があるんだと、なぜ秩序があると云えるのかというと 2 ついわれることがあります。それは車に放火したということです。建物とか、そういうものは放火しないで、「黄ナンバー車をターゲットにした」という言い方です。それから、「米兵は傷つけていない」という言い方があります。その 2 つを通して、これは「秩序ある暴動」だというふうにいわれる、そういう要因となっていると。この言い方がお互いに補強しているという、私はそういうふうに考えます。だから、米兵を傷つけない。なぜ人を傷つけないかと。車を破壊したんだと。車を破壊して米兵を傷つけないのはウチナーンチュとして、元々は平和的なウチナーンチュの行為として正当化できると、そういうふうな。矛盾なくする。皆さんがおっしゃっている、語る暴動の在り方が、できるだけ矛盾なく伝わるようにという言い方を、どうしてもされているなど。

じゃあ、どうして黄ナンバーに火をつけて米兵を傷つけないというような、そんな弁別の仕方ができたんだと。米軍と米兵というものを区別して、米軍の仕事中の車を破壊するけれども、米兵は傷つけていないというような弁別ができるんだと。見境なく車も米兵も傷つけることが起こったって不思議じゃないんですが、それをどうやって弁別できたのかという話になると、それは日常的に区別できる、日常生活の中で。米軍に対しては怒るけれども、米兵に対して怒るわけではないという言い方がされています。こういう形で米軍と米兵が弁別されていく、それから車と人を弁別するという形で、暴動が秩序ある暴動という矛盾した言い方で表現されていくという、そういう構成があります。あまり難しいことをお伝えしても分かりにくいので、話を進めます。

だいたいこれは、僕は行動空間と言っているんですけど、暴動が起こる空間の構成を地図の上に重ねながら、どういうふうにかこっていたかということを、



ちょっとだけ説明しますと、灰色のところが軍事基地です。そこに本当に南側の狭いところに、30%弱のところにコザ市民が住んでいるわけですが、こういうふうに軍の空間、民の空間があると。

暴動がこういう形で起こります。中の町で起こって二手に分かれます。北側と南側と二手に分かれて。重要な証言がありまして、ここのところで初めて分かるんですけど、こっちのセンター通りに行こうとした群集が止められて引き返してくるという行動があったということが分かっています。ここの聞き取りの中で。今まではこの2つで分かれていったということなんですけど、実はこっちに、当然ここは特飲街ですので、ここにたくさん米兵の車はあるわけですが、燃やそうとして入ろうとしたんですけど、引き返してきたと。それを止められたということもあるし、実は暴徒が入ってくるけれど、車がなかったということなんです。

車を対象にして動いていますので、車がなかったら燃やせないもので、それで戻ってしまうという、そういうことがここで生まれてくるというのが聞き取りの結果として分かってきます。島袋三叉路と第2ゲートのところまで暴徒が来るんですけど、センター通りの特飲街の手前で引き返して帰ってくるという、こういう行動が確認されています。これは何でやということなんです、大事なところは。

おそらくここはまた話の中でいろいろ出てくるんですけど、つまりここがコザの最もハイブリッドなところだと。米兵との日常的な交錯が起これと、センター通りの中で。そこでももちろん米兵に対する怒りもあるし、あるいは生活もそこで行われるということで、コザという都市が、例えばセンター通りに象徴されるように、こういう軍と民の交錯するような空間の中で、米兵と日常的に交流があると。

交流というのは、もちろんポジティブなもの、ネガティブなものがあるんですが、それは結局、米軍と米兵を区別することを可能にするんだと。他のところなら米兵と米軍は区別できないかもしれないけど、コザの場合は日常的に米兵と交流していることがあるので、米軍は嫌いでも米兵は嫌いじゃないということにされるので、米軍と米兵の区別というのが弁別できるというロジックがあります。それが結局、米兵は傷つけないけれども、黄ナンバー車は破壊するという話につながっていくという、そういう論理構造がざっくりあるのではないかなと私は思います。

詳しい分析の方法は私の論文を見てもらったらいんですが。何が言いたいのか。何に怒ったのかということなんですけど、もちろん米軍の圧政に対する不満の爆発と今までいわれているように。それから、今までの山田さんの話も藤野さんの話を聞いていたら、日常的に鬱積しているもの、それをどういう形で発散させるかということはもちろんあったと、それは否定できないと思うんですね。それ以外に説明できる手段が僕もないんですが。

陰謀説は全然説得的でない。あるんです、陰謀説。米軍資料からも、それを示唆するような記録はないですね。そういうことを言う人もいるんですが。瀬長亀次郎が実は裏で糸を引いているとか、全然そんな、共産主義者とか、そんなことができるのか、何千人もこういう形で。でも、そういうことを言う人がいるので、そんなのは全然説得的ではありません。

やっぱり自然発生的というか、今までのお2人の話のような偶発的なものが重なっていく形。しかも、それが構造的な不満とどう偶発的に結び付いたかというような形でしか、それは説明できない。それを何か共産主義者の陰謀のようなものに、いきなり理性化して説明させるということ自身に非常に無理がある。説明できないので、こんなことを言い続けていたら、いつまでたってもこの暴動を正しく理解できないと、そういうふうに思います。

ただ、何に怒ったのかというのが分かりにくかったら、何に怒らなかったのかというのを見ればいいということなので、それで攻撃対象を非常に視覚的に弁別する側面があると。この視覚的に弁別したということが、結局は無秩序の中の秩序というものが暴動の中にはあるということですね。暴動として非常に非理性的で無秩序な行動として存在するんだけど、暴動の中身そのものを見ていると理性化されている行動が存在するという。これがおそらく暴動の性格だと思えます。

「暴動」と言っちゃうと無秩序かもしれない。そうではなくて、そこに秩序化のある種の要素が存在する。だから、「秩序ある暴動」ということが言える。これは正当化するために言うということではなくて、暴動の中には秩序もあったということです。その秩序はいったい何だったのか、なぜその秩序は維持されたのかとか、そういうことを調べていかないといけないんだろうなというふうに思います。

1 つ重要なのは視覚的に弁別していったということです。米兵と米軍というのは、車と米兵が分かれています。負傷者は存在しています。それから、視覚的というのはこれですね。黄ナンバー、白ナンバー。白ナンバーは相対的に少なかったと。それから、一部破壊されている部分もあるようですので。でも、ほとんどあそこに展示しているナンバープレートで弁別できるので。たとえそれが日本車であろうと、黄ナンバーを付けていたら、所有者は米軍関係者なので、それをひっくり返して燃やすというふうな、視覚的に誘導できたと。

従って、それが存在しないところ、黄ナンバーが存在しないところは攻撃に行かないということなんですね。なければ行かないし、白ナンバーであれば攻撃しないので、視覚的弁別というのがあったと。ただし、これは誰かが言ったことではないんです。自然にそうなります。今までの資料から見ていて共有されていくんです。共有の基盤が、黄ナンバーというものがコザ、沖縄で何を意味していたかという、そういう形で説明するしかないです。それが米軍の圧政を象徴するものとして黄ナンバーが認識される、簡単にそういうふうに解釈できると、コザに住んでいる人たち。それがなければ黄ナンバーだけを弁別して攻撃するという行動には出ない。しかも、誰も「そうせえ」と言ってないというところに出てくるということですね。

こちら辺も日常的な構造的差別の存在と、それを何で弁別するかということが、即座に暴動の中で共有されていく。これは秩序と言えど秩序なんですけど、暴動というのはそういう、藤野先生の話の聞いていても、派出所だけを攻撃するとかという形で弁別していくということがあるということです。車と店舗、これも沖縄の場合はそうです。車だけをやって店舗の類焼を防ぐと。これも秩序化の側面です。暴動、無秩序の中の秩序ということで、つまり店舗の延焼を防ぐために車をまず車道の真ん中に持ってくるんです。そこから火をつける。車を押している写真がありますので、4〜5 人の男性が押すと。押していった道の真ん中に置いて燃やすということ。

あるいは、ひっくり返してボンネットというか車体の上のところを押せば、わりと動かしやすいらしいです。サイドブレーキが掛かっている車を押すのは大変なんですけど、ひっくり返して、ぐっとずらせば、「よいしょ」とやったり、あるいは「いちにのさん」でどーんと上から押すと、反発でぼーんと跳ね返って、ひっくり返しやすいかというのがあって。そういう形で車を動かして、真ん中のほうに寄せていったということですね。

その真ん中の國吉さんの写真とかは、だいぶ道の端っこに寄せられている。それは車が通るようにするために寄せたんだと思うんです。もっと真ん中にあっただと思うんです。真ん中

に置いて、ばーっと燃やしといて、朝、全然車が通れなくなるというので、動かさないといけない。真ん中のほうで燃えるというのは、たぶん特徴的なものとしてあると思うんです。これも暴動の中の秩序化の1つの行動の要素としてある。

それから、これはかなり神話化されたところですけど、黒人は傷つけてないという言われ方がされています。ただ、さっき言った第3の事件のときに実は黒人のドライバーを暴行しているんじゃないかということもあって。白人街で黒人が相対的に少なかったということもあるかもしれないですね。黒人の負傷についての語りがほとんどない。むしろ黒人は傷つけてないという言い方をする人が多いです。これは人種差別の問題と関わっていると思います。

参加者はどこに進まなかったのか。さっきも言いました。黄ナンバー車がないところは進まないです。黄ナンバーを見てするので、ないところには進まない。さっき言いましたようにセンター通りに行くんですけど、自警団、自警団というか組織化されていたわけではないですけど、だいたいそういうガードマン的なことをやっている人たちがいて、そのリーダー的な人が通りに入っているところを阻止したという語りがあります。阻止した後、さらにどんどん入ってくるだろうから、米兵の車は見つかりにくい小さいスージと言うんですけど、路地の中へ隠したということがあります。従って、ないのでセンター通りはほとんど燃えてないんです。車は燃えてない。ゲートのほうはたくさん燃えている。330号線でもたくさん燃えている。ただ、センターの場合は全く被害がない。リーダーの方ですけど、後ほど通り会に表彰されています。米軍の車を守ったというので。そういうこともあるということです。

蜂起しなかった住民あるいは場所というのが存在しているということが、実は私が今日の発表で強調したいところです。全市的蜂起とよくいわれるんですけど、そうじゃない。2つメインの通りがあるんですけど、1本の通りでは全く破壊が起こってないということです。一方においてはたくさん破壊されているんですけど、もう一方においては起こってないということです。

沖縄を一枚岩に語るというのは、僕はものすごく抵抗があって、私は地理ですので、細かくやっぱり見ようと思うんですね。それぞれの地域、どういう形で起こっていたかと。センター通りは全然蜂起してない。これは何でなんだということです。どうしてここは黄ナンバー車を隠したりとかできたかと。

それは当然そこが米軍と利害関係があって、米軍の被害を守るための防衛行動を住民の側が取ったという、そういうふうの説明できる。つまり、これがハイブリッドだと思います。コザというのは一枚岩でないんです。みんながみんな米軍に対して、怒りをもちろん持つ、共有できる素地はあると思うんですけど、その出方が違うんですね。本当に暴動に参加する人と、これをされると僕らの生活が困るわと、私たちの生活が困るので、やっぱりそれを守らないといけないというので、米軍の利害を守ってしまうという部分もあると。これは沖縄を考えると非常に重要な要素だと僕は強調しておきたいところです。

話はこれで終わらないんです。暴動はそれで終わったかという、住民の蜂起というのはそれで終わったかという、終わってないんです、実はこのコザ暴動では。この8カ月後に数百人レベルで大きな事件が起こっているんです。ほとんど実は、調べれば出てくるんですが、ほとんどいわれないです、コザ暴動との関連では。いわれない理由はいくつかあって、それは人種差別的な意識と結び付いているということと、コザ暴動があまりに美化されているんです。この2つの起こるメカニズムというのが、なかなか結び付かない。

さっきの蜂起しなかったセンター通りが、なぜコザ暴動の中であるんだということを、2回目

の事件を理解すれば分かる。さっきちょっと見せましたように、実はコザの特飲街というのは、はっきり言って人種的にセグリゲートされていたんです。元々照屋というのはミックスだった。一番最初に特飲街がここでできるんですけど、ここは白人も黒人も最初は交ざっていたんです。ところが、アメリカの人種差別というのは激烈なものとしてありますので、米兵の中でもすごい人種差別があるわけです。それはどういう形で出るかというと、黒人の側の暴力で出るんです、基地の外に出ると。基地の中でやってしまうと、それは制裁の対象になりますので、外に出て白人に対して暴行を行うという。つまり、暴力というのは秩序の外側にあるので、基地の外に出て、そして黒人の側が白人を殴りつけるということが照屋で起こるんです。

そういうことがあるので、米軍というのは終戦時に、第2次世界大戦が終わるころかな。ちょっと何年か忘れた。トルーマンが行政命令を出すんです、人種統合政策。それまでは、米軍というのは黒人部隊と白人部隊がはっきり分かれたんです。それを統合しないといけないというふうに軍規で決めたんです。従って統合軍になる。要するに部隊としては白人と黒人は一緒に生活するわけです。しかし、基地の外に出れば別々になる。つまり、それは歴然と差別が残っているからです。そして、それが軍の管理の及ばない、こういう特飲街のところでは白人に対する暴行として出てくるんです、暴力として。

この暴力の結果、ここから白人が逃げていくということなんです。逃げていって、そしてこのあたりが黒人街になり、そして逃げていった結果、ここら辺が白人街になってくるという形で、特飲街が形成されていくというプロセスがあります。こういうふうになっていたら白人も黒人も、言い方は悪いですが、ある種の秩序の中で、沖縄の人にとっても、照屋の人は黒人相手に商売をするし、センターとかゲートの人は白人相手に商売すると。それで、うまくやっていたら良かったんですが、このセグリゲーションがだめだということが60年代からいわれるようになるんです。つまり、これはアメリカ軍における人種差別をそのままコザの都市の景観の中に反映しているので、こういう形で黒人と白人が全く違うところで飲食するのは良くないと。これが前言った公民権運動の中で出てくるんです。従って、どういうことが起こるかという2つのことが起こるんです。

1つは白人街側で黒人を冷遇するような差別的営業が制裁を掛けられるようになるんです。そんなことをやってはいかんと。それは黒人に対する差別だということです。それは沖縄の自営業者にそういうことを言うんです。白人と黒人の間の差別がどうかという問題ではなくて、沖縄の自営業者が黒人を冷遇するような営業をするなというんです。したら営業許可を取り消すぞと。ホテルをオブリミツにして使えないようにするぞと来るわけです。

もう1つは黒人解放運動です。照屋というところは黒人の政治的な運動のメッカになっていくんです。そこでブラックパンサーとか、そういう黒人過激派が、もちろんこれは脱走兵を救出するという米兵の活動なんかがそこに入ってくるわけですけど、極めて黒人の権利を擁護していく、そういう運動が照屋側からスタートするんです。米軍は白人街における差別はいかんとということを使うわけです。

この2つがあったから黒人の特飲街利用が分かれていたのが、こっちへ移ってくるようになるんです。だから、何が起こるかという、またけんかが起こるんです。起こっていったというところで、この背景の中から「第二コザ事件」というのが起こるようになります。これは米軍側の人種統合政策と黒人解放運動、60年代・70年代の2つの要素になってくる。人種対立を照屋から白人街に拡散させて、実は照屋自身をなくするという動きなんです。ああいう黒人街があ

っては都合悪い。これは米軍の上院議員とかが議会で問題視するようになっていったということで、本国としてもこういう状況は認められない。従って、できるだけ、照屋に白人を入れようとするんですけど、うまくいかないの、照屋の黒人を白人街に入れていくという。それをやるので照屋は衰退すると、そういうことです。

それから、さっき言いましたように対黒人経済的差別というのは米軍の制裁対象になるということです。白人を顧客とする経営者とか接客者の女性が、そういう差別の名目で制裁を受ける。それはなぜかという黒人兵は消費が低いし、白人街でトラブルを起こすので、そういう形で差別的な営業になったということです。それから、黒人解放運動によるそういうことで、8月17日に白人街で「第二コザ事件」というのが勃発します。

それはゲート通りに集まった黒人集団約50名がセンター通りで人種差別撤廃のデモンストレーションをするんです。白人街でできなかったことを、こういう形で黒人がデモンストレーションをします。それで、そのままゲート通りに集結したのがセンター通りに入っていった、つまり白人街ですので、白人向けの店舗を荒らすという、そういう行動がありました。そこに対して店舗関係者・住民たち約100人が黒人集団と対峙して、コザ署に投石したりというような事件が起きました。

つまり、1つ言いたいことはコザ暴動というのは、コザという都市の複雑な構造を忠実に反映する形で分析するのであれば、全市蜂起でなくてセンター通りは蜂起していない。ところが、その8カ月後、全く異なった理由からセンター通りの経営者たちは黒人を追い出そうとしたということなんです。だから、非常に違う構造ではあるんですが、どちらも米兵あるいは米軍に対する反発は示したということなんです。

こういうプロセスで、おそらくコザというのが米軍に対しても非常に暴力を含めて対峙するような状況に、70年、71年、それから復帰にかけてなっていったんだろうなというふうに思います。これが私のコザの理解の仕方です。コザというのは、コザ暴動を通して、第二コザ事件も通して、段階的に米軍に対する抵抗を示していったということです。コザ暴動だけではない。コザ暴動で蜂起しなかった人たちも第二コザ事件では、それらに対する、非常に異なっている感じがするんですけど、ある種の抵抗というのを示したということです。それは正当化できるかというのは、コザ暴動ほど正当化できないと思うんですが、人種差別の要素がかなり入っていますので。

それで、何で今、コザ暴動を語らないといけないのかということを、ちょっとお伝えしたんですが、これは僕もずっとコザ暴動プロジェクトに参加させていただいて思うんですけど、やっぱり今、語らないといけないという気持ちで皆さん、プロジェクトを続けられています。なぜ今、語らないといけないかというと、この間もオスプレイが落ちていますけど、沖縄県に対する構造的差別が残存していると。その中でこの暴動をどういう形で評価するかということがあると思うんです。その中には沖縄社会の中に内在するような、保革の対立も含めてですけど、政治的亀裂があると。その中で徐々に抵抗する思想と行動が後退しているという思いが、おそらくおありなんだろうと私は思います。

でも、コザ暴動は神話化されていいかという私はそうではないと思うんです。さっき言いましたように、第二コザ事件のようなものも含めてコザの複雑性を理解していく形で、ああいう暴動の評価というのは必要になってくると思うんですが、それを考えていく上で、これから全く別の話なんです。選挙の話。最近の選挙の話です。コザ(沖縄市)から本当は何が見えてくる

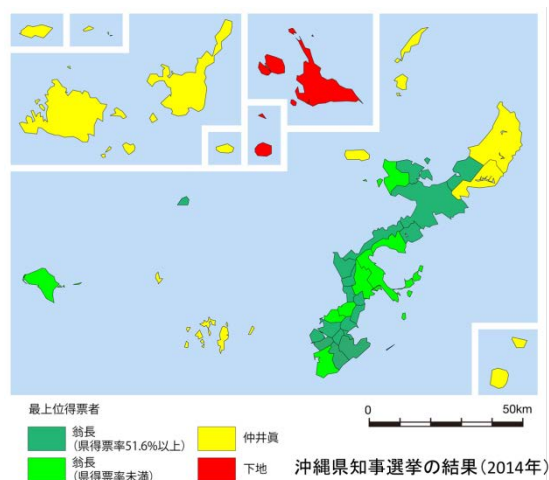
のか。この都市を語ることで何が見えるのかという話をします。それはシノドスという荻上チキさんの編集されているインターネットのサイトがあるんですけど、そこで2回ほど依頼されて、僕、選挙の結果を分析したのを出しています。一番最近のやつは1週間ほど前に出した、10日ぐらいか。シノドス、これは一般公開されています。2014年のやつは有料なんですけど、最近のやつはありますので、ちょっとシノドスで山崎って入れてもらったら、すぐ出てきます。また見てもらったら、よろしいかと思いますが。あと数分で終わります。

これが沖縄の米軍基地の分布ですね。僕らは「沖縄、沖縄」と言っちゃうんですけど、僕から見た沖縄ってこういう形で、基地はいろんなところにあるんです。もちろん中部中心にあるんですが。南部にあんまりなくて、北部は非常に北部訓練場も含めて演習場の基地があつてということで、沖縄の、まあ、沖縄島の場合です、沖縄島を見ても基地の分布は違うんです。ということは住民と基地の関係は当然違うんです、地理的に。それを踏まえて沖縄はどうだということを言わないと、さっきのコザがどうだということを言わないと、なぜ住民は生活との関係の中で特定の政治行動を起こすのかということは理解できない。沖縄をいつまでも一括りで言っていると。まず基地の分布が根本的に地域的に地域差があるので、その上で沖縄の投票行動がどうだったかということを見ないといけないと、そういうふうに書いているわけです。そういうふうには考えないといけないということを書きました。

沖縄県知事選挙の結果、最近の2014年はやめておいて、70年から2010年までの40年間の保守と革新の投票傾向を分けて、保守候補と革新候補で分けると、県全体はスイングといって、つまり保守の知事が選ばれて、革新の知事が選ばれたりしている。これはなぜそういうふうにはスイングするかというと、浮動票が多いんです。固定票が少なくて。それぐらい沖縄は保守と革新というか、固定しているのではなくて、そのときそのときの状況で、政治的な傾向性、違う知事を選ぶという、そういう傾向があるということです。

でも、これは平均なんです。総計なんです。よく見ていくと、読谷村は革新地盤なんです。ここは反戦とか平和行政とか非常に強いところですので、革新系の首長がずっと選ばれている、そういう革新の地盤です。最近でこそ、ちょっと保守と革新というのが絡んできていますけれども。一方で同じようにキャンプ・ハンセンがある金武町とかはほとんど保守なんです。保守票なんです。首長もほとんど保守です。これらの総計として県知事選挙の結果があるということなんです。私は知事選挙の結果を見て革新か保守かと言っているんですけど、地域別に見たら、違う投票傾向の総計なんです。これは忘れてもらっては困るところなんですけど、沖縄市はどうか。県と同じ形なんです。普通はこういうことは起こらないんです。大きなスケールで見えていることは小さな区域の総計なので、小さな区域で見たら変わっていくのが普通なんですけど、沖縄市は変わらないんです。これはすごく重要なこと。

なぜかという、沖縄県全体の社会構成の縮図が沖縄市にあるという言い方は、ある程度できるということなんです。それは何だったかという、コザ暴動の中に表



れるような矛盾として、あのような社会がそのまま沖縄の社会として、総計としては見えるという。スケールを変えると選挙の結果は変わるんですけど、変わらないんです。沖縄市は、あるいはコザは、沖縄の縮図だとよくいわれるんです。琉球新報さんが今日来られていますけど、沖縄タイムスも、沖縄市長選挙は知事選挙の前哨戦だという言われ方をされるんです。それはなぜかという、沖縄全体を平均値で見たときの社会構成が、コザ市、沖縄市を見たら似ているということなんです。それは何かというと量的な基地をめぐっての投票行動、住民の政治的傾向性が保守と革新、揺れるような状況にあるという、そういうことなんです。コザ暴動を見るには、その部分を見ないといけなくて、抵抗する側だけのものとして見てみると、ちょっと見落とす。

それで、これが沖縄知事選挙の結果として、こういうものがあります。何が言いたいかというと、山原と先島は保守の知事を支持したということです。黄緑と緑が翁長さんですけど、仲井眞さんは黄色、それから赤いのは下地さんで、これは宮古島出身ですので、下地さんはこういう形で投票行動、宮古島に集中しています。こういう形で山原と離島部、先島は保守という、そういう結果です、はっきり。これはこの間の参議院議員選挙です。ほとんど同じパターンです。何が言いたいかというと沖縄が分裂しているんです。先島と山原というところは保守系の候補を支持する。これはずっと4回の選挙で、ほとんど3回ぐらい、こういう形が続いています。「四度、民意が示された」といわれているんですけど、北部と、山原と、それから先島の民意は反翁長という感じに出ています。これは事実です。県紙は翁長勝利と書くんですけど、有権者はほとんど中南部に集中していますので、結果はそうですが、実際には離島部は保守支持です。ご存じのようにここで新基地の建設とか、それから自衛隊の配備という話が続きます。当然中央政府はそれを分かっていますので、そういう形で、ここに軍事化を進めようという形になるということです。

はっきり分かれているのは、これはそれぞれの得票率をまた地域別に見ると、北部、山原則と先島側に行くほど黄色い部分が増えていくという、2つの投票行動に分かれるということです。ところが、うるま市で女性が強姦殺人される事件がありました。あの直後に県会議員選挙がありました。県会議員選挙は中選挙区なので、簡単に先ほどの選挙と比較できないんですが、かなり違うパターンが出ています。どちらかといったら八重山でも革新票、革新系のというか、翁長与党側が多くて、国頭とか東村のほうでも黄緑色になっているので、北部のほうですね。さっきのパターンと違うんです。1カ月後にはこうなるんですけど、違うんです。これはうるまの事件とかがあると、ああいう形で投票行動。コザに、さっき言いましたように、利害関係が琉米間の間で一様ではないので、政治的反応も一様ではない。

でも、2つの事件、2つの住民の暴動というか蜂起というか、そういうのを通すと、全市的にコザ暴動で蜂起しなかったところも蜂起している。同じように沖縄県内においても日本政府との関係とかでいうと、関係は一様ではないんだけど、投票行動でもそういう差はあるんですが、例えばうるま市の事件とかオスプレイの事故というものが起こったときには、差異を超えたような投票行動が起こる可能性は否定できない。だから、本当にけしからんとか、ウチナーンチュをなめんなよという心情にもし至るとすれば、投票行動が大きく変わる可能性はあるということで、ちょっと指摘して。時間がだいぶ超過していますので。そういうことで、すみません、長々となりましたが、私の話はそれで終わって。時間が超過していますので、5分ぐらいだけ、もしご質問とかありましたら、この3つの発表別でお受けしたいなと思いますけれど、いかがで

しょう。どうぞ。

(質疑応答)

○フロア（参加者）から

まずお2人の先生。まず藤野先生に聞きたいんですけど、1920年代になったら、労働環境が改善してきて、かなりの人がそこそこの生活になるようになったので、暴動が減ったみたいな分析になったんですけど、結局そこに入れなかった人は、結局生きているはずですけども、どうなっていったんでしょうか。それから、こちらの先生ですけど、さっき美化された第1のコザ暴動に対して第2のコザ暴動、はっきり言うと人種差別的な面も含めたコザ暴動ということで、そのことについて、もしコザプロジェクト、このプロジェクトが、すでに沖縄でもやられていますけれども、どういう反応があったんでしょう。

○藤野裕子

1920年代以降の話で、これまでの歴史研究だと1920年代以降は労働組合のほう、労働運動のほうに、カメラの焦点を合わせていたわけですね。でも、おっしゃる通りに差が開いただけで日雇い労働者層は以前としているわけです。その人たちがいったいどうなっていくのか。もちろん日雇い労働者による労働運動もあります。そうした組織運動で解消できるものもあれば、解消できないものもある。同時期に社会政策・都市政策とかも進んでいきますし、そういう意味では米騒動が起きるようなきっかけは少なくなっていくって、表面上は社会は秩序化の方向に向かっていくわけですね。でも、それでも解消されない疎外感などの情念はある。それらはおそらくは出るに切れぬまま、大規模な暴動では発散できぬまま、鬱々と気持ちが溜まり続けていたんだと思います。もちろん、戦後になって寄せ場で暴力が噴出するのは、また違う論理で起こってくる要素は多分にあって、そこは厳密な検証が必要だろうと思います。でも日常的に暴力の種が水面下に溜まり続けている社会になるというのが、大事なところなんじゃないかなと思うんです。一触即発でなお出ないような社会になって今もなお続いているんだらうというふうに私は思っています。

○フロア（参加者）から

戦前のテロ事件とは関係ないんですか。

○藤野裕子

いや、関係あると。あの辺は知識階級の問題でもあるわけですね。その意味では、今回お話した労働者層の話とはまたちょっと違う側面も大きい。レジュメにはイデオロギーというふうに書きましたけれども、1920年代以降、マルクス主義も入ってきますし、左翼思想のほうにいったと思ったら急に国家主義のほうにいくとか、さまざまに紆余曲折する知識階級やそれに準じた人たちもいます。それで国家改造というものを模索するなかでテロに向かうこともある。だけれども、そうでない労働者層もたくさんいます。そこは知識人の動向や組合運動では解決し得ない部分もあって、それらはやはり社会のなかに溜まっていくと思うし、ある部分は総力戦期になって対外戦争のほうにも向かう形で発散されていくのだらうなと思っています。

○フロア（参加者）から

ありがとうございました。

○山崎孝史

第二コザ事件と絡めてコザ暴動の僕の考察というのは、2 年前に沖縄市で講演させていただいて、これは新聞にも大きく報道されているんですが、ちょっと報道のされ方が間違っていたんですが。反応というか、そもそも第二コザ事件がどうして語られないんだということなんです。それはコザ暴動を語るロジックは、ある意味ではすごく分かりやすい。圧政に対する蜂起だという直接的な関係で説明できるんですが、第二コザ事件の住民のああいふ投石とかという行動を説明するのは、さっき言ったように非常に複雑な米軍内の人種差別と、その人種差別のとばっちりを、それを統合する政策のとばっちりを、どうセンター通りの経営者たちが受けたかということを理解してなかったら、どうしてあの人たちは怒ったのか。単に黒人の粗暴行為に対して怒っただけということになるけど、どうして黒人がそもそもいなかったところに、白人街に入ってきているんだという説明までしないと分からないですよ。複雑化していくと語りにくいんです。構造が複雑になっていくと。でも、それは重要なんですね。そこまでして初めてとばっちりと、あの人たちは怒りだした、8 カ月後に。でも、コザ暴動のときには「いや、米軍の利害」と守っていたのに、「おまえら、こんなことをするのかよ」となってくると、変わってくると思うんですよ。今までは米軍のために利害を守っていたのに、それをまた壊しに入る、あるいは、そういう制裁を掛けるのかという。僕が言いたいのは「沖縄をなめたらいかんぜよ」ということなんです。基地を受け入れますとか、自衛隊を受け入れますとかって言っているのに、調子に乗ってどんどんやっていたら、「ええかげんにせえよ」ってなるぞというのが。分かりやすく言うと、ウチナーンチュは怒るぞと、そこで。それはあるということだと分かってもらったらいいいんですけどね。すみません。あとお 1 人ぐらい、もし何かありましたら。どうぞ。

○フロア（参加者）から

簡潔な質問でしてそれぞれの場所で起きたこと、暴動なり、それに似た形の契機を経ることで、暴動が起こる以前と、暴動があった時期と、それ以後って仮に 3 つに分けたとすると、暴動以前にあった社会の問題とかが、暴動とかの契機によって、その後、暴動とか、そういう契機によって何かが変わったのかとか、暴動以前にあった社会の問題が解決する方向に向かったのか、それとも向かわなかったのかという部分で、変化があったとすれば、構造的な変化とかが、それぞれの地域であれば、1 点でも 2 点でも挙げていただいて、その契機が何を変えたのかという部分を説明いただけたら。

○山崎孝史

山田さんからいったほうが一番いいと思います。

○山田 實

暴動前はさっきも言ったように警察はなめ腐って、「おまえらは虫けらや」というので、殴る・蹴るは当たり前という状況だったんですけれども、この 90 年の暴動をきっかけに西成署もかなり変わってきた私は思っております。内部にちらっと聞いてみますと、解放運動なんかと関わってきたような人権派の幹部連中がどーんと入れ替えで送り込まれてきて、ちゃんと人権を軸にした警察の展開が始まるということが起こりました。ですから、92 年の暴動のときには、ただ単に暴動を鎮圧する、虫けらどもを蹴散らすんだというような形ではなくて、当時の幹部連中が、これは社会問題だと、治安問題じゃないということで、かなり抑制して対応してくれた経緯があります。私なんかには「運動のスタイルだけは壊さんといてくれ」と、「火をつけようが石を投げようが、山田、運動のスタイルではなくさんといてくれ」みたいなことを、だいぶちらちらと言うてましたから、かなり冷静にというか、事の本質を見極めて判断するように、だいぶ変

わってきていました

ですから、それ以後の西成署は、突発的な 2008 年のへんてこな暴動はあったんですけども、これはちょっと別問題として置いときますが、今この 3 年間ほどを見ても、そういう暴動を昔に経験したようなのが幹部になって帰ってきて、やっぱり地域に愛される警察を目指そうというので積極的に住民に入っていく。どうしたらよいかという相談を私も受けましたけれども、愛される警察や親身になってやるのはいいんだけど、「あんまり警察は出しゃばらず、黒子に徹した方がいい」と言いました。今警察はちゃんと地域に見える形で展開し始めているのではないのでしょうか。

社会的に見たら不況なので、ヤクザも収益がどんと落ちてきます。従来の肉体的な暴力団というのは全部つぶれていきます。経済ヤクザだけが生き残ってきます。だから、福祉を逆に言うたら食べ物にするという言い方はおかしいかもしれないけど、そういったところだけが生き残ってくるとか、何らかの経済活動をするところしか生き残れないようになっていますから、非常に縮こまっております。そうした中で、歴史的に路上博打というのが当たり前だった釜ヶ崎で、それまであり得なかったんですが、つい 1 年前にその路上賭博がなくなりました。「そんなのは無理だろう」と言われていたのですが、警察が思い切って、普通の市民社会と同じようにしていくんだという路線を取って、博打場をなくしていったという経緯があります。博打場が何で継続してきたかという、ヤクザが密集する地域の地域ボスみたいなのが、いつも警察に「博打を取り締まるな。取り締まったら、わしらは商売にならへん」と言って、嘆願しに行っているのが実情だったんです、事あるたびに。ですから、そういったものを受け付けないという形で、この 2 年ぐらいは集中してやっております。ですがそれも、警察署長がどういったタイプの人間かによって変わるかなと思っています。今の警察署長はちょっとそこら辺がどうなのかなという気がしますが、前の 2 人目の署長は一生懸命そうやって頑張っておりました。社会情勢によってだいぶ変わっていくんですけど、大幅に警察のスタンスも変わってきているのが実情です。

と同時に地域全体も、ただ単に騒いで終わりじゃなくて、逆にそれを糧にしてというか、最大限それを政治的に利用しながら運動を前進させるとか、いろんな形でやってきた経緯がありますので、だんだんと変わってきているんです。ただ、もう一方では暴動が起きなくなって、いろんな行政関係者がまたふんぞり返っています。暴動の直後はみんな、ピリピリしていて、「はい、言うことを聞きます」ということだったんですけども、今は「暴動は起こらんやろう」みたいなことでふんぞり返って、手前みそ的な施策を押しつけている感じがあります。だから、ある意味では定期的に起こる方がよいのかなと思うときがあります。

○藤野裕子

暴動前と暴動の中と暴動後ですね。暴動前の状態というのは、私の場合は東京ですし、もっとローカルな変化ではなくて国レベルの変化になりますけれども、選挙権が極めて制限されていた時期がこの時期なんですね。そういう意味では参政権が財産によって決められているので、本当にごく一部の人たち、5%とかです。そういうレベルで、5%・10%というレベルで参政権を持ってなかった。だからこそ政治集会を開くわけです。「国民が怒っている。おまえは何をやっているんだ」という形で屋外でのデモンストレーションがものすごくたくさんある。民は怒っている、選挙権がない。

でも、民が今度は普通選挙になるのが 1925 年です。暴動後の時代。自分たちで政治参

加して政治表明ができるようになったら、そういう怒り方というのが、それほど正当性を持たなくなってくる。秩序立った選挙行動をするというのが、社会全体の流れになっていきます。ですので、それをデモクラシーの画策といって、暴動から普通選挙の時代へつなぐことも可能なんですけど、でも本来的に言うと暴力の時代で起きたことは、同じような政治集会の在り方とか、暴動を使って政治的要求をかなえていくということが、なかなかできなくなっていくのが暴動後の時代ということで、その前後、権利を与えることにより、社会を秩序化していくというか、よりいやらしい統治になっていくというのが近代の国家の歩みだろうというふうに思います。

○山田 實

今、釜ヶ崎はそういう状況に置かれています。まさにその通りです。90年の暴動以前は府・市による官制型の特定の団体以外、一切話を聞かず、抗議をするとすぐ様機動隊で蹴散らすという政策をとっておったんです。それが暴動の後、1、2回を経ますと、やっぱり排除しただけじゃだめだと、彼らもやっぱりそれを教訓としていったんですよね。コストが高く付くと。むしろ話を聞いて上手に利用しながらやっていこうと転換しました。いいか悪いかは別にしろ、今の一般的な近代的な統治形態へと釜ヶ崎も移行したということでもあります。

○藤野 裕子

付け加えると、権利を与えて統治するというそのやり方で、人びとのエネルギーがうまく発散されて完結されるかという、そうでもないわけです。それ以前の暴動の根源となっていたような社会の序列やそれが生み出す疎外感や依然として残っています。今回みたあの疎外感や残っているわけです。それらが政治的な選挙でもって解消されるわけではない。だから、噴出する機会を失いながら水面下に溜まっていくというのは、そういうことを言いたかったわけです。

○山崎 孝史

お時間がないので簡潔に答えるんですが、コザの場合は暴動があったわけです。反米暴動といわれるんですが、結局復帰というプロセスの中にすり替えられていったと総括できると思うんです。あそこで反米だったのが本当は統治者に対する抵抗だという形で再構築されないといけないんだと思うんですけど、これは2部の皆さんのご意見もお聞きになったらいいと思うんですが、それを復帰というところで、統治者の交代という形で、残念な形ですり替えられたというところはあると思います。ただ、それをいけないという思想の流れは残るわけですけど、ただ反米暴動がなぜ今、語られないといけないかというのは、反米の「米」が「日」に変わっているというところが若干あったりするわけなので、統治者に対する抵抗という形の再評価ということが必要になってきているというようなことだと思うんです。そこがコザ暴動の場合は曖昧な形で復帰に流れ込んでいったということがあるんじゃないかと私は思います。

長くなりましたので、ここで10分ほど休憩を入れさせていただいて、レイアウトをちょっと変えますので。多少ちょっと延長するかなと思うんですが、ギャラリートークのほうに移りたいと思います。なお、向こうの市史からお借りしている市役所の提供の展示物に関しては、伊敷さんが詳しく説明していただきます。休憩時間の間に、もし関心のある方は伊敷さんの説明を聞いてください。それでは、また10分後に再開いたします。だいたい4時半に再開しますので、よろしくお願ひします。

2) 第2部「コザ暴動」ギャラリートーク

○山崎孝史

それでは第2部のほうを始めさせていただきます。第2部のほうは、今、ちょっと並んでいただいているメンバーをお願いして、進行役は今郁義さんをお願いします。それでは、まずは、はい。

○今 郁義

2部のパネリストの皆さんを紹介する前に、70年の12月20日のコザ暴動の音と映像が残っていきまして、コザ暴動が語られるときに、よく使われています。7分から8分ぐらいですので見てください。その後からスタートしたいと思います。

(音と映像)

○今 郁義

これは現場の取材音です。この後は音のない映像がしばらく続きますけれども、特に音と映像は、今と違って映像と同時録音される時代じゃないので、映像と音が一致してはいません。後に放送局が編集したものです。ただ、音声は1970年の12月20日のあの現場にいた人たちの発言です。冒頭の現場の音を聞いていると、実は組織的にコザ暴動は計画されただろうと、今の人だったら思うかもしれませんが、決してそうではありませんの。その話をこれから進めたいと思います。

それでは1部のシンポジウムを受ける形でギャラリートークというか、1970年12月20日の模様をトークしたいと思います。それぞれがどのように暴動の現場で体が動いていったかということをし少し時系列的に初めに話させていただきたいと思います。

それでは、まず比較的、コザ暴動の現場に早めにいた古堅さんから話してもらいますけれども、もし話の都合上、写真展の現場に行ったほうがいいというならば、移動して説明されてもいいです。それでは、まず古堅さんのほうから。

○古堅宗光

こんにちは。今さんのほうから時系列的に話してくれということですが、実は暴動が起きたのが1970年の12月20日の深夜零時過ぎてからです。その前の晩、いざ暴動が起きる3時間ぐらい前まで、その現場のすぐ近くで友達4名と飲んでいまして。ところがそのとき、原因は何か分からなくて、議論になって言い合いになって4名ともばらばらに帰って、僕も先に帰ってしまったんです。残った2人が第1現場に、すぐ現場の近くで飲んでいたのでから遭遇し



て、そのうち1人は当時検察庁にいた検察事務官の職業だったんです。彼は立場上は参加できなかったんですが、あと1人、名前は伏せますが、同じ高校の同級生で、彼は第1現場からすぐ嘉手納基地の第2ゲート、基地に突入しまして、たぶん50〜60名ぐらいのメンバーだったと思うんですけど、第1陣の突入部隊は。ゲートのボックス、守衛のボックスを焼いて、アメリカ人小学校に放火して、USO(United Service Organizationsの略称:編者注)って在郷軍人会のレク施設があるんですが、そこにも放火して、基地の中は当然消防が来たので、彼はそのまま逃走して、また別の現場に行きます。

僕はというと、そのまま帰って、当時は野菜と果物の卸販売の会社をしていた、在学中から起業してやっていたんですが、当時は年中無休だったんですね。当日の夜は日曜日ですので、普通だとみんな休んでいるんですが、こっちは夜中の2時半か3時ごろから仕事が始まっています、当時は。2時過ぎぐらいに起きて玄関を開けたら空が、ちょうど今、暴動の現場の道路より高低差で50メートルぐらい低いものですから、空を見たら左から右にばーっと全部真っ赤なんですね。真っ赤というか、あの色はちょっと言葉で説明できないんですが、火事の現場に遭遇されている方も何名かいらっしゃると思うんですが、火事の現場というのは一部分しか空は赤くないと思うんですが、これだけの車が、八十何台かの車が燃えていますので、そのときには、まだ完全には80台ってなかったかも分からない。それでも空がずっと左から右、見渡す限り茜色というか朱色というか何かそんな感じです。直感したんですね、何か起きていているというのは。土曜日の夜から日曜日の朝にかけてですから。

程なくして向かいの雑貨店の夫婦のおじさん・おばさんが来て第一声が、上のほうで米軍が事故を起こして沖縄人を轢き殺してMPが発砲して2人死んだと。後で聞いたら、これは単なるデマだったんですが、そのときは本当に信じていました。殺されたと。さっきの音声にもあったと思うんですが、暴動のときの情報というのは非常にある意味、確認もできないんですが、実際確実に殺されているというのを、ずっと翌日の号外の新聞を見るまで、てっきりそう思い込んでいました。たぶん暴動に参加した人間もほとんどそういう思いを共有していたんじゃないかなと思います。

早速、車で現場に僕は向かったんですが、道に車が燃えている場所があるんですが、あんな感じで。でも、あれはだいたい夜が明けてからのバスとかを通すために片付けていると思うんですが、僕のうちからちょうど職場まで燃えている車の間を、当時、日産のスタディだったかな。本当にジグザグ運転で火の中をぐぐっていったというのが第1現場でのあれですね。僕が通っているときは、当時、北と南も交通遮断されて、車は僕の車1台しか走ってないです。燃えている真っ最中の大通りを、当時は分離帯がなかったので、ジグザグで移動して。道路で最初に燃えている、ちょうどあの場所のあたりだったんですが、最初に燃えている車を見て、火を見て、道に落ちているブロックの欠片とかガラスで、ゴムの燃える臭い。第一印象というか自分の中で発した言葉が、革命が起こったんだなと思いました。そのときに沖縄の言葉で「きーぶるだっちゃー」と言うんですが、毛が立つ、何ていうんですかね、身の毛がよだつではないな。本当にハンドルを持つ手が、震えが止まらなくて自分で止め切れなかったです。ずっと全身寒気、悪寒で、毛が逆立つというんですか、そんな感じで、震えがずっと止まらなくて、職場まで行って、いったん車を置いて、また第2ゲートのところに駆けつけました。

そのときはゲートの入口は完全武装のMPが後ろにいて、その前に機動隊がいて。やっぱり投石している人もたくさんいました。そのときに、これはまた後で話に出ると思うんですが、さ

っきの山崎先生のまとめの中でも、アメリカ人を傷つけなかったと言うんですが、実際は僕が今のちょうど十字路の付近で燃えている車の横で、アメリカ人の夫婦が通っていました。もちろん悲しそうな顔をして。周りで見ている沖縄の人間も明らかに哀れみの目なんですね。この2人に手を掛けようとする人は1人もいませんでした。当時、現場にいた僕らからすると、山崎先生からさっき説明があったように、実際にはけが人も何名か出ているんですが、あのときの雰囲気を知っている人間からすると、けが人が出ているとは、そのとき本当に思いませんでした。運転手だけを引きずり出して車だけ燃やすというのが、その当時の暗黙の総意というんですかね。

これが非常に不思議で、それから40年たった39年目の年に、「翌年40年だから何とかできんか」ということで恩河さんとかと相談して、約1年近くかけて二十何名からの証言を集めました。そのときに分かったのは、当時現場にいた5,000名とも6,000名とも、外務省の公式記録では2,900名となっているんですが、あれは絶対に嘘です。当時現場にいた人間の実感からして5,000名どころか1万人ぐらいいたんじゃないうぐらいの人の多さでした。二十何名かの証言を聞いたとき、ふと思いました。戦争体験もそうだと思うんですが、証言というのは一人一人、5,000名参加者がいたら5,000通りの証言があるだろうなということで、実は僕も当時現場にいた人間ですが、僕にとってのコザ暴動は僕にとっての体験が全てだと思ったんですが、実はさっき話に出ていました第二コザ暴動事件とか、そういう方と実際にお話しました。

これに写真は載ってないですか。そり返っている人の写真が。事故現場で道路にそり返っている人が1人いたんですね。たぶんこの暴動の中で唯一重傷者じゃないかなと思うんですが。この人の証言を聞いたとき、非常に面白かったのは、この人は米軍相手の商売をやっていたんですね。ところが、車をどんどん燃やされているのを見て、最初は冷静に見ていたんです。というのは自分の商売に差し支えと。どこかで写真が撮られて、それが証拠になって、米軍相手の商売ができなくなったらまずいというので、最初は冷静に遠巻きに見ていたらしいんです。

ところが、だんだんだんだん、さっきの藤野先生の話にもあった、火を見てだんだん興奮してしまって、走ってくるアメリカ兵の車の前に立ちふさがって止めようとしたんです。ところが当時、車はどんどん燃えていてアメリカ人もばかじゃない。止めたらやられるんじゃないかということで、その人を轢いてそのまま逃げたんです。それで、あの人はそり返っているんです。当時、救急車は消防がやっていませんでした、沖縄は。警察が消防をやっていました。今の119番ですね。当然警察の救急車というのは分かるので、現場に入れないわけです。この人はどういうふうに病院に行ったか全然覚えてない。1週間後に、2〜3日後に意識を取り戻して病院から請求書を出されるんですね。「あほか、何で俺が払うか」という感じで強制的に自主退院して、「40年たった今でも払ってないよ」と言っていました。その人が唯一の重傷者じゃないかと思うぐらいですね。

○今 郁義

1部で山崎先生がコザ暴動の経過を比較的に丹念に説明されましたので、その辺は端折りながら2部は進めたいと思います。今の古堅さんの話があったように、「轢いた、逃げた、撃った」ということですね。それが意味でコザ暴動が進んでいく展開になるんですけれども、那覇でラジオを聞いて、コザが燃えているというような話があったりするんですが、那覇か

ら駆けつけた、当時、写真学生だった比嘉豊光さんにお話を伺いたと思います。

○比嘉豊光

(以下、沖縄口＝沖縄言葉は日本語に翻訳:編者注)ハイサイ(こんにちは)、チューヤウチナーグチシ(今日は沖縄口で)、セーヤーンディウムイビーシガ(やろうと思っていますが)、ワカイシェーウイビーガヤー(分かる方はいらっしゃいますか?)、イクタイグレーウイビーガヤー(何名ぐらいいらっしゃいますか?)、ウチナーンチュ(沖縄人)、ティーアギティキミンソーランガヤー(手を上げていただけませんか?)、ウッサルウイビーンナー(こんだけしかいらっしゃらないんですか?)、フントーヤウチナーグチシーネー(本当は沖縄口でやると)、ヌーガンディイーネー(何故かと言えば)、キッサヌビデオヌナーカンカイン(さっきのビデオの中にも)、テーゲーヤマンドービーテクトゥ(大概、たくさんあったから)、リンチョーカンンディイシガ(臨場感というか)、ウリガフントーヤ(それが本当は)、ゲンバンディイーネー(現場という)、まあ日本語も結構ありましたけど、アンシガフントーヤ(けれども本当は)、カンジョークミティハナシースセー(感情を込めて話すには)、テーゲーウチナーヤウチナーグチヤイビークトゥ(だいたい沖縄は沖縄口ですから)、アンスクトゥチャーヤイビーガ(それでいかがですか?)、いいですかね、アンシ(それで)日本語しかワカランチュンマンドーイビーシガ(分からない人もたくさんいらっしゃいます)、ワンガウチナーグチシーネー(私が沖縄口すると)、ウンジュナーターワカイビーガヤーンディイーセー(皆さんはお分かりですか?というのは)、チャーヤイビーガ(いかがですか?)。

○フロア(参加者)から

大阪弁しかわからない。

○比嘉豊光

アイエナー(困ったな)、アンシェーワンネー(それでは私は)大阪弁ノーワカイビランクトゥ(大阪弁は分かりませんので)日本語マンチャーシ、シマビーガヤーサイ(日本語混ぜてよろしいですか?)。えーとですね、ナマ(今)、実は東京ではですね、ワッターテーゲー シマクトゥバシサビタンドー(我々はだいたい島言葉でやりましたよ)、ヌーガンディイーネー(何故かという)、アマーウチナーンチュマンドービータン(あそこは沖縄人たくさんいましたよ)、東京ヌ(の)明治大学ウティ(で)、アンスクトゥ(それで)ワッター(我々は)國吉和夫さんトゥ(と)タイグーナシ(一緒になって)、ウヌビデオンジガナーチン(そのビデオを見ながら)、シマグチシ(島口で)セツメイシーガナチー(説明しながら)、またシャシンヌセツメイン(写真の説明も)シマグチシサビタクトゥヨー(島口でやらせていただいたのですが)、テイゲーウムツサイビータンドー(大変面白かったですよ)

それと、じゃ日本語に変えますけど、この写真展はですね、実を言うと去年、戦後 70 年、僕らのまぶいぐみ、ウチナージールマブイグミ(沖縄で言うマブイグミ)、ワカイビーンドーヤーサイ(お分かりですよね)。まぶいぐみを、要するに



写真にまぶいを含めましょう。まぶいって魂ですね。要するにワッターウチナーヤ(我々の沖縄では)、写真ヌガリーネー(写真取られたら)、魂、マブイヌガットーンンディールハナシーンアイビークトゥ(マブイを取られたという話もありますので)、こういう感じで撮られた写真にまぶいを含める写真展をしよう。

それが戦後70年、6月に那覇市民ギャラリーで15〜6名が集まって展示会をしたんですよ。その展示会はやっぱりわった一沖縄の、ある意味ではいくさゆ(戦世:編者注)からもちろん復帰のコザ暴動も含めて、いろんな写真を集めて展示会をしたんですね。その展示会の流れで、まぶいぐみの会長という國吉和夫さんはコザ暴動(の写真:編者注)を出してあったんですよ。その流れでトーアンシェー(それでは)、12月にコザ暴動展、45周年ヤクトゥリッカーマジュンサヤー(45周年だから、それでは一緒にやろう)って、一緒にやりましょうという形で、実を言うと、まぶいぐみで展示会したのは國吉和夫さんだけが出したんですけど、僕もそのとき1970年、コザ暴動を撮っているから一緒にやろうやと。僕らだけじゃなくて、いろんな僕らの周囲の、僕らの友達なんかにも呼び掛けて、撮っている人、その現場の写真を撮った人を集めようやということで、何名か集めて。その中で実を言うとヤマトンチュが2人、吉岡さんと松村さんが当時60年代から一応沖縄に入っていて、復帰前後の沖縄の状況を撮っていて、その中で彼らも撮っているので、一緒にやりましょうということでの展示会です。

それはやっぱり写真の力というのは、40年たっても写真はその現場なんですよ。だから、撮られた写真の中で、現場にいた人たちが、ある意味では45年たっても、自分の写真があるよねと必ず見に来るわけですよ。そして、見に来たら必ず語るわけですよ。だから、そういうのが写真の力だよ。だから、45年前の写真だけど、去年、戦後70年というその70年、写真は45年だけど、戦争とか、そういうことも含めて、この写真が語らすという作業、その意味で去年この展示会を企画したんです。

それで、そのときにどういうことが起こったと。やっぱり新聞・ラジオ、いろんなところで宣伝してもらったら、現場にいた人たちがたくさん来ました。あの当時、自分はこうだったと。そして、今の沖縄もこうだ。そういう形で、それぞれが当時の現場の話をいろんな人たちも含めて。もちろん写っていないけど、自分も本当は参加したかったんだよという人たちがたくさん来ました。それはある意味では、古堅さんが言ったように結局、場所にはいたけど、帰った後で起こった。だけど、みんな駆けつけたんですよ。

そういう意味で駆けつけたのが、僕らも先ほど、前日美里で毒ガス移送・撤去の集会があって、僕らもちょうど大学生だったので、その当時、写真クラブで撮影して、僕らは那覇に帰ったんですけどね。那覇に帰っていて酒を飲んで、朝まで飲んでいたら、ラジオから暴動が起こったと、そういうことで、すぐ朝に駆けつけて僕らが撮ったのは、ちょうど火は消えて、あとは車を片付けるとか、ある意味で、群集とか、そういうのはまだたくさんいましたけど、そういう流れで撮ったのが、その車がいっぱい並んでいて片付けるシーンとか、そういうところでした。

そういう意味で、これは1日の記録です。1日の記録がそれぞれ今回8名の写真家が撮影して展示会をしているんですけど、8名の写真家が撮った写真の中に現場写真と、ある意味では、それに関わった人は当然だけど、関わらなかった人たちも含めて、コザ暴動、ある意味では45年とか44年ですか、関わった写真の中に、いろんな話というか、要するに思い出とか。そして、今の沖縄の状況が全部一緒になるわけですよ。だから、いろんな人たちが話をす

ればするほど、今こそコザ暴動を起こすべきだという人がたくさん出たんです。というのは辺野古の問題とか、ここ2〜3日、オスプレイなんか落ちて、みんな次の暴動はたぶん必ず起こるだろうと。そういう意味でのこの写真展という。僕は最初からそういう企画はしてないんですけど、関わった人たちとか、参加はしないけど賛同している人たちというのは、たくさんいるんですよということも含めてね。

だから、先ほど都市暴動といって釜ヶ崎と日比谷の暴動とかがあったんですけど、僕らから見れば、それとんでもなく違うなと、あり得ないなと、そういうことも聞きながら、日本では沖縄のコザ暴動が、今までたぶんそういう写真展も見たことなかっただろうし、報道というのはされたかもしれないけど、状況が、こういう写真の前に立たないと、言葉で言っても分からない点も含めてね。僕ら自身もそうだったんです。だからこそ去年、沖縄市のコザ暴動プロジェクトということを計画して、その中で参加、要するに車をひっくり返した人たちとか火をつけた人たちがたくさん出てきて、あらためて写真の力はとんでもないなと。

その動きの中で東京、今回は大阪があるということですので、そういうことも含めて、もう一度見てほしいなというのと、あと1つ、これは『N27』という雑誌、あそこに置いていますが、これにも一応3名・4名の写真を収録してありますので。その次の号には東京の展示したところのレポートもありますので、そういうことも含めて見れば、大阪でのコザ暴動を、今日、今からいろいろ会話しながら、議論していきたいなと思っています。よろしくお願いします。

○今 郁義

豊光さんにはコザ暴動の現場において、どうやって体が動いていったかを本当はしゃべってもらおうと思ったんですけど、今、雑誌の編集とか、いろいろやっていて、想いが非常に強い人です。実は今日、今回8名の写真でやっていますが、冒頭にある吉岡攻さんの写真が比較的早い時間からの写真です。あそこに吉岡さんの写真のベタが全部で56カット。その次に、後に久高島のイザイホー（女性神職者の就任儀礼：編者注）とかを撮影していた、もう亡くなられた比嘉康雄さん。彼も当時、写真学生で12月の帰省中で友達と飲んでいて、そのまま駆けつけて撮った写真です。続いて國吉和夫さんの写真があって、その次に松村久美さんの写真。あと後ろのほうに当時学生で、後に沖縄タイムスの写真部員になる大城弘明さんと琉球新報部員の写真になる山城博明さんの写真が展示されています。それぞれ写真を生業として生きてきた人たちの写真であるという意味では、極めて特徴的な写真の構成をしています。当時、かなり早い時期にコザ暴動の現場に来た松村久美さんが撮った写真は、実は明け方の写真です。参加した群衆は大方散っていなくなっていく時間です。ただ、彼女の記憶の中には火が燃えている現場の記憶があるんですけども、シャッターは押していない。そういう経過も含めて46年前の松村さんの体験をちょっとお話いただければと思います。

○松村久美

松村です。私は写真大学を出まして2年目に、1969年の6月から沖縄で住み始めました。それで、そのときには、今はもうないんですけど、『毎日グラフ』というグラフ誌があったんですけども、そこから身分証明書を発行してもらって、契約カメラマンではないんですけども、一応写真ができれば送りますということで、身分証明書を発行してもらいました。それで、69年の6月に住み始めましてから、いろんな社会問題、復帰に向けての全軍労ストであったり、あとは復帰協のデモであったり、あとは米軍基地、それと米軍演習などを撮って写真を送

っておりまして。

12月19日の美里の毒ガス撤去の県民大会には参加しておりまして、それで帰って那覇で友達たちと飲んで、12時ごろに寝付いたときの直後に、ここにいらっしゃる今さんから電話がありました。そのときの同居人と今さんが友達だったものですから。今さんが「コザが燃えている」という電話で、それで飛び起きまして酩酊状態の中、車、相当のスピードでコザに向かいました。コザの入口に、島袋というところからは火柱が何本も立っておりまして。それで、事の大きさにともかくびっくりしまして、初めての体験です。車をずいぶん手前のほうに止めて、火の海の中に入りました。それで、そのときには何台かは燃やしていたんですけども、1つの固まりというか、黄色ナンバーに10人ぐらいの男の人が格闘して横倒しにして、それで仰向けに転がして。そうすると、みんな大拍手で。それで、口笛なんかも吹いていまして、それでその周りでカチャーシーを踊っていました。それで、みんな「そーれ、そーれ」ということで、大興奮の渦の中に私も、しばらくそこで、要するに興奮状態を私も体感しながら過ごしておりまして。民謡酒場から出てきたような金ぴかな衣装で踊っている歌手もおりまして、ともかくすごい興奮状態でした。

それで、近くでストロボがぴかっと光ったときに、やっと我に返ってカメラバッグからカメラを出そうとして、そうしたらストロボが入ってないんです。昼間の取材だったものですから、ストロボはそのときはいらなかったんですけども、カメラバッグをそのまま持ってきたものですから、ストロボが入っているかどうかを確認しないで慌てて来たんですね。それで、あーっと思って、うーんと考えながらあれしていましたら、赤鉢巻の青年が(男と間違え:編者注)「兄さん、証拠写真を撮るな」と言われたんですね。労組員で集会帰りの人だったと思います。それで、その気迫に私は負けまして、ああ、撮っちゃいけないんだと思って、それで撮らなかったんですね。だから、今から思えばプロ意識に欠けていたんじゃないかなというあれはあります。

それで、ともかく何時間か分からないんですけども、火の海の中におりました。こういう言い方は適切じゃないかもしれないんですけども、本当に火の海の解放区、美しい火祭りのような感じでした。

それで、口々にいろんな言葉が聞こえてくるんですけども、「たつくるせー」とか聞こえてきて、それでよく聞こえたのが「糸満事件の二の舞を踏むな」という、そういう合言葉のような言葉がよく聞こえました。

それで、しばらくずっと見ていたんですけども、リーダーがいるわけじゃないのに、実に統制の取れた行動をしておりまして、一切の略奪はない。それで、放火も、放火というか、燃やすのは黄色ナンバーだけ。無秩序な放火というのは一切ありませんでした。だから、私は自分で思っていた暴動というイメージでは全然なかったんですね。私のだからフィルムケースにはコザ暴動じゃなくて、コザ反米焼打にタイトルがなっています。

それで、明け方の5時過ぎに米軍のヘリが何機も空を舞いまして、サーチライトが飛び交



っていました。それで、バーンバーンという音とともに催涙弾が発射されて、向こうからガスマスクをした米軍の集団がわーっと押し寄せてきて、そこでアリの子を散らすように散ったんですね。目はちかちかするし。私も危ないと思って、それでその当時のコザにありました沖縄タイムスのコザ支局に飛び込みました。それで、そこでしばらくおまして、それでちょっと落ち着いたところに外に出まして、やっぱり撮らなきゃいけないといって撮った写真が明け方の写真です。

そのときには近所のお年寄りから子供から、ものすごい人を見物が道の両側におりました。米兵たちがトレーラーで焼け焦げた米軍車を運んでいたり、クレーンで押し上げたりという作業をしておりまして、私がだから撮れた写真というのは翌朝の写真です。それで、不思議なことに私がシャッターを押してない時間帯というのは鮮明に覚えているんですけども、シャッターを押し始めてからの記憶は、どこで撮ったのか、後の写真を見ても、どこだろうねというような感じで、あんまり記憶がないんですね。だから、それは不思議な感じなんですけれども。コザ騒動、コザ暴動、それをいまだに、いろんな本とか、まとめたものとかを見て、自分なりに何だったんだろうなという位置付けが、まだいまだにできておりません。そんな感じです。

○今 郁義

今、古堅さんと比嘉さんと松村さんに、1970年12月20日の記憶を中心になぞってもらいました。次に現在も写真家として活躍されている小橋川共男さんは当時東京です。コザ暴動を東京でどういうふうに受け取ったか、あるいは受け取らなかったか。小橋川さんは当時、写真を撮りながら沖縄の返還運動などの社会運動なんかもやっていた方ですので、その辺の思いを含めて語っていただければと思います。

○小橋川共男

小橋川共男といいます。私は、両親はウチナーなんです。おやじは明治の生まれ、おふくろもだいたいそのぐらいのときの生まれですので、おやじたちが大阪から川崎のほうに移って、川崎の紡績工場でおふくろと出会って私たちが生まれたという、そんな関係で、沖縄2世なんですけど。1965年ぐらいから復帰運動とか、それがずっと出てきて、時々私も集会というよりも、そういうニュースを聞いて、私もそのころになってというか、何でウチナーを意識したかという、1つにはうちのおやじが手作りの三線を弾いて、安い焼酎を食らったときに民族の祭典ということで、いわゆるウチナーの民謡を弾いているんですね。やはりそれをずっと小さいときから聞いているうちに自分の中に音が鳴り出すと血が駆けめぐるといって、そういう感情が非常にだんだん強くなってきて、ウチナーというのはどういうところなのかなということを意識して、ウチナーンチュということも少しずつそういう面では意識したところだったんですね。

そして、ちょうど復帰運動のときに、なかなか東京では新聞の記事に載ることはなかったですけども、たまたま確か全軍労の人たちでしょうかね、銃剣を米軍がこうして突き上げているのが夕刊の一面に確か載ったときがあったわけですね。



僕はそれを見たときに本当にぞくぞくというか、いらだちを覚えて、そしてその新聞を電車の中で自分が見るだけじゃなくて、周りの人たちに見せようとして、こういうふうにしたんですけども、ほとんど何も、無視というか、みんなプロレスとかスポーツ記事の、そういうものしか見てないという、そういうことに対する非常に怒りというのか何か覚えました。

ですから、そういう意識はあったんですが、私は 70 年のコザ暴動のときには、全くそれがどういうことで起こったかとかいうのも全く分からないままに過ごしてきたわけです。実質的には、私は 1972 年の復帰の直後に初めて両親の古里に足を踏み入れてから、俺が写真を撮るのはここだなというふうなことを思って、復帰直後から最初のころは年に 1 回とか 2 回とか、そういう形で沖縄を撮り始めた。そこから、言ってみれば私の沖縄との非常に強い思いも、いろんなものも関わり合いが深くなったなというふうな状況で過ごしているんですが、実質的に 70 年のコザ暴動の時のことというのは、本当にコザ暴動の写真はちらちら見ていたと思うんですけども、実質的には去年のまぶいぐみのプロジェクトに私も参加するようになってから、和夫さんや豊光さんの、それからまた松村さんや皆さんの写真を見て、すごいことがやはり起こっていたんだなということを本当に感じました。

やはりウチナーンチュの魂の中にあるものというのが、この写真の中には本当に出ていて、先ほどのいろんな皆さんの話の中でも、やはり人を傷つけないで、それも米軍の車だけ引っ張り出して真ん中で燃やした、それは誰が統制したわけでもないけれども、そういう形で行われた 1 つの暴動というか、それだけすごいな。何かウチナーンのエネルギーというのは、そういうものとして今日まで続いているものがあるなということを感じています。その後はまた後で話したいと思います。

○今 郁義

ありがとうございました。1969 年とか 70 年というのは、沖縄の「復帰運動」が沖縄を中心に本土でも盛り上がっていた時期なんですけれども、それでも、日本の社会の中で沖縄は遠かったんだと思います。

当時、沖縄を支配していた米軍、アメリカはコザ暴動を当時どのように捉えていたのかということ、1997 年に沖縄市はアメリカの公文書館に公文書の収集に恩河尚さんが行っています。アメリカはコザ暴動をどう捉えていたのかということ、それともう 1 つ恩河さんに聞きたいのは、今日の冒頭で取材の音を流しましたけれども、この音声は翌日の 21 日にラジオ沖縄で放送されている音です。騒乱罪適用に当時の琉球警察なり司法当局は動くんですけども、結局、騒乱罪の適用はできなかったんですけれども、アメリカの公文書館というのは音なんかも収集しているのかどうかも含めて、その辺も含めて、ちょっとお話を伺いたいと思います。

○恩河 尚

恩河です。皆さんの前で格好良くアメリカまで、メリーランドまで行って、アメリカ資料を取ってきたのは俺ですよ、格好良くお話を始めようと思ったんですけど、山崎さんに先を越されて、それから今さんがとどめを刺して、何をしゃべるのかな、ちょっと拍子抜けしているんですけど。1 点目、ちょっと補足しますと、我々は 97 年・98 年、2 回、アメリカのメリーランドに行かせていただきました。それで、収集した資料の中の 1 つにコザ暴動のやつがあったんです。その翌年、99 年に翻訳というか、『米国が見たコザ暴動』という本を作らせていただいたということです。報告書、まず一番びっくりしたのは、印象的だったのは、やっと見つけたという。結

局、日本側というか、当時、沖縄史関係をいろいろ探して歩いていたんです。絶対に残っているだろう。警察庁なんかにはコザ暴動の記録が残っているんじゃないかと、いろいろ頑張ったんですが結局だめで、最終的にアメリカしかないなということで、ずっと狙っていきまして、これが出てきたときの感動というのは非常に印象に残っています。

報告書を見て印象的だったのは、ランパート高等弁務官、高等弁務官というのは当時の琉球政府の上に君臨していて絶対権力者だったんですけども、ランパートさんはわりと穏健派といいますか、そういう方だったんですけど、コザ暴動、あえて大会の趣旨にのっとなってコザ暴動と発言していますけれども、コザ暴動に対して怒りまくったんです。怒りまくって先ほど来出ていますけれども、実は当時沖縄で致死性のある毒ガスが見つかったということで、その移送とか撤去でわーわー揉めているときに、ランパートさんが「毒ガス移送を延期するよ」と言ったものですから、相当沖縄から反発を買ったんですけども、このときにびっくりしたのはアメリカの報告書を見て、アメリカ本国はランパートさんをいさめているんですね。「こんなばかな判断をするな」と。本国を治めていて、やっぱりアメリカというのはすごい国だなというふうなのを、報告書を読んで思いました。



それから、もう 1 つは出ていますけど、一番向こうの三叉路というところがあって、そこに武装した米兵がコザ暴動のときに並んでいて沖縄住民と対峙するんですけど、そのラインの南側にはライカムという外人住宅、外人さんが住んでいる住宅エリアがあるんです。そこを突破されたら大変だろうと思って武装兵が隊列を組んで沖縄住民と対峙していたと思うんですけど、このとき彼らは武装しているんです。武装しているんですけども、報告書を読んだら、初めて知ったんですけど、そのリーダーが銃器をやめさせて棍棒に変えさせているんです。たぶんこのまま武装した兵隊たちに銃器を持たせていたら、死人が出ただろうというふうに非常にびっくりして。びっくりすると同時に、あらためてあのリーダーは偉かったんだなというふうな、この 2 点が非常に印象的でした。

始まる前に「1 回目はあまりしゃべるな」と今さんから言われていますので、この辺でやめませんが、1 点だけ、当時の我々沖縄市役所の地方自治体としての予算は乏しいものがありまして、その中で国外の旅費を獲得するというのは至難の業でしたけど、それを頑張ったのが当時の僕の上司、課長でした。これが今さんでした。以上です。

○今 郁義

今の恩河さんの話にあった島袋三叉路では、コザ暴動の数日後に高校の先生 1 人が逮捕されるんです。これは騒乱罪を適用するだろうという前提です。後に高校の野球部の監督で甲子園まで行く人です。彼が 40 年たってから、ある証言でこんなことを言っているんです。

彼はコザ暴動の冒頭のころからいて、そこでミカン箱の上か何かに乗って演説をやるんです。「このまま沖縄はこれでいいのか」と。それこそ冒頭にあったウチナーンチュの発言とい

うのは、コザ暴動の現場でも多様な人たちが、ほぼだいたい同じようなことを言っているんですね。そうすると実は組織的にやっているんだと思うんでしょうけれども、そうではなかった。彼もそこである種のアジテーションをやって、いったんうちに帰って、それから 2〜3 時間たってから、また目が覚めたら、上空をヘリが飛び出したので、島袋三叉路の現場に行くのです。

そこでちょうど彼は銃口を向けて棍棒を持っている MP と琉球警察を見て、これはまずいと思ってこういうことを言うんです。「すでに我々の意志は示した。これで終わろう」というふうに。そう言うことによって三叉路の人が去っていったというのが彼の記憶なんです。ちょうど明るくなってきて、だんだんみんな帰るんです。

では、そこに至るまでの間、コザ暴動っていったいどんなものだったかというのを、「記録する会」をやってきた古堅さんに話してもらいたいと思います。

○古堅宗光

現在、修学旅行生とか、あとは大学のゼミの学生なんかを安心してコザで町歩きをするんですが、そのときにコザ暴動のことも当然お話しします。沖縄の戦後の歴史から始まって、町歩きの中に取り入れるんですが。実は僕は旧コザ市の生まれではなくて、生まれは与那国島で、台湾のすぐそばで。戦後は石川に、おやじが沖縄戦の生き残りなものですから、石川の捕虜収容所に、屋嘉に収容されていて、そのまま石川市というところに住み着きまして、そこで小学校 5 年までいました。

僕にとっても永遠に忘れられない事件というのが、小学校 2 年か 3 年ぐらいのときに、1955 年だったですかね、由美子ちゃん事件というのが起こります。6 歳の女の子がアメリカ人に拉致されて暴行されて嘉手納基地のごみ捨て場に捨てられた、遺体をですね。この目撃証言した子とは、いつも近所で遊んでいた仲間です。由美子ちゃん自身の、この子自体の顔はあんまり記憶にないんですが、証言している子供とは、いつもブランコとか遊んでなんかして。当時、石川市というのは、いろんな、沖縄戦の避難民とか、そのまま住み着いてできた本当にスラムみたいなバラックの。ある意味でいうと、戦後の難民キャンプみたいなところなんです。そこで小学校 5 年までいまして、その後、基地建設に伴って、うちのおやじもコザでダンプを持ったりして、いろんな運送業務に携わっていて、6 年生のときに 6 月 30 日、朝の 10 時、2 時間目か 3 時間目の授業のときに先生に呼ばれたんですね。

担任の先生に呼ばれて、「うちに帰れ」と言うから、「え」と言ったら、「君のいた、前の年までいた、宮森小学校という学校にジェット機、戦闘機が落ちた」と。「何十名も死んでいるから、親戚も近くにいろだろうから」ということで、うちに帰されたんです。当然おやじも車ですぐ石川市に駆けつけて救助の様子も見たんですが、そのときに前の年まで一緒に遊んでいた同級生が 3 名亡くなりました。1 人は後遺症で二十歳過ぎてから亡くなるんですが。そのときに 17 名か 18 名亡くなります。ジェット機は最初から学校に落ちたのではなくて、住宅地にいったん落ちてから、2 バウンド、3 バウンドして学校に突っ込むんですね。その最初に落ちた場所が前の年に僕の住んでいたうちから 50 メートルも離れてなかったんです。九死に一生を得たというか何というか。この 2 つの事件は僕にとっては戦後体験の原点みたいな大きな事件で、僕の周りで身近に起きた事件。

同じように実は 1945 年、沖縄戦中から米兵による、いろんな乱暴事件とか、いろんなものが起きます。当時、コザ暴動が起きる 2 年前の年には、糸満の事件のちょっと前なんです、

国場君という中学生が今の 58 号線の沖縄タイムスの前で米軍のトラックに轢き殺されます。歩行者は信号は青、当然車の信号は赤ですよ。だけど、軍法会議でこれも無罪になります。無罪の理由が、本当に笑うんですが、太陽が眩しくて信号が見えなかった、それだけで無罪です。

皆さんも思い出してほしいんですが、当時の沖縄には琉球警察は逮捕権・捜査権は一切ありませんでした、軍人・軍属に関して。だから、裁判官も軍人、弁護士も軍人、検察官も軍人、陪審員は全員軍人。身内が身内を裁くみたいなものですから、多くの事件で無罪。さっき話した由美子ちゃん、6 歳の女の子が暴行された。さすがにあれは懲役十何年か食らうんですが、でも本国に送還されて、しばらくすると、すぐ釈放されたということで、一番今日の都市と暴動の大きなテーマでもあると思うんですが、人権というのが植民地下ではほとんど見る事がなかったというので、マグマがだんだん溜まっていった時期だったと思います。

1970 年の復帰が 69 年から 70 年にかけて、アメリカ側と合意して復帰するのは確実に決まっている状況でもありました。だけど、ベトナム戦争はまだ終わってないですよ、当時 70 年というのは。終わるのは 75 年ぐらいだったと思うんですが。殺伐とした雰囲気の中で一番矛盾を受けたのがコザという町です。さっきも話があったんですが、タクシー強盗殺人とか婦女暴行殺人。今年起きた女性暴行事件が年に何回も起きたと思えば間違いないんですが、そのたびに裁判しても、ほとんどなしのつぶてみたいな感じで。コザ暴動の背景にはそのような沖縄戦後史のつらい歴史、悲しい歴史、血を流した歴史があるということを僕らは決して忘れてはいけないんですが、コザ暴動のときにまさにみんなが共有していた意識はそれなんですね。人権とか植民地の理不尽な圧政というか、民主主義に対する活動というか。別にインテリとか、そんな人でなくても、一般庶民に至るまで無意識の意識というのは共有していた。

ちょうどその時期に起きたのがこの事件で、本当に最初の人なんかは、軽く接触事故を起こして転んで、このときはタクシーで帰る。この人は 2 年前に亡くなったんですが、本人は翌日新聞を見てびっくりしたと思います。本当に小さいきっかけなんです、民衆の中にある無意識の意識の共有、マグマの溜まり方が実はこの暴動に発展する危険というのは、そのころ沖縄ではまだないんですが、本当に壮大な光景でした。炎の燃えている色と、炎の色が記憶に焼き付いていて、この暴動をどう捉えればいいのかということで、ずっと考え続けていた矢先に 40 年、2010 年ときに 40 年記念して、いろんな証言者の意見ももらおうということだったんですが。

コザ暴動の証言者の証言、いろんな方からもらう中でコザ暴動の特徴は先ほどからも話にあるんですが、本当に現場の無意識の意識の共有状態の現場ですので、まずリーダーが集団で指図してやる場ではなかった。リーダーがいなかった。世界中の暴動といわれるのを見ると、だいたい便乗して商店のスーパーの略奪・放火は絶対に起きています。それが一切なくて、逆に車を道の真ん中にひっくり返して集めて燃やしたということが 2 点目の特徴です。それと、さっきから話に出たように、暴力のベクトルが人に向かわなかった。車に向かった。黄色いナンバーの車に向かったということで、死者はもちろん 1 人も出ませんでした。この 3 つがコザ暴動の非常に大きな特徴だと思います。

ですから、これを「暴動」と言っているのかどうかというのが非常にコザでもよく話題になるんですが、僕らはあえて誇りを持って、これは「暴動」と言っています。非常に特異な暴動ということで、この 3 つの特徴を、逆に僕らとしては、コザの人間としては、誇りを持って暴動と言い

続けています。コザの中では「騒動」とか「事件」とか言う人はほとんどいません。実は経験した人間は誇りを持って「暴動」と言っています。その辺からまたコザの町の特長が出てくるんですが、それは後でまた。

○今 郁義

いえ、いえ、続けて語って下さい。

○古堅宗光

じゃあ、簡単に、これで最後みたいですから。なぜ死者が出なかったか、人に暴力が直接向かわなかったか。先ほど僕が目撃した通り、歩いていても手を掛けようとしなかった。実は戦後、嘉手納基地がどんどん拡張される中で、全国から世界からいろんな人がたくさん来ます。僕が住んでいたすぐ隣はフィリピン系の家族で斜め向かいがメキシコ系で、黒人もいたし、香港から来た中国人、インド人、結構混在していたんですね。基地と住宅と完全に分離された状況の町ではなかったんです、コザは。混在していた町で、当然米軍という組織に属しているアメリカ人にしろ、また軍属のインド人、香港の人とか、やっぱり違いが分かってくるんですね。もちろん違って当たり前。

でも、違って当たり前ということが本当に当たり前の世界なのかどうかというのが、よくよく考えてみると分かると思うんですが、例えば中国で反日暴動が起きたときに、上海でレストランまで入って行って引きずり出し、ぼこぼこやるとか、あっちこっちアメリカでも黒人暴動もそんな例があると思うんですが、コザの歴史の中で血を見て培ってきた精神というのは、やっぱり違いを認める力を自然と付けさせられたんだなと。その中には血が流れて涙もたくさん流れています。でも、その中から無意識のうちに違いを認める、多様性を認める力というか雰囲気というのは、コザで小さいときから育った人間が持っている、共有している感覚なんですね。

だから、この暴動のときもベクトルが個人のアメリカ人、外国人に向かわなかったというのは、これは僕らが言う、僕らはそれを「コザ精神」と言っているんですが。実はコザ暴動 40 周年の記録する会のときも、この精神を逆に忘れちゃいけないという言葉で始まりました。そういうことで今、コザ暴動、歴史の一コマではあるんですが、でもその中にひそんでいるのは、コザの精神というのは普遍的なものだろうと。今、まさにグローバリゼーションの中でも絶対に通用することだと思います。一人一人が国を、民族を、宗教を代表できるわけじゃない。違って当たり前です。違いを認める力がどう付いたかというのが、僕らがコザ暴動を検証する中で、ずっと問い続けてきたことだと思います。

○今 郁義

ありがとうございます。おそらく権力としては当時の時代状況から言えば、コザ暴動は騒乱罪を適用し、治安問題として処理したかった。だけれども、結局、治安問題として処理できなくて、コザ暴動は社会問題として検証されてきているんですね。今、古堅さんが言っていた宮森小学校のジェット機墜落の事故にしても、いろいろな人たちが語り継いできて、4～5 年前には映画『ひまわり』として完成しています。

コザ暴動は戦後史の沖縄を語り継いでいく中で非常に大きなファクターを占めてきているというのは、昨年からの写真展等で分かってきていると思います。そういう意味で写真の力なりについて、まぶいぐみでずっと活動されてきている豊光さんにとって、コザ暴動の写真の持っている力とはを解説して下さい。

○比嘉豊光

やっぱり今回 3 回目、この写真展をして、それは写真家個人に返ります。というのは、ここで皆さんが見て、その反応を見て、それが自分の写真、それぞれ 8 名の写真家がいまですけど、その人たちも含めて、この現場の声が必ず写真家にも届くんですよということも含めて、そういう写真展が初めてですよ、僕ら自身も。こういう形で、1 つのテーマで、たった 1 日の時間で、この展示会ができたということも含めてですけど、そういう意味では皆さんももっとちゃんと見てほしいというのは、ある意味では現場性というのは何だろうと。要するに新聞で毎日見る事件・事故の一面の写真と全然違うと思います。その違いというのは、いろんなパターンというか、たった 1 日で 100 枚のコマがあるということは、そんなに写真展でないんじゃないかなと。だから、そこも含めて、ある意味では今回、僕ら自身も初めてですし、たぶんいろんな展示会でも、こういう展示会というのではないんじゃないかなと思うんですけどねと含みながら。それはだから僕ら写真家に返ることですので、そういう意味で後で皆さんからいっぱい聞きたいなと思っています。

それで、先ほどコザ暴動の後に何が起きているかといえ、僕は沖縄闘争、コザ暴動、僕自身も写真の原点はコザ暴動なんです。そういう意味で原点、沖縄闘争というのは、これ以後、全軍労闘争、実を言うと、あの戦いのある意味では力強さというか、それはすごく感じますね。僕らはコザ暴動を撮りながらも全軍労のデモとかピケとかいっぱい撮っていたんですけど、やっぱり戦い方が違った。そして、今おっしゃった米軍自体も結局、鉄砲を持って前には出ていくけど、この人たちは鉄砲を持っても発砲はしないということも含めて、お互いの戦いの中に 1 つできたんじゃないかなと。

これは実を言うと、全軍労の牧青(牧港支部青年部の略称:編者注)の方からも、ちょっといろいろ話も聞いたことがあるんですよ。だから、それはその戦い、コザ暴動の後、民衆の暴動は二度と起こってないけど、結局、沖縄闘争、沖縄の戦い方に、ある意味では、すごく勇気を与えたんじゃないか。それは僕ら自身、僕と國吉和夫さんの今、写真をそこに置いているんですけど、いろんな戦いの写真を見ながらも、この写真なんかも要するにゲートを封鎖して、全軍労の人たちが戦いを挑んでいたんです、何回も。だから、それができたというのは、要するにコザ暴動の民衆の戦いが、ある意味では、その現場の、コザという町の戦い以上に、沖縄闘争にこれが僕は影響したと思っています。

そういう意味で先ほど、暴動が起こった後、何が変わったかというのは、すごい戦いのやり方。それはまた彼らの全軍労の力という、いろんな人たちがいるので、それはそれなりの力が結集しながら、やっていった結果だと思います。それ以外にも復帰闘争というのは全軍労なり、それぞれの組合なり、沖縄の人たちの反対闘争も含めて、いろんな影響がありました。そして、僕自身、ちょうど二十歳でしたけど、それ以後、そういう意味では沖縄闘争というのが写真の原点で、撮りながらして、今回、一緒になって展示会をする作業。そういう意味で我々自身が当時の写真をあらためて、もう一度現場に返すという作業をしながら、いろいろ、現場に返すという作業は現場の人たちが、もう一度、そのときを自分に問い返すというか。もちろんただ闘争の写真だけじゃなくて日常の風景も含めて、そういう作業の写真、ある意味では写真の力ということで、沖縄写真、まぶいぐみということで僕ら、今日来られなかった國吉和夫さんと小橋川共男さんと僕とを含めて、今日はここにいらしてないんですけど、ギャラリーのオーナーの秋友さんも含めて、そういう活動をしながら、写真のことをやっていっていますので、今後もだからコザ暴動も含めてですけど、沖縄の戦いというのは、まだまだ続きます。

後で小橋川共男さんもおっしゃると思うんですけど、今、高江とか辺野古の戦いもやっていますし、その現場の写真も今、撮っています。そういう意味では今後もそういうことをつなぎながら、もちろん大阪とか東京に見せるために僕は撮ってないです。沖縄のためにです。沖縄の現場を撮って沖縄の人たちをちゃんと、要するに戦っている人たちがいるので、僕は写真を撮れるのです。そういう意味で一緒になって、そういうことをやっていこうかなと思っていますので。また後で、皆さん、見た方の意見とか反応を僕は知りたいです。そうしないと、自分たちのとか、ある意味では沖縄に帰っても、東京ではこうだと、大阪ではこうだと、見ている側の反応がないと、写真を撮っている意味もないですので、そこら辺は後でよろしくお願いします。

○今 郁義

ありがとうございます。松村さんはコザ暴動を撮って、しばらくして東京に帰って、それからまた再び、コザ十字路の黒人街の写真を撮っていきますね。そのきっかけと、それから今も撮影されているか、お話しいただければと思います。

○松村久美

1969 年から住み始めまして、それでしばらくして 8 月の終わりだったと思いますけれども、新聞に「照屋で黒人暴動」という大きく「MP カーを 2 台燃やす」という記事が載りました。それで、そのとき初めて私は黒人街って何、黒人街ってあるのということを初めて知ったんですね、黒人の街がある。それで、そこでしばらくしてコザの照屋に通い始めました。そこは 100 軒ぐらい黒人だけを相手にレストラン、バー、ポーンショップ(質屋:編者注)、あとはバーバー、薬屋、刺繍屋さんが、黒人相手だけに商売しておりました。それで、その当時はベトナム戦争真っ盛りのころで、明日はベトナムへ行く、生きて帰れないかもしれない。それで、ベトナムから生きて帰ってきたアメリカ兵で、照屋は景気に沸いていたんですね。それで、目撃したことはないんですけども、大きなドラム缶にドル札があふれて足で踏んづけたとか、そういう話も聞きました。

それで、私はそこに通い始めて、いろんな黒人たちの夜の狂乱ぶりとか、そういう写真を撮っておりました。それと、あと昼間は黒人街で住む子供たちがバーの外で遊ぶ姿とか、要するに黒人街の様子を撮っておりました。それで、そのときはアメリカでも黒人解放運動というのが盛んでして、照屋の中でもブッシュマスターといってブラックパンサー、シンパですね。そういうグループがいくつかできまして、おそろいのジャンパーにワッペンを付けて、黒人運動をアピールといいますか、ブラック・イズ・ビューティフル、そういうものを、運動をしておまして、そのときも嘉手納の米兵が兵役を拒否したり、あと海兵隊の兵隊が脱走したりという、米軍の中でもベトナム戦争に対しての反対、だから基地の中から崩れていくような感じも受けました。

それで、それが 69 年・70 年に写真を撮りまして、それで 72 年の復帰の年の 12 月にいったん東京に帰ります。それで、そうしてまた行きたいと思ったんですけども、当時は石を投げたらカメラマンに当たるというぐらい沖縄・本土からのカメラマン・ジャーナリストがわんさか来ていたんですけども、復帰と同時に潮が引くごとく、沖縄はもう売れない、もう沖縄は済んだということで、みんな引き上げていったんですね。でも、私はそれはちょっと、これからじゃないか、おかしいんじゃないかということで、また 74 年から 76 年まで住み始めまして、海洋博前後ですね。78 年に南米の沖縄移民を 1 年間訪ねて、ボリビア、ペルー、ブラジル、ウル

グアイを1年間かけて沖縄移民を追いました。

その後、結婚して子供を生んで25年間、全く子育て、家庭の主婦をやりまして、沖縄は子供連れで遊びに2回くらい来ただけです。そのとき写真は撮っておりません。一応子育てが一段落して2006年からまた沖縄を撮り始めました。それで、私が通った照屋はどういうところになっているかといって、それで訪れたら黒人街はなくなっておりまして。街としてはありません。それで、その当時のAサインバーだったのも全然なくなって、バーだったあとが住宅になったり駐車場になったりして街は消えておりました。

でも、かすかな残像といいますか、何とかバーという看板があったり、ホテルの温泉マークが残っていたりというのがありまして。また通い始めたときに若い人たちが、照屋の銀天街の中の古いビルに住み始めてアート活動をしているのが見えまして、それでそこには沖縄の青年だけじゃなくてヤマトからもいろんな、埼玉出身やれ東京出身、大阪出身という若い人たちが住み込んでアート活動をしているんですね。だから、また別の町に変わっていつているんです。そこを私はまた撮り始めました。その子たちに話を聞いてみると、「僕たちは那覇ではできない。コザだから」、コザと言いませんね、「照屋だからできるんです」と。

それはなぜかという、さっき古堅さんの話にもありましたように、コザという町は異質のものに対して、まずは受け入れる、拒否はしない。だから、違うものに対しての垣根が非常に低いんですね。だから、彼らたちも非常に活動をやりやすいし、家賃も非常に安い。それで借りられるからアート活動ができるということで。それで、1年くらい町を撮り始めました。若い人だけじゃなくて、十字路市場というのがありまして、92歳のおばあさんが60年間、そこで雑貨をやっていたりとか、お惣菜屋さんがあったりとかということで、全く新旧の入り交じったチャンポンで面白い町になっていまして。黒人街を撮った69年・70年の写真と今の照屋銀天街の写真をまとめて、東京と沖縄で写真展をしました。これからもどんどんどん変わっていつている町で、やっぱりコザというものの特異性というか、人に対して、異質なものに対して受け入れるということの、証明じゃないですけども、そういう町をまたこれからも撮り続けていきたいと思っています。

○今 郁義

ありがとうございます。次に1972年に両親の古里の沖縄に初めて足を踏み入れてから、断続的にずっと沖縄に行って、なおかつその後、沖縄に住み着いている写真家の小橋川共男さんは白保を撮影したり、それから沖縄市の泡瀬干潟を撮影したりしております。今回、小橋川さんが撮った最新の映像を持ってきてもらっております。11月26日の高江のヘリポート現場の写真です。小橋川さんの写真への思いなんかを含めて、お願いいたします。

○小橋川共男

今、オスプレイがつい先日墜落という状況で高江ではヘリパッドは強行されて造られているという、そういう状況です。私もこの撮影、この建設現場へ入ったのは私も初めてですが、まさにここで沖縄の宝である山原という非常に豊かな森が崩され、そしてそこにヘリパッドという基地とつながるものを造ることが、どうしても許せないというか、理解できないんですね、私には。それをやろうとしているという日本の国というのは、どういう方向に向かうのかということ、やはりしっかりと私たちは発信していかなきゃいけないなということを思っているものですから、11月26日のだいたい10時半ぐらいから2時半ぐらいまでの約4時間、現場にいました。そのときの写真をこういう形で皆さんに見てもらいたいと思って今回、大至急作ってきた

という感じなんですけれども。

コザ暴動のときには直接的に米軍という権力に向かいましたけれども、今は私たちの 1 つの戦いというのは、米軍がもちろんバックに確実にあるわけなんですけれども、その前に日本の国、そして日本の国をどの方向に向けようとしているのかという、いわゆる権力の構造というんでしょうか、そういうものがまさに直接的に米軍と向き合うというのではなくて、そこに機動隊という非常に暴力装置を持つ権力者が、それをうまく操りながら、そしてそこには確実に沖縄県民同士を分裂させていくような、そういう構造を、要するに経済活動も含めて、やっているんだなということが、本当によく分かるという状況が今、高江の現場で本当にもろに見えるという、そんな状況を私は多くの人たちにもっと具体的に見てもらいたいというふうなことでやりました。

頻繁に行けるわけではないんですが、やはり私たち沖縄に住んでいる人間は、そういう現場の中で、しっかりと自分の目を開き、そういうものを撮ることによって県民にも発信するし、日本の国にも発信していくという、そういう役割をしっかりと持っていかなきゃいけないねということを強く思っています。今、青年が拳を上げているんですが、あれは我々が全部、アメリカ軍に閉じ込められました、追い詰められてね。機動隊がぐるっと私たちの周りを囲んでいるんですけれども、あの青年が立ち上がって、私はなぜここにいるのか、とうとうとしゃべりだしたんです。そうしたら機動隊の上のほうから指示が来たんでしょうね。あそこに並んでいた機動隊が全部さ一っといなくなりました。要するに、そういう言葉を聞かせたら困るというふうに判断したんでしょうね、権力の側はね。そんな状態がありまして、それも含めて今の沖縄の現状を、ほんの少しですが見てもらって、また共有してもらいたいなというふうに思っています。ありがとうございます。

○今 郁義

1 部の釜ヶ崎の暴動のときには、前線にずっと機動隊がたくさんいて、機動隊だらけの暴動でしたけど、実はコザ暴動では琉球政府の機動隊はほとんど出ていません。復帰することによって、日本の支配構造の中に入りました。その典型が今回の辺野古とか高江で、千葉とか大阪から機動隊が沖縄に派遣されるという事態になっています。今、それを小橋川さんはずっと撮り続けています。コザ暴動のころは写真を撮影し、暗室に入ってフィルムを現像して、それから引き伸ばしてプリントしてということによって初めて伝えることができたんですけど、現在はデジタル社会になって、幸か不幸か、撮影した映像が、すぐ CD にするなりして、皆さんの目に触れることができる。それを日本のメディアがどうやっているかというようなこともあるんですけど、先日、オスプレイが落ちたときに、沖縄の琉球新報と沖縄タイムスは、すぐに 2 版を作ったんです。11 時に 1 版を作って、それでもすぐ午前 1 時過ぎに刷り直しで、二刷りをしているんですね。そこで琉球新報は「オスプレイ墜落」という表現を使って、沖縄タイムスは「オスプレイ不時着」と書いたんですね。

現場の記者が送ってきた写真を見て、デスクがどう判断したかという大きな違いがあったと思うんですけれども、幸いというか、琉球新報は本質を突いて墜落。沖縄タイムスは翌日からリード文で墜落という表現をした。ところが日本のメディアはずっと終始一貫、「不時着して大破」というよう形で、本質を隠しています。これは昨日の琉球新報の朝刊ですけども、落ちたオスプレイを引き上げる写真です。米兵は白衣に、防毒マスクをして、オスプレイの解体と引き上げ作業をやっているんです。この写真は、実はほとんど本土のメディアで伝わってな

いんですよ。

それを何とか踏ん張って沖縄の地元のメディアは、こういう形で本質を突きながらやっているし、墜落してすぐ翌日に、水中カメラマンでダイバーである牧志治さんが、海中に潜ってオスプレイも撮影しています。幸いこれは共同通信が配信して全国にいくつか流れておりますし、今朝の TBS の『サンデーモーニング』で、関口宏さんの番組で牧志さんの海中でのオスプレイの映像が放送されました。とにかく沖縄の現状をどうするかというところで、さまざまな表現活動をしている人にとっては、正念場かもしれません。

では、70 年のコザ暴動が、現在の視点から見ると、どんな位置付けなのかということを、ずっと歴史研究してきている恩河さんに、コメントをいただければと思います。

○恩河 尚

歴史の側からどう見るかという司会のご指示でございます。ちょっと僕、先ほど行政用語でいうと答弁漏れしてしまいまして、アメリカの国立公文書館に音声資料は残っているのかというご質問だったと思います。僕らが行ったのは、文書資料を何とか集中して取ろうということで、それが一番大きな目的だったんですね。それで、結局 NARA (米国国立公文書館 National Archives and Records Administration の略称: 編者注) の 4 階か 5 階あたりに映像資料があるというのは知ってはいたんですけど、ちょこっと見ただけで調査はできませんでした。それで、結果としては音声資料があるのかどうかというのはちょっと分かりません。後で山崎さんあたりにフォローしていただければと思います。

本論に戻ります。私が思うに今回のプロジェクトの趣旨・目的というのは、今日は残念ながらご欠席の國吉和夫さん、我々が彼を聞き取り調査しているときに、ご発言いただいた言葉で、僕、頭の中に残っているのがございまして。何かというと、我々はコザ暴動から何を学ぶのかということ、そういった感じのことをおっしゃっていたんですね。まさにそうだなというふうに思っていて、非常に感銘を受けましたけれども。コザ暴動に関するアプローチというのは、いろいろあって然りという。政治の面から、あるいは基地問題の面からとかっていうアプローチは当然あって然りですし、先ほど比嘉豊光さんが「写真の力」というふうに発言なさっていましたけれども、そういったアプローチも当然あるわけですよ。いろんな方法論があって然りだと思うんですけど、我々歴史を学んでいる人間は、どういうふうにアプローチするのかということなんですけれども、我々歴史を学んでいる人間の方法論というのは基本的に 2 つございます。1 つは歴史的な背景という言い方をします。歴史的な背景。いま一つは歴史的意義という言い方をしますけど。

背景から説明させていただきますと、「なぜ」という言葉に集約されると思います。それをコザ暴動に置き換えますと、コザ暴動はなぜ起きたのか、そういうことだと思いますけど、それに対しては、かなりストックがあるというふうに見ていますし、例えばコザ暴動の遠因・近因というんですかね、近い要因、それから遠い要因というふうに分けてお話ししますと、近因に関しては先ほども山崎先生が詳しくご報告なさっていたので割愛いたしますけど、2 点だけちょっと補足いたしますと、当時、1970 年の 9 月の 18 日に糸満町、今、糸満市って沖縄本島南部にあるところで、米軍に轢かれて主婦が轢殺されるという事件が起こるんです。それがその年の 12 月の 11 日にスピード判決が出て、証拠不十分で無罪ということになって、それで県民は怒ったんですけれども、最近、地元の沖縄の新聞社が関係者を探り当てたみたいで、あれが無罪というのは間違いだったという証言を取っているんですね。そういったことが 1 つです。それ

から、1970 年、これはある研究者が報告しているんですけど、コザ暴動が起こった 1970 年というのは、1 年間で 960 件の軍人・軍属に関する事件が起こっていたという報告がございます。

それから、遠因ですけれども、極端な話、沖縄戦は 1945 年です。コザ暴動が起きたのは先ほどから言っていますように 70 年ですから、その 25 年間の異民族統治というんですか、米軍統治、それに尽きると思うんですけど、極端な話、古堅宗光さんから出てきていましたけれども、1945 年 4 月の米軍の沖縄本島上陸以来、たくさんの住民が沖縄戦で亡くなっていますし、本当に目を覆いたくなるような数の女性たちが米兵にレイプされたり、大変なことを経験しているんですね。極めつけは沖縄戦でお話ししますと、1945 年 6 月 18 日だったと思いますけど、サイモン・B・バックナー中將という方が、これは沖縄戦における連合軍の最高指揮官でございました。彼が日本兵の流れ弾というか、日本兵の弾に当たって亡くなっちゃうんですね。中將クラスが戦死したというのは今に至るまで、唯一の存在らしいです。それだけの偉い人が戦死したというのは、まずないという感じで歴史評価されているようなんですけど、中將が亡くなって、最高指揮官を失って、米軍が怒りまくるんです。それで、本当に軍民構わずといたしますか、手当たり次第に総攻撃を掛けて、たくさんの住民が亡くなっているということがございます。それ以降、70 年まで本当に数え切れないぐらいの米軍・軍人・軍属に係る事件に沖縄県民は巻き込まれてきたという、まさに 25 年間の異民族・米軍統治、これがコザ暴動の背景にあるだろうというのが 1 つです。

それから、問題は歴史的意義なんですけれども、意義というのは要するに、どう変わったのかという。沖縄が例えばコザ暴動を経験してどう変わったか。先ほど市立大学の学生さんの質問、まさにまとめているというか、それから豊光さんの話にもありましたけれども、コザ暴動を経験することによって、どう変わったのかというのがありますけれども、これは私の知る範囲で意外と研究とかがされてないんですね。ちなみに沖縄の地元新聞が、地史といいますか、歴史とか文化、自然、政治経済、いろんな多岐にわたって、『大百科事典』というのを作っているんです。その中でコザ暴動がどう評価されているかといいますと、裁判権の民移管要求、それから自治権の拡大、復帰運動へも大きな影響を与えたというふうに、新聞社の事典はそういう歴史評価をしていますけど、そういった感じで沖縄の、豊光さん流に言うと、沖縄闘争への影響があったんじゃないとか、沖縄の復帰運動に与えた影響、それから沖縄の人たちが持っている人権とかアイデンティティ、ひいては基地問題、それから先ほど来出ています名護市の安部というところにオスプレイは落ちたんですけども、全く沖縄国際大学に落ちた状況と同じなんです。その壁にあるのが、いわゆる地位協定といいますか、地位協定が大きな障害になって、米軍がオスプレイを調査しているのを、その周辺で海上保安部とか沖縄県警は黙って見ているという、そういった地位協定の改定の問題、それから政府を含む日本本土あるいはアメリカ本土、そういったところに、どういったコザ暴動というのは影響を与えたのかというのが、これから我々が果たすべきというんですかね、大きな仕事 await しているんじゃないかという。

それなりの背景とか状況に関してはかなりのストックがあるんですけども、肝心要のコザ暴動が与えた歴史的意義というのは、どんなものがあるのかというのを、これから山のような宿題を抱えている感じがしましたけれども、そういうような状況だというふうに感じています。以上です。

○今 郁義

恩河さんが言ったように、沖縄戦が終わって日本が敗戦して25年後にコザ暴動が起きて、25年間の記憶を、スパークする形でコザ暴動が起きました。コザ暴動が起きてから25年後に3人の米兵による少女暴行事件が起きて、95年10月に8万人の県民が集まって大集会して異議申立をしました。それから25年後というのは2020年なんです。世の中はたぶん東京オリンピックで騒いでいるかも分からないんですけど、今回のオスプレイの墜落事故とか、さまざまなことを含めて、日本政府、そしてアメリカの沖縄に対する政策変更なり、ないしは、どうするかという、たったボタンの1つの掛け違い次第では、2020年は沖縄は再び、今まで以上の壮大な異議申立をせざるを得なくなると思います。コザ暴動の今回の100点あまりの写真の中にその可否が隠されているかもしれません。

今回は1部で都市と暴動という形で、かなり普遍的な話をさせていただいて、2部で僕らが個別にコザ暴動のことを話ししながら、コザ暴動の持っている普遍性がより深まったかなという印象を持っています。間もなくお約束の2時間ですので、これで2部を終わりにしたいと思っております。その前に会場のほうからご意見をいただければと思うんですけど。感想なり何なりございますか。

○山崎孝史

僕個人としては2部になって帰るというのは、すごく悔しい。

○今 郁義

ただ、シンポジウムの1部・2部で、普通だったら2日かけてやるやつを1日でやって4時間……

○山崎孝史

それもあると思うんですけど、いったい何を聞きに来たんだ。

○今 郁義

主催者がそう言っているんですから、みんな(笑)。

○山崎孝史

そういう思いがあるので、僕も沖縄に行ったとき、そうなんですけど、受け取ったものは返していきたいなというのは、僕の思いとして常に。だから、大阪でどう返すかということを考えながら、今回、企画しているのが私の趣旨なんです。

○今 郁義

手を挙げてください、しゃべりたい人がいましたら。

○山崎孝史

これだけ聞いて「勉強しました」で帰っていくのか、こういうことは理解できましたという形で、こちら側に返すのかということはあると思うんです。

○今 郁義

どうぞ。

○フロア（参加者）から

催しそのものはチラシを見て、非常にコザ暴動そのもののワードは知っていたので聞きたいということと、もとは私、天王寺というところに住んでいましたので、西成というか、今、ボーダーがなくなってつながってしまったなというノリがあったので、ちょっとそれを見ときたかったということです。現在は図書館でレファレンスのことをやっています。感想を率直に言いますと、

自分、1 つだけちょっと思ったのは、皆さん、撮られている目というのが非常に自律的。勝手に撮られていると思うんですけど、それが非常に生き生きとったのかな。何が言いたいかというと、西成のビデオを見ていると、機動隊の後ろからとか、それはマスコミやからじゃないんですけど、機動隊の後ろから、要は盾のほうから見てこうでっせということで見えるという限界というんですか。我々のほうはそこまでまだいってなかったんやなというのが率直なところ。だから、それで悪いというわけでもないんですけど、気になったのが1つ。

それと、逆のことをいいますと、おそらく皆さん、そのことに対して思いを持たれているということは、今、語られていることが、どんどん上書きされていくんじゃないかと。つまり、事実は事実としてあるんですが、思いが先に走ってしまって、実は事実でないことを上塗りされていくということに懸念を持つ。それを悪いかどうかという、まあ、研究される人はそれに対して非常に率直に思われると思うんですけど、その辺をまた感じていただけたらと。

最後にちょっと脱線しますが、私はエル・ライブラリーという大阪では図書館に勤めているんですが、勤めているというかボランティアですけど。来年の5月に三池の資料の展示を、これはただでやります。確か西成のフィールドワークで、60年に三池闘争があって、働いている人がどんどん西成のほうに移動していったと。おそらくは推測ですけど、そこであった運動のボトムみたいなものが、具体的にそこで暴動を起こしたかどうかではないんですけど、どこかにつながっているのではなかろうかということも感じた次第です。雑駁なことを言って、すみません。ありがとうございました。

○フロア（参加者）から

私は東京から来たんですけど、今、大学院生で政策についてこれからやっていきたいなと思っているんですけど、都市における排除の話とかになっているときに、法と秩序を保つために公権力が排除していくみたいな論理があるというのを知って、すごい面白いなと思って。ちょうどこの間、『標的の村』という映画を見たんです。そこでびっくりしたのが、警察に対して対抗的なシーンというか、シット・インしていて、ゲートの前を塞いでいる人たちに対して警察が排除する以外にも、メディアが撮るという行動に対して排除することというのは、すごいびっくりして、また別の問題が入ってきちゃっているなというのを感じたんですけど、写真を撮られる方として、写真を撮るとか、そういうことに対しての上からの圧力みたいなものの掛かり方というのに変化があるのかとか、そういうのをちょっと知りたいなと思います。

○今 郁義

今、ここにいる写真家の皆さんはみんなフリーでやっているものだから、上からの圧力というのは、ほとんどたぶん無関係な人たちなだけで、『標的の村』で三上さんがその辺は描いていたと思うんですけど、都市政策を含めて、今、彼女の発言の中に、要は暴動なり何なりというのは町づくりに対して、どのような影響を与えているか、あるいは都市政策として行政なりが、どう生かしていくかということは、かなり大事なことだと思うんですけど、恩河さんにその辺、いわゆるまちづくりにおける、沖縄市における、コザ暴動だったら沖縄市のまちづくりなり何なりに対しては、どのような位置付けでやってきたか、もし分かる範囲であれば、お願いいたします。

○恩河 尚

結論は全く分かりませんが。我が町、いつもお話しするのは、沖縄市というところは、ご存じかもしれませんが、きれいな海とか山というのはないんですね。どうするかという、

我々、僕は元宮仕えなんですけど、公務員時代、現役時代に話し合っていたのは、歴史とか文化、そういった沖縄市が持っている個性を生かしたまちづくりをしようというような感じでやっています、コザ暴動の事件うんぬんというのは、基本的には我々スタッフ、職員と話し合っているのは、臭いものには決してふたはしない。でも、そういう経験をしたからこそ、それこそ今さんじゃないんですけれども、コザの個性が出ているんじゃないかという、そういったところを生かしていこうよ、みたいな話し合いはしていますけれども、ちょっと全く答えでないと。

○今 郁義

やはり都市というか行政にとっても否定的なところをスルーするのではなくて、それを含めたまちづくりだと。そういう意味では沖縄市で『米国が見たコザ暴動』という、行政が出した公文書の中で、「暴動」という形を行政の発行物に出したというのは、おそらく初めてだろうと思います。書く以上は、かなり肯定的な意味合いも含めて書いているわけです。その前に『KOZA』という写真集を出したときに、米兵が女と浜辺で戯れている、写真家の栗原達男さんが当時撮った写真なんですけれども、実はこれも沖縄市が発行した写真集の中にあります。もちろんコザ暴動の写真もあります。

○小橋川共男

ちょっといいですか。

○今 郁義

はい。

○小橋川共男

先ほど彼女が質問してくれたので。私たちはみんなフリーなものですから、そういう面での圧力はないんですけれども、ただ私たち以上に権力の側は、今はいろんなカメラが、あっちからもこっちからも映されています。それは非常に異様な僕は光景だなと、いつも思うんですけれども。我々の側も、我々って変だけれども、要するに抵抗している人たちも、結局なぜ皆さんもマスクをして、みんな顔を見せないように、そういう形の戦いなんです。僕はこれがすごく異常だなというのは、結局 1 人を特定されることの、権力は一人一人を特定することによって、いろんな形での圧力の掛け方が、たぶん生まれているんだろうなというふうなことを思うので、その部分での非常に異様さというのかな、ことを本当に強く思いますね。それだけ。

○比嘉豊光

最後になっていろいろしゃべりたくなくて。コザ暴動の後の警察とか権力側の、何というか、彼らもだからある意味では、住民のパワーというのを味わうから、その後のアメリカ側も、もちろん警察も、沖縄闘争とか全軍労の戦いとか、あんまり逮捕者を出さないというか、要するにぎりぎりの線まで彼らも引いていくんです。そういうメディアはだから、先ほどの釜ヶ崎でも「またやったほうがいいよ」というのは当然、当然というか。だから、それは民衆の戦いの力、お互いの戦いの力だと思うんです。そういう意味で写真とかメディアの力というのは、すごい大事だと思います。だから、僕ら自身もこの戦いを撮るときに、さっき言った要するに盾の後ろからじゃなくて、盾の平行線か、盾のあっち側、要するに戦いの側からという、常にそのラインで動くんですよね。今の機動隊は最初から、おっしゃったように目を付けているから、そういうカメラマンも目を付けられるんです。ちょっと違法行為をしたら、カメラマンとか、それをやっつけるという、彼らは今、やっています。そういう意味では、そこら辺との戦いもしながら、もちろんそれは僕らだけじゃなくて民衆も含めての戦いだと思っていますので、それが今後、ある意味で

はコザ暴動がもう 1 回起こらないと、ある意味では沖縄はそのままだね、ずっとずっと今回のオスプレイが墜落しても何もできない沖縄だったら、しょうがないなということも、僕らも含めて考えていますので、それ以外の日本の人たちも、ちゃんとそこら辺も考えて沖縄問題に目を向けてくださいということも含めて、よろしくお願いします。

○今 郁義

じゃあ、最後に、はい。

○フロア（参加者）から

先生のほうからもありましたように、写真と今日の催しを見て感じたことだけを一言申し上げます。つまり、本土で私もいろんな仕事柄、いろんなコザとの付き合いもあるんですけども、例えば展示会で広島・長崎はやるとか、あるいは東京空襲・大阪空襲をやる。参加者の反応を見ていますと、こんなひどいことがあったのか、この時代に生まれなくて良かったな、今はいい時代になったんだなという感想が、非常に若い方には多いというのが、非常につらい思い出です。今は立派な平和祈念資料館になりましたけど、まだ摩文仁の丘の一番端にあって観光コースから外れている、あの小さなときの平和祈念資料館の学芸員の方、今はあっちのほうへいっていますけど、ご協力を得て本土で初めて沖縄戦をやったことがあるんですが、そのときは皆さんは「知らなかった」と言う方が圧倒的に、そうですね、どこでも歴史も学ばなくてという、そんなことがありました。

そういうことを前提に言いますと、今日の写真とコザ暴動のお話というのは、過去の不幸な出来事とか、今の時代になって良かったねじゃなしに、まさに今の進行形の話、今に続いている話、これが僕が感じるコザの魅力なんです。済んだこと、つらかったことをおしまいにして、違うほうにギアチェンジするのではなくて、連続の中で今があるんだという、古堅さんの言葉で言えば、多様性の中で今までも生きてきたし、これからも生き続けるんだというお話が大変感動的で、写真もそういう写真なんだなと。もしかすると我々は広島・長崎の写真も含めて、そういう過去の不幸な出来事という見方でしか見てなかったということがあるけれども、沖縄というのは違うんだな。ここからウチナーとヤマトの関係づくりが何かできるのではないかというようなことを感じましたので、一言申し上げました。

○フロア（参加者）から

今日は大変勇気づけられるお話を多数いただきまして、コザの皆様、それから第 1 部の報告者の皆様に、まず厚く御礼を申し上げます。私は、暴動の問題というのは、1 つの民主主義の一形態であって、そして一般に民主主義というと、例えば選挙をするだとか、法の中で行わなければいけないという、常識というか、あるわけだけれども、実は民主主義というのはそうではなくて、法律というものがそれ自体、権力が決めたものですから、そのラインというものを、どういうふうに考えて、どういうふうにそこから、例えばあるときにははみ出して、しかしながらコザ暴動に見られるように、きちんとした何がターゲットであるかということを明確にしながら攻撃をしていくと。それは権力が決めた法律から見れば、法律違反だったから逮捕だということになるかもしれないけれども、それもあくまで民主主義の 1 つの一形態であって、それによって社会というものが大きく変わっていくということがあるんですね。それは決して暴動だけではなくて、他のいろいろな民主主義という枠を超えるような、例えばインターネットのことであったか、いろいろなやり方、戦術というものが民衆の側にあるわけです。そういったものを、もう 1 回、今回の研究会の中で再評価していく、そういった形で民衆というものが権力にどう

やって立ち向かって、より民主主義的な社会をつくっていくかというようなことを考えていかなければいけないというふうに私は思うんです。

戦後でも、第1部の報告では戦前の東京の事例が紹介されましたけれども、決してその戦いというのは、例えば労働者階級と、それから資本家だけじゃなくて、例えば公共サービスの問題なんかもそうですね。戦後の東京地域で取り上げなきゃいけない私の大きな事例というのは上尾事件だと思います。当時の国鉄が非常に劣悪な公共交通サービスをやっていて、通勤者が非常に大きな苦難を強いられていた。それに対して上尾事件というのは立派な、私は今日の単語で言えば「暴動」だと思います。しかし、それによって東京の首都圏の交通ネットワークというのは、だいぶ改善されたわけですね。今、上野東京ラインとか、できたりしていますから。

ですから、そういったような形で、もっとそういったような、いろいろな、いわゆる権力によれば非合法というレッテルを張られているような、しかしそれは民衆にとっては非合法でないかもしれない。それはなぜならば本当の民主主義というものは、権力の法律によって決められるものではないからです。そういったものを我々はもっと発掘し、積極的な意義というものを見出していく必要があるのではないかということを、今回、私は非常に強く感じまして、その点で勇気づけられたことにコザの皆様、今日の発表者の皆様に御礼申し上げたいと思います。

○今 郁義

どうもありがとうございました。それでは、これで何回も締めるわけにいきませんので、これで第2部を終了いたしまして、この後、主催者の山崎先生にバトンタッチします。

○山崎孝史

本日は長い間、皆さん、残っていただきまして本当にありがとうございます。

